菅城遺跡

SUGESHIRO ISEKI

中山間地域総合整備事業
（柚ノ木地区圃場整備）予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

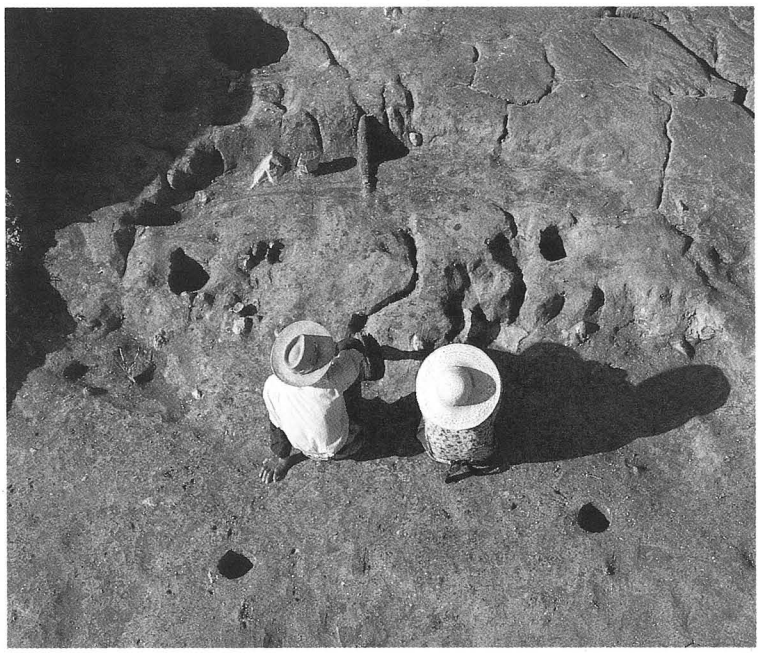
1996年3月

島　　根　　県
羽須美村教育委員会

菅　城　遺　跡

SUGESHIRO ISEKI

中山間地域総合整備事業
（柚ノ木地区圃場整備）予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書



１９９６年３月

島　　根　　県
羽須美村教育委員会

序

羽須美村には平成４年３月現在、83の周知の遺跡が存在し、その６割以上が製鉄関連のものであり本村の特徴といえます。しかし、羽須美村ではこれまで綿密な分布調査が実施されておらず、これから発見される遺跡も期待される反面、記録保存という形でしか残し後世に伝えられない遺跡も増え続けるのでしょう。このような現状において羽須美村教育委員会は、文化財の保護・活用を含めた開発こそ真の開発であるとして、開発事業や土地所有者（原因者）のご理解とご協力をお願いしているところです。

菅城遺跡は昭和47年頃、水田の排水工事中、須恵器が出土したことにはじまり、その地形から住居跡があると考えられていました。平成５年度、圃場整備計画に伴い、その計画地内に存在する菅城遺跡の取り扱いについて協議した結果、記録保存を行うこととなりました。

平成５年度、調査を担当できる人材のなかった羽須美村では、県文化財保護指導委員の吉川正氏に依頼し、まず不明確であった遺跡の範囲を確認するための試掘調査を行い、同時に平成６年度にかけ調査員を養成し、平成７年度、菅城遺跡の本調査を行いました。

羽須美村では初めての遺跡の記録保存であり、未熟な点や多くの問題を抱えておりますが、一歩一歩確実に文化財の保護・活用体制の充実、質の向上をはかっていきたいと考えております。

最後になりましたが、菅城遺跡の記録保存にあたり、地元の方々、関係機関、吉川正氏をはじめ多くの方々にご指導とご援助を賜りましたことを厚くお礼申し上げるとともに、菅城遺跡の発見を含め羽須美村古代史の先駆者である横山純夫氏には心から感謝する次第です。

今後とも羽須美村の文化財保護・活用にご協力頂きますようお願い申し上げます。

平成８年３月

羽須美村教育委員会

教育長　加　藤　芳　藏

例　　言

1．本書は、羽須美村産業課の委託を受け、羽須美村教育委員会が平成７年度に実施した、中山間地域総合整備事業（柚ノ木地区圃場整備）予定地内「菅城遺跡」の発掘調査報告書である。

2．調査体制は次の通りである。（平成７年度）

調査主体　羽須美村教育委員会

加　藤　芳　藏（教育長）

事務局　　社会教育課

岡崎美和子（社会教育課長）

井上　有枝（社会教育係長）

三上　和彦（社会教育主事）

兼正　浩子（社会教育指導員）

調査員　　角矢　永嗣（社会教育課主事補）

調査指導〔敬称略〕

今岡　一三（島根県教育庁文化財課）

吉川　　正（島根県文化財保護指導委員）

発掘作業員

有江甫・井上桂・岩谷清子・沖田康則・奥田末人・河野静人・五島徳晴・五島吉彦
五島雅昭・斉藤登・佐々木孝淼・佐々木強・栩木良二・広高章・広高光江・日野岡キクエ・藤川幸子・三上オイマ・三上貴子・三上純・三好安江・宮口義登・築迫誠

整理作業員　三好順子

3．発掘調査・現地説明会及び本書作成にあたり、次の方々の助言・協力を得た。〔敬称略・順不同〕

振井久之（大和村教育委員会）・唐溪由美子・三上智彰・森岡弘典（瑞穂町教育委員会）
藤田陸弘（瑞穂町教育委員会）・古川健二・田中迪亮（島根県文化財保護指導委員）・森仁市
田桑正喜・久保田浩二（金城町教育委員会）・野坂俊之（湖陵町教育委員会）・水口晶朗
西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）・守岡正司（島根県埋蔵文化財調査センター）
穴澤義功（房総風土記の丘研究員）・間野大丞（島根県埋蔵文化財調査センター）
宮本徳昭（島根県埋蔵文化財調査センター）・丹羽野裕（島根県埋蔵文化財調査センター）
椿真治（島根県埋蔵文化財調査センター）・勝瀬利栄（島根県埋蔵文化財調査センター）
岩橋孝典（島根県埋蔵文化財調査センター）・池淵俊一（島根県埋蔵文化財調査センター）
大本公良（島根県埋蔵文化財調査センター）・深田浩（島根県埋蔵文化財調査センター）
東森晋（島根県埋蔵文化財調査センター）・寺谷隆（島根県埋蔵文化財調査センター）
中川寧（島根県埋蔵文化財調査センター）・佐伯徳哉（島根県古代文化センター）
松本浩（東出雲町教育委員会）・錦田充子・広江耕史（島根県教育庁文化財課）

また、日高伊三、日高亘、丸原巧、岡本昇吾、口羽万造（以上、羽須美村文化財審議委員）はすみ史楽会・阿須那公民館・公報はすみ・口羽郵便局・老人福祉センター羽須美荘　等々

尚、土地所者、嘉野徳男はじめ地区の方々・㈱鋳物組・羽須美村産業課には、ご理解と多大なご配慮ご協力を頂いた。前述の皆様方に記してご謝意を表したい。

4．遺跡での撮影は、主に河野静人の補助を得、角矢が行った。

5．基本土層・遺構遺物の出土状況の実測は、主に五島雅昭、河野静人の補助を得て角矢が行った。

6．遺物の実測は、岩橋孝典・広江耕史・西尾克己の指導・参加を得、角矢が行った。

7．基本土層図・遺構、遺物の出土状況図・遺物実測図のトレースは、三好順子が行った。

8．本書に掲載した遺物写真は、瑞穂町教育委員会の協力を得て古川健二、角矢が行った。

9．本書の編集執筆は、前述の方々の助言・協力を得て、角矢が行った。

10．本書で使用した遺構記号は次の通りである。

ＳＩ…竪穴住居　ＳＢ…掘立柱建物　ＳＫ…土坑　ＳＲ…自然流路（旧谷川）

ＳＸ…その他の遺構　Ｐ…ピット（柱穴）

11．挿図中の方位は、国土座標による第三座標系の軸方位に準じ、レベル高は標高を示す。

12．挿図の縮尺は、図中に示した。凡例、**（１：３）**＝３分の１　また挿図中Ⓢはストーンである。

13．凡例、挿図中、**第●▲図の遺物番号■**は、**●▲－■**と記す。図版中、**西➡**は、被写体を西側から撮影の意。

14．凡例、本文中[4]は、註[4]であり、参考、引用文献・助言、指導内容である。（47ページに記す）

15．**図版１ａ.**は、山陰航空事業社（1989年10月　高度600mから撮影）のフィルム（複写）を購入し、トリミングし、使用した。

16．本書に掲載した**第１図**は、中央地図株式会社が建設省国土地理院の承認を得て複製した羽須美村全図**（１：25000）**をトリミングし、使用した。

17．本遺跡出土の遺物及び実測図・写真等の記録資料は、羽須美村教育委員会が、羽須美村きねづかセンター内に管理保管している。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
第３章　調査の概要と経過 …… 4
第４章　遺構と遺物 …… 7
(1)　基本層序 …… 7
(2)　竪穴住居 …… ＳＩ０１～０３ …… 7
(3)　掘立柱建物 …… ＳＢ０１～０２ …… １５
(4)　土抗 …… ＳＫ０１ …… ２３
(5)　その他の遺構 … ＳＸ０１ …… ２４
(6)　旧谷川 …… ＳＲ０１～０４ …… ２８
(7)　流れ込み遺物 …… ３３
第５章　調査の成果と課題（まとめ） …… ４５
註（引用・参考文献） …… ４７

挿　図　目　次

第１図　菅城遺跡　位置図 …… （１：25000） …… 3
第２図　菅城遺跡　調査前地形測量図・調査区設定図 …… 5
第３図　菅城遺跡　調査後地形測量図・遺構配置図 …… 6
第４図　菅城遺跡　基本土層断面図（第２図Ａ－Ａ′） …… 8
第５図　菅城遺跡　ＳＩ０１実測図 …… （１：60） …… 9
第６図　菅城遺跡　ＳＩ０１出土遺物実測図 …… （１：３） …… 9
第７図　菅城遺跡　ＳＩ０２実測図 …… （１：60） …… １０
第８図　菅城遺跡　ＳＩ０２断面図・炉出土状況図 …… （１：20） …… １１
第９図　菅城遺跡　ＳＩ０２出土遺物実測図 …… （１：２） …… １２
第10図　菅城遺跡　ＳＩ０３遺物出土状況図 …… （１：30） …… １３
第11図　菅城遺跡　ＳＩ０３実測図 …… （１：60） …… １４
第12図　菅城遺跡　ＳＩ０３出土遺物実測図 …… （１：３） …… １４
第13図　菅城遺跡　ＳＢ０１実測図 …… （１：60） …… １５
第14図　菅城遺跡　ＳＢ０１断面図 …… （１：30） …… １６
第15図　菅城遺跡　ＳＢ０１出土遺物実測図 …… （１：３） …… １６
第16図　菅城遺跡　ＳＢ０２実測図 …… （１：40） …… １８
第17図　菅城遺跡　ＳＢ０２遺物出土状況図 …… （１：30） …… １９
第18図　菅城遺跡　ＳＢ０２出土遺物実測図 …… （１：３） …… ２１
第19図　菅城遺跡　ＳＫ０１実測図 …… （１：20） …… ２２

第20図　菅城遺跡　ＳＫ０１出土遺物実測図 ……（１：３）…… ２３
第21図　菅城遺跡　ＳＸ０１実測図 ……（１：60）…… ２４
第22図　菅城遺跡　土層断面図（第２図Ｂ－Ｂ′）…… ２６
第23図　菅城遺跡　ＳＲ断面図（第27図Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′）…… ２７
第24図　菅城遺跡　ＳＲ０１平面図 ……（１：150）…… ２８
第25図　菅城遺跡　ＳＲ０１断面図 ……（１：60）…… ２８
第26図　菅城遺跡　ＳＲ０１・ＳＲ０４出土遺物実測図 ……（１：３）…… ２９
第27図　菅城遺跡　ＳＲ０２・ＳＲ０３平面図 ……（１：150）…… ３０
第28図　菅城遺跡　ＳＲ０２出土遺物実測図 ……（１：３）…… ３１
第29図　菅城遺跡　ＳＲ０３断面図・遺物出土状況図 ……（１：15）…… ３３
第30図　菅城遺跡　ＳＲ０３出土遺物実測図 ……（１：３）…… ３３
第31図　菅城遺跡　流れ込み遺物実測図……（弥生中期）……（１：３）…… ３４
第32図　菅城遺跡　流れ込み遺物実測図……（弥生後期）……（１：３）…… ３５
第33図　菅城遺跡　流れ込み遺物実測図……（古墳～奈良）…（１：３）…… ３７
第34図　菅城遺跡　流れ込み遺物実測図……（中世No.１）……（１：３）…… ３９
第35図　菅城遺跡　流れ込み遺物実測図……（中世No.２）……（１：３）…… ４１
第36図　菅城遺跡　耕盤最下部包含遺物実測図…（江戸）……（１：３）…… ４３

遺物観察表目次

第６図　菅城遺跡　ＳＩ０１出土遺物観察表 …… １０
第９図　菅城遺跡　ＳＩ０２出土遺物観察表 …… １２
第12図　菅城遺跡　ＳＩ０３出土遺物観察表 …… １４
第15図　菅城遺跡　ＳＢ０１出土遺物観察表 …… １７
第18図　菅城遺跡　ＳＢ０２出土遺物観察表 …… ２１
第20図　菅城遺跡　ＳＫ０１出土遺物観察表 …… ２３
第26図　菅城遺跡　ＳＲ０１・ＳＲ０４出土遺物観察表 …… ２９
第28図　菅城遺跡　ＳＲ０２出土遺物観察表 …… ３２
第30図　菅城遺跡　ＳＲ０３出土遺物観察表 …… ３３
第31図　菅城遺跡　流れ込み遺物観察表 ……（弥生中期）…… ３４
第32図　菅城遺跡　流れ込み遺物観察表 ……（弥生後期）…… ３６
第33図　菅城遺跡　流れ込み遺物観察表 ……（古墳～奈良）…… ３８
第34図　菅城遺跡　流れ込み遺物観察表 ……（中世No.１）…… ４０
第35図　菅城遺跡　流れ込み遺物観察表 ……（中世No.２）…… ４１
第36図　菅城遺跡　耕盤最下部包含遺物観察表 ……（江戸）…… ４４

図　版　目　次

図版１ａ．菅城遺跡　遠景　1989年　南→……50
ｂ．菅城遺跡　発掘調査前　全景　南→……50
図版２ａ．ＳＩ０１・ＳＢ０１検出状況　南→……51
ｂ．ＳＩ０１　北西→……51
ｃ．ＳＩ０１遺物６－１出土状況（Ｐ－１東南）……51
図版３ａ．ＳＢ０１・ＳＩ０１・ＳＫ０１　西→……52
ｂ．ＳＢ０１周溝　土層堆積状況　東→……52
ｃ．ＳＢ０１周溝（新）遺物出土状況　東→……52
図版４ａ．ＳＩ０２　南西→……53
ｂ．ＳＩ０２壁溝内　遺物９－２出土状況……53
ｃ．ＳＩ０２炉跡・　遺物９－１出土状況　東→…53
図版５ａ．ＳＩ０３　北西→……54
ｂ．ＳＩ０３壁溝内　遺物12－１出土状況　東→…54
ｃ．ＳＩ０３壁溝内　炭化物出土状況……54
図版６ａ．ＳＢ０２　北西→……55
ｂ．ＳＢ０２内　浅い溝検出状況　東→……55
ｃ．ＳＢ０２遺物出土状況　北西→……55
図版７ａ．ＳＢ０２壁溝内　遺物18－３出土状況……56
ｂ．ＳＢ０２壁溝内　遺物18－４出土状況　西→…56
ｃ．ＳＫ０１　北西→……56
図版８ａ．ＳＫ０１遺物出土状況　東→……57
ｂ．ＳＸ０１　東南→……57
ｃ．ＳＸ０１土層検出状況　東南→……57
図版９ａ．旧谷川跡　南→……58
ｂ．旧谷川跡　北→……58
図版10ａ．ＳＲ０３遺物30－１出土状況（Ｇ－６区）　北→…59
ｂ．ＳＲ０２遺物28－３出土状況（Ｇ－６区）　西→…59
図版11ａ．ＳＲ０２遺物28－15出土状況（Ｇ－５区）　南→…60
ｂ．ＳＲ０４　Ｔ－Ａ完掘状況　東南→……60
ｃ．ＳＲ０４　Ｔ－Ｂ完掘状況　北→……60
図版12ａ．ＳＩ０１出土遺物６－１……61
ｂ．ＳＩ０２出土遺物９－２……61
ｃ．ＳＩ０３出土遺物12－１……61
ｄ．ＳＩ０３出土遺物12－２……61
ｅ．ＳＩ０３出土遺物12－３……61
ｆ．ＳＢ０２出土遺物18－３……61
図版13ａ．ＳＢ０２出土遺物18－４……62
ｂ．ＳＢ０２出土遺物18－７……62
ｃ．ＳＫ０１出土遺物20－２・20－４……62
ｄ．ＳＲ０１出土遺物26－８……62
ｅ．ＳＲ０１出土遺物26－11……62
ｆ．ＳＲ０２出土遺物28－１……62
図版14ａ．ＳＲ０２出土遺物28－３……63
ｂ．ＳＲ０２出土遺物28－10……63
ｃ．ＳＲ０２出土遺物28－15……63
ｄ．ＳＲ０３出土遺物30－１（Ｓ47年出土）……63
ｅ．ＳＲ０３出土遺物30－３……63
ｆ．流れ込み遺物31－３……63
図版15ａ．流れ込み遺物32－16……64
ｂ．流れ込み遺物32－18……64
ｃ．Ｓ47年出土33－１（樽型瓦）……64
ｄ．流れ込み遺物33－７……64
ｅ．Ｓ47年出土33－14（蓋なら上下逆）……64
ｆ．流れ込み遺物33－15……64
図版16ａ．流れ込み遺物33－16……65
ｂ．流れ込み遺物（上段）白磁器・（下段）青磁器……65
ｃ．流れ込み遺物32－８他　天目茶碗……65
ｄ．流れ込み遺物35－２他　土師質土器……65
ｅ．流れ込み遺物34－10他　東播系片口鉢他……65
ｆ．流れ込み遺物　漆器椀（Ｆ－３区周辺）……65
図版17ａ．耕盤最下部36－５他　肥前系（染付）……66
ｂ．耕盤最下部36－９（焼継ぎのある染付）……66
ｃ．流れ込み遺物　縦型石匙と黒曜石片……66
ｄ．流れ込み遺物　敲石と擦石……66
ｅ．流れ込み遺物　木片に墨書……66
ｆ．流れ込み遺物　炉壁（鈩製鉄）……66
ｇ．流れ込み遺物　ゆ溜り滓（鈩製鉄）……66

第１章　調査に至る経緯

菅城遺跡は、島根県邑智郡羽須美村大字戸河内1124番地外（柚ノ木地区）の現水田内に所在する。昭和47年（1972年）頃、『スゲシロ』という土地の水田内で、暗渠排水工事中、須恵器片が出土したことと、戸河内川北側の段丘斜面という立地条件などから、住居跡があると考えられ周知の遺跡［島根県遺跡地図II（石見編）G18］となっていた。

平成５年（1993年）羽須美村は、中山間地域農村活性化総合整備事業「柚ノ木地区圃場整備」計画に伴い、予定地内に存在する菅城遺跡の取扱いについて協議した結果、記録保存を行い除去するという結論に達した。しかし埋蔵文化財担当者のなかった羽須美村教育委員会は、島根県文化財保護指導委員の吉川正氏に依頼し、同年、不明確であった遺跡の範囲を確認するための試掘調査を行った。試掘調査の調査体制・期間は、次の通りである。

調査期間　平成５年６月～８月
調査主体　羽須美村教育委員会
　　加藤　芳藏（教育長）
事 務 局　社会教育課
　　富永平八郎（社会教育課長）
　　田中　節也（社会教育係長）
　　土居　達也（派遣社会教育主事）
調 査 員　吉川　　正（島根県文化財保護指導委員）
調査補助員　角矢　永嗣（羽須美村教育委員会嘱託）
調査指導　熱田　貴保（島根県教育庁文化課）〔敬称略〕
発掘作業員　井上素直・岩谷清子・梅田義富・河野保・斎藤登・斎藤徹修・須波亘・寺畑啓四郎
　　栩木良二・日高エルコ・日高浩二・日高隆・広高章・広高光江・藤川昭信・三上利幸
　　三上斉・宮口義登

調査にあたり、林原修（島根県川本農林土木事務所）・中田健一（石見町教育委員会）の協力・助言を得た。〔敬称略〕

写真撮影は主に角矢が、土層実測図は吉川・角矢が分担して行った。遺物整理は角矢、遺物の接合、遺物実測及び『戸河内柚ノ木　菅城遺跡試掘調査の概要』の編集執筆は吉川正が行った。

その夏の長雨や集中豪雨により、トレンチの壁が崩れるなどの被害を受け難航したが、一部にピット、谷川の旧流路と考えられる溝、そしてほとんどの出土遺物は、同一の包含層からの流れ込みと思われるものであったが、縄文時代の一時期・弥生中期中葉以降～中世に至る遺物が出土し、この辺りでかなり長期間にわたる集落が営まれていたことが判明した[1]。調査後、試掘のデータをもとに本調査区を設定し、他の水田は圃場整備された。そして、平成７年度事業で発掘調査を行った。

第２章　遺跡の位置と環境

羽須美村は、島根県のおよそ中央部邑智郡の南東部に位置し、北は大和村、西に瑞穂町、そして南は広島県高田郡高宮町・美土里町、東に江ノ川を隔て広島県双三郡作木村と接する県境の地である。

村の中央を江ノ川支流出羽川が東流し、川沿いの標高約170mのところに阿須那の街、標高約110mに口羽の街がある。(昭和32年２月11日、旧口羽村・旧阿須那村が合併し羽須美村は誕生した。)

大字戸河内は羽須美村の南に位置し、広島県高宮町・美土里町に接する山間の地で、戸河内川（長田川）沿いに耕地を持つ集落は、阿須那の街との標高差100～200mの高原地帯となっている。この地域は標高400～500m前後の比較的なだらかな山々に囲まれた中国山地特有の準平原地帯であって、阿須那・口羽地区が出羽川によって浸食された深い渓谷地形となっているのとは好対照をなしている[1]。また、羽須美村は地理的に考えて、古代から山陽との文化経済の関わりが強いことが容易に想像できる。しかしながら、調査地である戸河内の歴史的資料は以外に少なく、その歴史についてよくわかっていない。『島根県の地名』山本清監修の羽須美村『戸河内村』に次のとおりあるので、前後省略し引用する。

『…（略）…中世には安須那庄のうちに含まれていた。康応二年（1390）筆写の大方広仏華厳経（広島県東広島市大神宮社蔵）の奥書に、「安須那庄戸河内村」の正法庵において無照光公禅師を願主として筆写されたことが記される。天文十一年（1542）三月三日に飯田新五郎に「戸河内ゆの木名之内家の面三反、土橋面二反」が、同十日には中村新右衛門尉に「戸河内代名内まこもさこ六段」が給地として宛行われている（ともに「毛利元就宛行状」譜録）。阿須那村大庭から戸河内峠を越えて戸河内川（長田川）に沿う古道は、中世から上田村長田を経て備後三次へ至る往復路で、阿須那牛馬市への商人・牛馬の要路であった。…（略）…』[3]

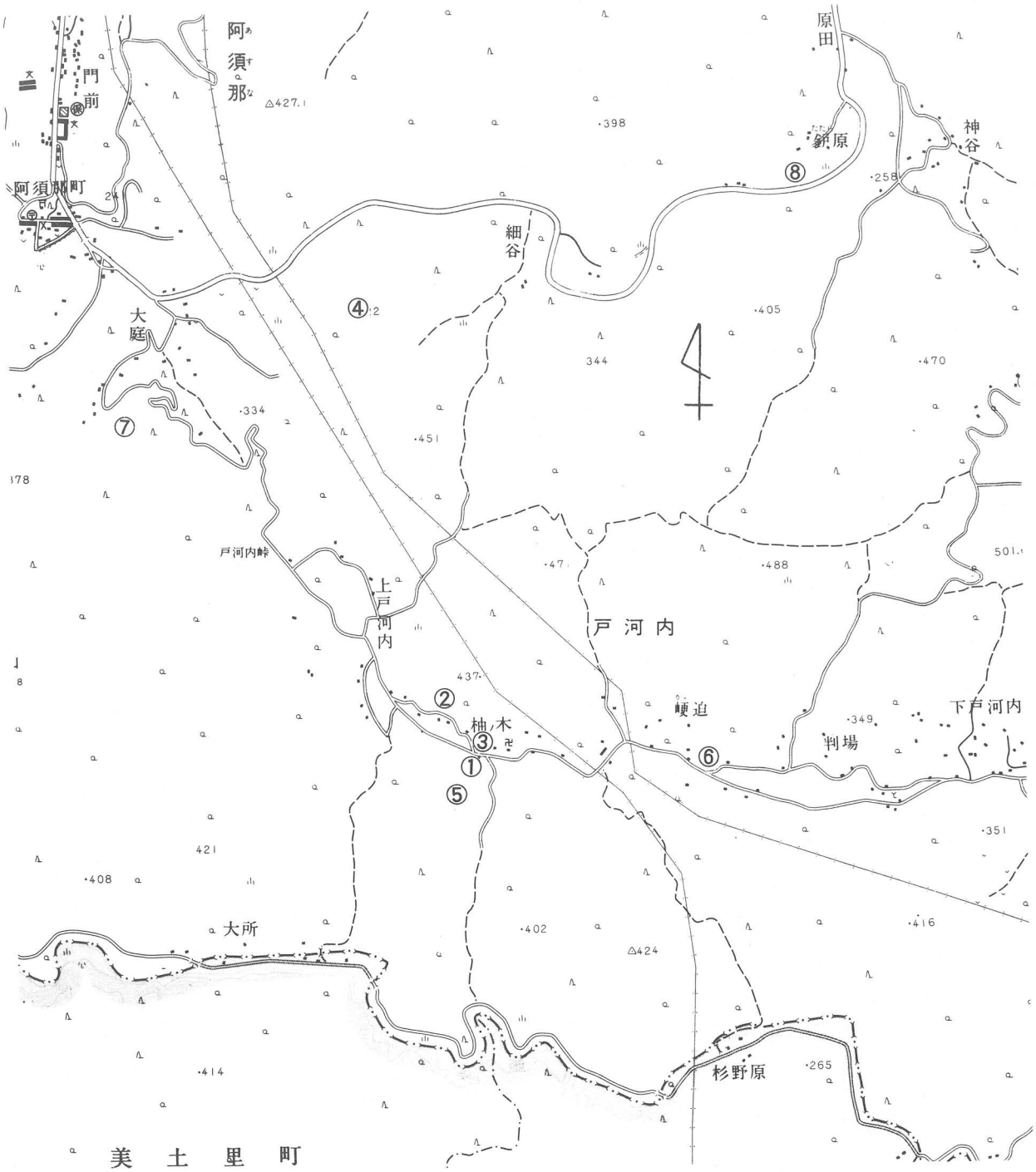
また菅城遺跡上方、村道戸河内線を東（長田）方面に約100mの所には、浄土真宗本願寺派「照光山真浄寺」がある。寛永16年（1639年）真浄（毛利隆義とも伝えられる）の開基といわれ、弘化（1845年）頃火災に会い資料消失し詳細不明であるが、小庵からこの地に移ったという。

ところで、これまで羽須美村では詳細な遺跡分布調査が行われていないこともあり、現在までに知られている遺跡の数は極めて少ない。現在までに知られている遺跡の中では、邑智郡で最大級の横穴石室を持ち、三累環頭を出土した野伏原古墳（大字雪田川淵）は最も著名なものである。

菅城遺跡（第１図①）の所在する戸河内地区ではこれまで他の遺跡は知られていない。しかし試掘調査中、下戸河内判場地内で須恵器が出土していることを伝え聞いた。また邑南農協戸河内支所前の丘陵斜面の畑で土器の細片と鉄滓を表面採取している（第１図⑥）。さらに柚ノ木地区、広高氏宅（屋号「土橋」）裏では小規模な製鉄遺跡を発見した（第１図②）[1]。

戸河内柚ノ木地区は標高およそ300m～350mにまたがる集落であり、菅城遺跡は、出羽川支流戸河内川北側の尾根から派生するなだらかな丘陵の先端部緩斜面、現水田内に所在し標高320m～330mである。阿須那の街との標高差は約160m。この地は本村でも標高の高い地域で特に雪の深いところであるが、調査区は一等米の取れる日当たりの良い場所である。

尚、今回の調査中（第１図③）や（第１図⑤）の確認もあった。第５章にて触れる。



0　1000m

① 菅城遺跡　② （仮称）土橋製鉄遺跡（スラグ採取地）③ 五輪塔（一部）　④ 鷲影城跡

⑤ （仮称）大フケ古墳（二基）　⑥ 土器・スラグ採取地　⑦ 大利鉄跡　⑧ 坂口鉄跡

第１図　菅城遺跡　位置図　（1:25000）

第３章　調査の概要と経過

菅城遺跡の発掘調査は平成５年(1993年)、遺跡の範囲を確認するための試掘調査に始まる。第１章にあるとおり遺跡の範囲が不明確であったため、かつて須恵器が出土したとされる地を中心に、吉川正調査員が地形を考慮しながら、計45ヶ所程のトレンチを設定し行った。調査結果に基づき本調査区を設置、約3000m²に絞り込んだ（第２図)。

そして平成７年（1995年)、試掘のデータを基に６月から12月本調査を行った。

まず重機により耕作土及び耕盤の一部を削除移動、一部にみられた石垣（棚田）を削除した。さらに調査区には、昭和47年頃施した暗渠排水が機能しており湧水が考えられることもあって土層観察兼排水用トレンチ２本を、南北に調査区の上から下まで通した。内１本が第２・３図Ａ－Ａ′である。

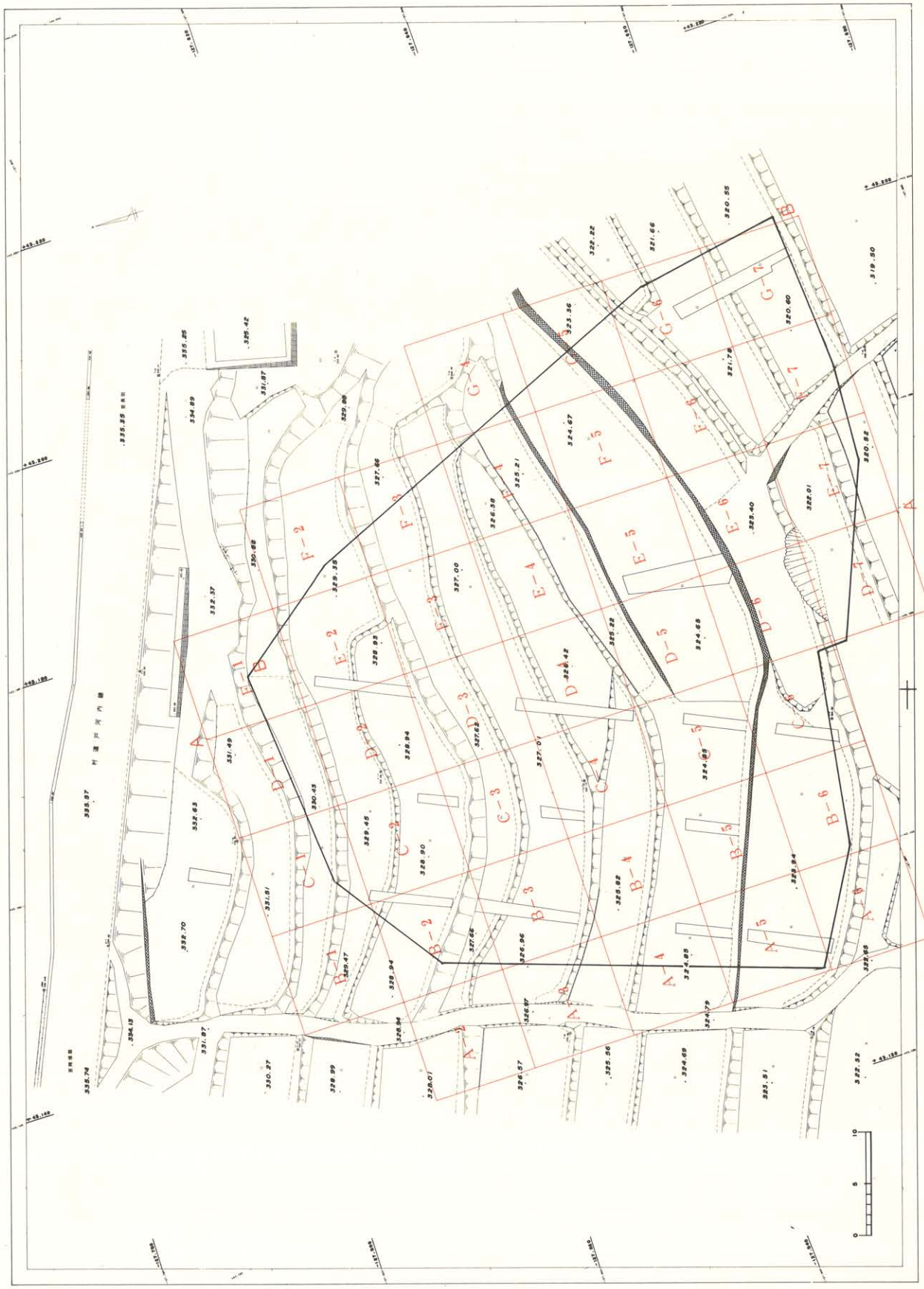
調査方法としては、残った耕盤を掘削し、続いて流れ込みによる遺物包含層を掘削しながら、遺物を調査区ごとに分け採取した。基本的な堆積状況は上層から、耕作土・耕盤・包含層・地山となるが、調査区西側では、耕作土を削除した段階で地山が露出し、流れ込みによる遺物包含層が検出されない箇所もあった。反対に調査区東側、特にＦ－２調査区付近は発掘現場東の尾根に面した谷部にあたり、耕盤以下の堆積土（包含層）が最も厚い所で約２ｍあるところもあり、作業員に苦労をかけた。また厚い堆積土には層序があったが、色調の近い堆積土では断面での分層は行えたとしても、いざ平面での掘削となるとなかなか分層が難しく、その意味での調査はうまく行えなかった。地山面は、雨水による浸食がひどく、検出した遺構も全て浸食を受けていた。さらに後世の水田化に伴って削りとられている箇所もあり、遺構に伴う遺物の残りも極めて悪い状態であった。しかし今回の調査によって弥生時代後期と考えた竪穴住居跡を２棟。６世紀後半から７世紀前半のものと思われる竪穴住居跡を１棟。掘立柱建物跡を２棟、土杭１を確認することができた。羽須美村で、古代の建物跡が確認されたのは初めてであり、弥生土器の確認も菅城遺跡が初めてとなった。

また試掘調査時に、トレンチＷ－Ｈ－１・Ｗ－Ｆ－２・３・Ｗ－Ｌ－１で旧谷川跡と、その中を流されてきたと思われる弥生土器や須恵器を確認していたが、今回の調査によりＳＲ０１～０４として遺物と共に再確認した。

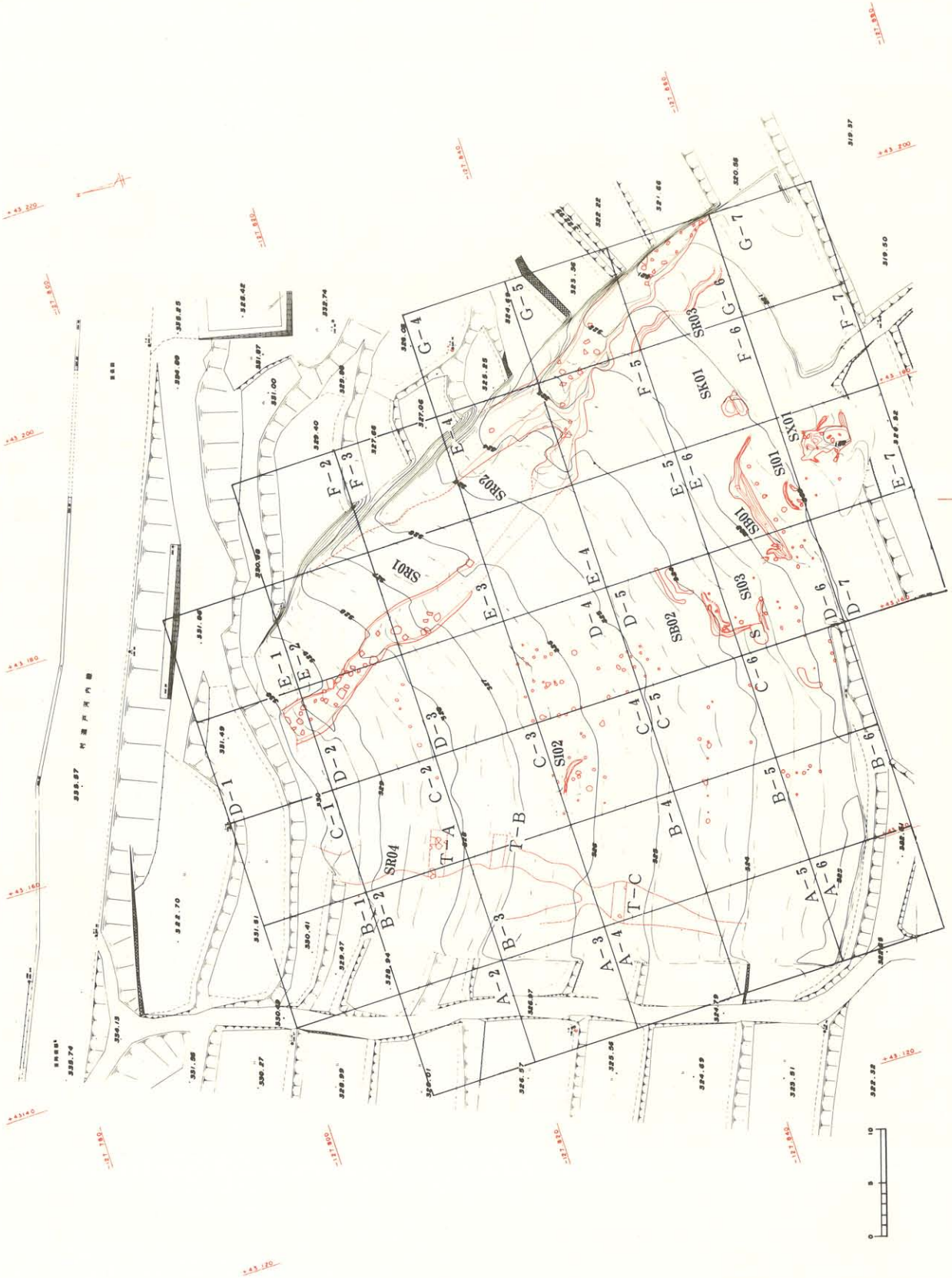
調査結果から、遺跡内から出土した遺物の多くは上方尾根筋などからの混入と思われた。このことは同一個体の土器片が広範囲の調査区から出土していることが物語っている。例えば遺物33－15はＣ－４・５区・Ｄ－４・６区・Ｅ－３・４区Ｆ－３・４・５区・Ｇ－６区から出土していることから裏付けられる。今回の報告ではこれらの分布の詳細な分析までには至っていない。菅城遺跡発掘調査は、知識と経験の浅さから遺跡に対し失礼もしたが、それ以上にこの調査から得たものは大きい。

12月17日には一部調査を残したものの、現地説明会を実施し、冷たい雨の降るなかにもかかわらず、はすみ史楽会（1995年10月発足）をはじめ70名を超える見学者が訪れた。県埋蔵文化センターの方々も駆けつけて頂き心強く行うことができた。

尚、菅城遺跡の発掘調査を終えることができたのは、発掘作業員の功労によるものである。



第2図　菅城遺跡　調査前地形測量図・調査区設定図



第３図　菅城遺跡　調査後地形測量図・遺構配置図

第４章　遺構と遺物

基本層序　（第４図及び第22・23図）

当遺跡は圃場整備予定地水田内に所在するため、まず耕作土と耕盤の一部を削除してから調査を行った。基本的な土層堆積の状況は、第２図Ａ－Ａ′（Ｂ－Ｂ′）の断面をもとに示す。

まず調査区全体に共通する堆積として、地山〔無遺物層〕（灰褐色～黄褐色）の上に黒色土（５層）、続いて黒褐色土Ｉ（８層）、その上に耕盤である灰褐色土層（15層）がきて耕作土となる。そして地形、遺構、客土等により他の土層がそれらに割り込んでくる。例えば、検出したＳＲ０１は黒墨色砂質土（１層）及び黒墨色土（３層）によって埋まっており、ＳＲ０２は１層及び５層によって、ＳＲ０３は５層によって埋まっている。ＳＲ出土遺物は、０１・０２が主に１層及び１層と砂礫Ｉ（２層）の境目から、０３が５層からのものである。０４は、平成５年の試掘時に遺物26－12を確認しているものの、今回の調査で行ったトレンチＴ－Ａ・Ｔ－Ｂ・Ｔ－Ｃからは、実測不可能な細片を２片認められたにすぎないこともあり、それ以上の調査は行わなかった。

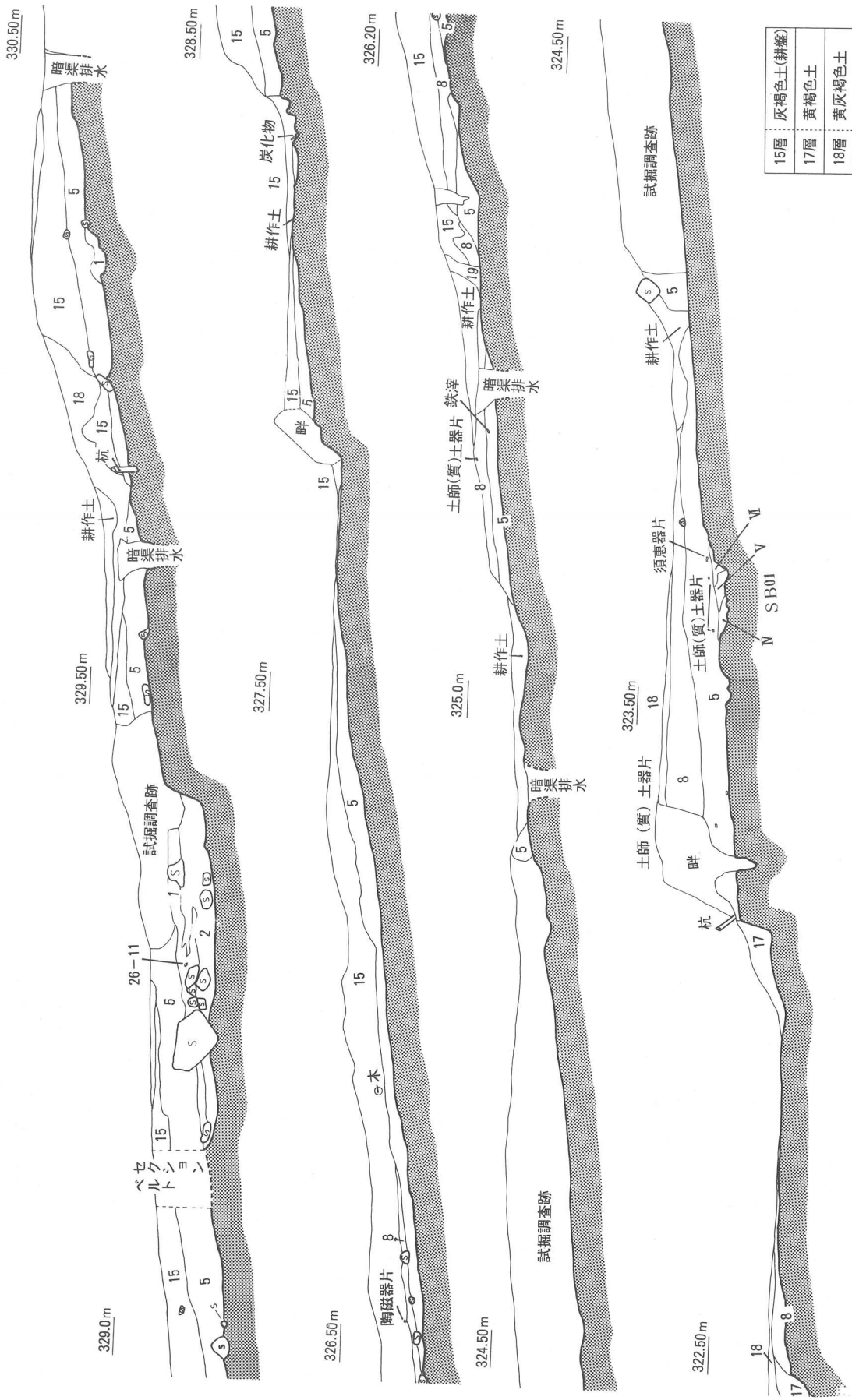
検出した遺構ＳＩ・ＳＢ・ＳＫは地山に残された痕跡であり、地山と５層の間に位置する（５層黒色土に対し遺構内は黒墨色土が堆積している）ことから５層堆積以前のものと思われる。その内ＳＩ０１・０２は、ＳＲ出土遺物と比較して３層の堆積時期以前にその機能を失っていると考えている。いずれの遺構も埋没後、斜面を流れる雨水によって浸食され、流れ込んだ５層以降の土砂や客土によって覆われ、あるいは、後世の水田化に伴い地山まで削り取られているため、建物跡の床面や壁面も半分以上が失われており、柱穴の配列、遺構の規模、切り合い関係は判然としなかった。遺構の残存状態が極めて悪いことで、遺構内出土の遺物が即、共伴関係を示すとは考えにくいものの、逆に遺構内の堆積状況からそれほどの時期のずれはないものと判断し、総合的に遺構の年代を判断した。

また、黄褐色ブロック（９層）は、８層及び５層上面を人工的に削除し、客土整地したものと思われ、黄褐色土礫混土Ｉ（11層）に包含する遺物から判断して、中世の水田等に伴う整地と考えた。これらの土層堆積状況からみて、１層から８層には自然的な堆積を、９層以降の堆積土層には客土等、何らかの人工的加工の様を呈していると思われる。さらに、15層（耕盤）の最下部からは肥前系陶磁器が出土していることから、現在まで使用されてきた水田は、これまでにも多少の圃場整備が行われたにしろ、その耕盤の基本は江戸時代に遡れそうである。

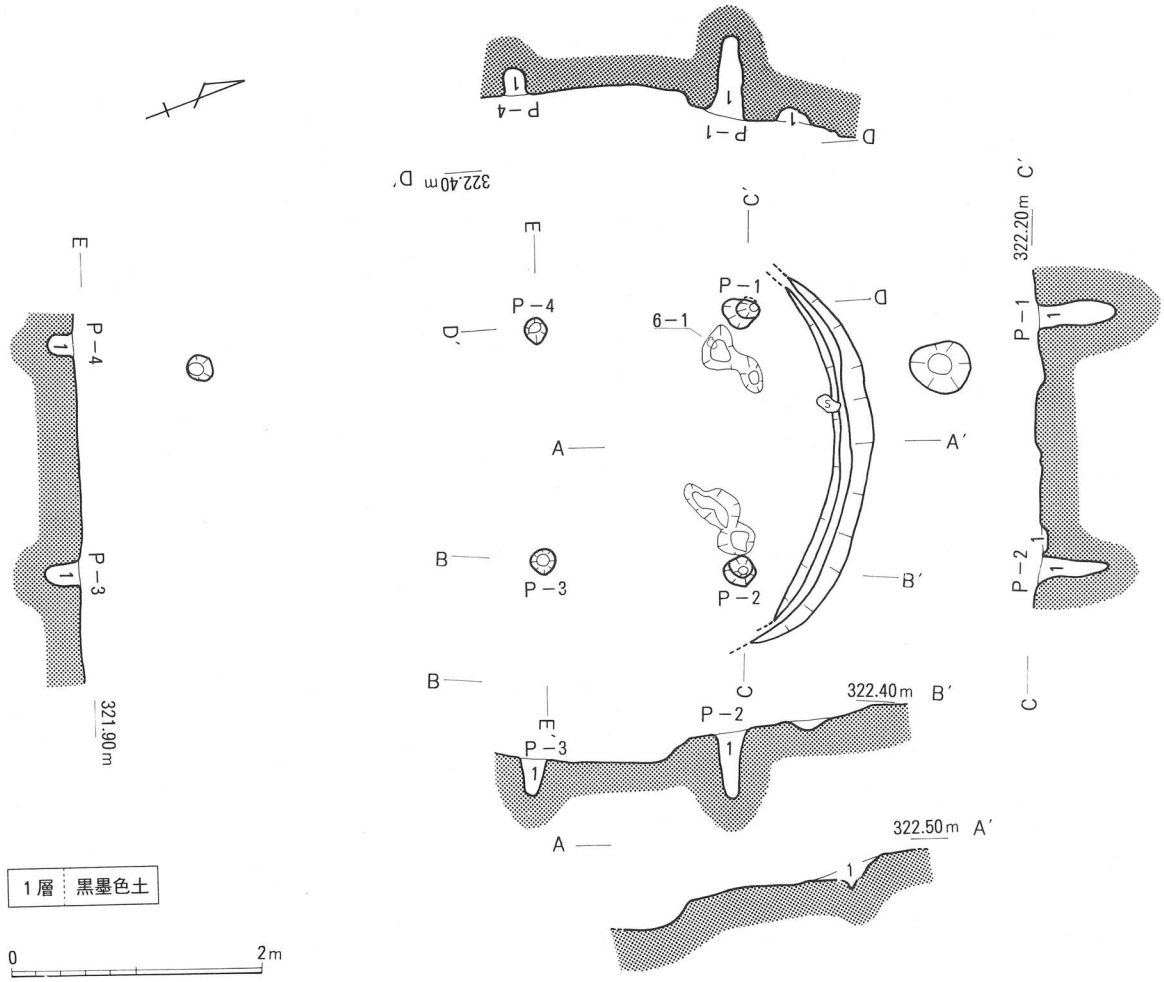
以上、旧谷川に流されてきた遺物や、その他の流れ込みによる遺物から言えることは、今回確認した建物（跡）だけでなく、旧谷川を遡った調査区上方の現在家屋のある辺りや、なだらかな尾根筋に沿って集落が営まれていたのであろうと考えられる。以下、遺構・遺物について個別に述べる。尚、基本層序はアラビア数字（１層・２層…）、遺構の覆土はローマ数字（Ｉ層・II層…）で示した。

ＳＩ０１　（第５・６図）（図版２ｂ.）

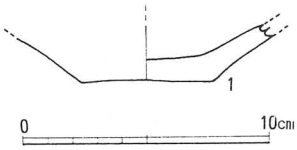
位置　調査区の南やや東側、Ｅ－６・７区に位置する。床面は北（山）側にかろうじて残る状態から、標高約322.20ｍを測る。



第４図　菅城遺跡　基本土層断面図（第2図A－A′）



第５図　菅城遺跡　SI01　実測図（1:60）



第６図　菅城遺跡 SI01　出土遺物実測図（1:3）

形状　５層（黒色土）を掘削後、地山面での精査中、壁溝とピットを検出した（図版２ａ.）。建物跡は埋没後、雨水や近世の水田化に伴い全体の約３分の２を失っているが、柱穴の並びと壁溝の形から４本柱の円形の竪穴住居であったと考えられる。復元した径は、約3.7mであった。

覆土　５層下の黒墨色土（Ｉ層）の単層により壁溝、柱穴ともに埋没している。

床面　約３分の１が残存する。貼床は不明。床面標高約322.20m、壁溝の深さ約30cm、壁溝下場の標高約322.10mであった。Ｐ－１の東側、Ｐ－２の西側に浅い凹みを検出したが、判然としなかった。

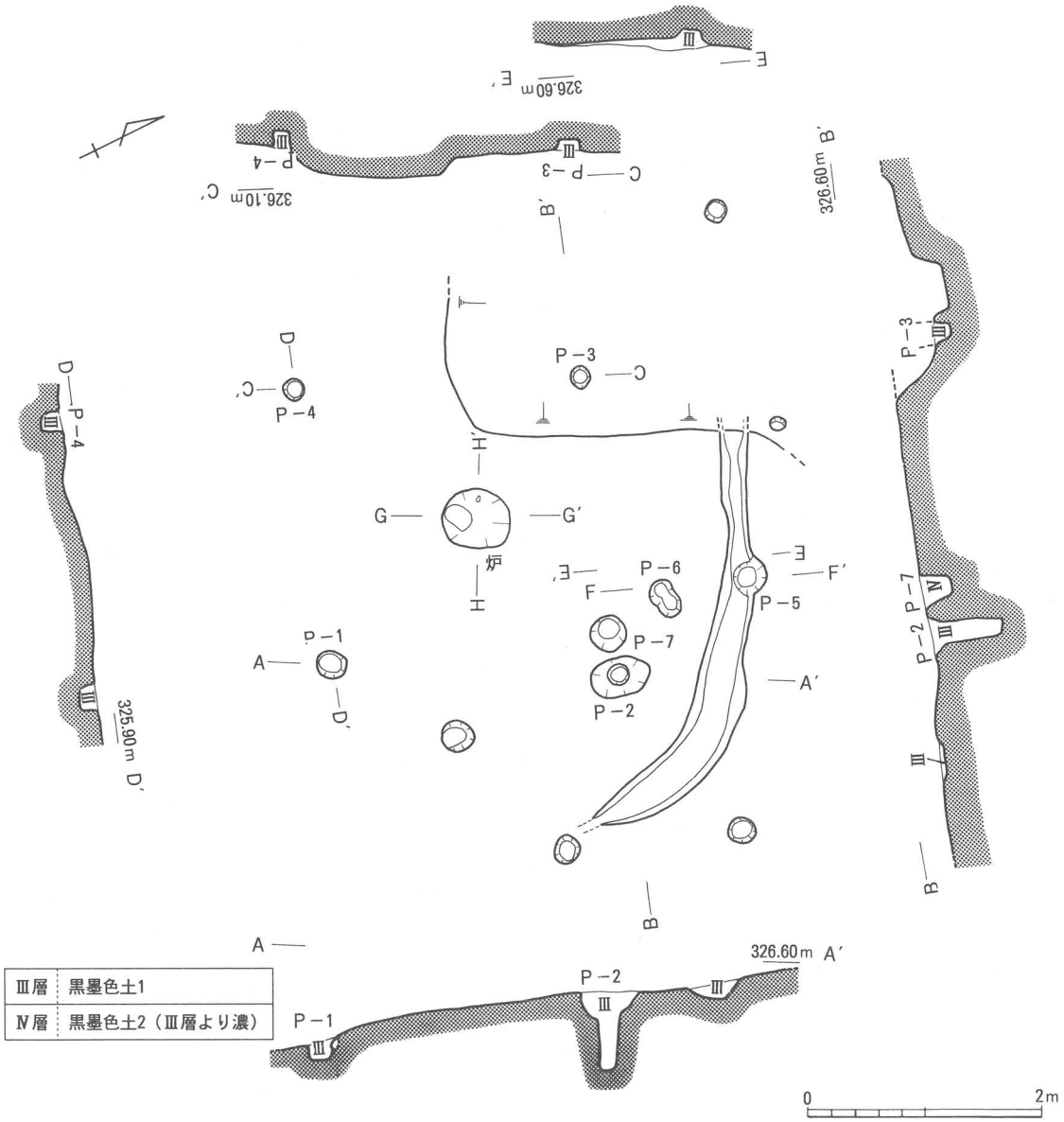
柱穴　残存部から４個のピットを確認した。Ｐ－１・２の上場、径約30cm弱、Ｐ－３・４の上場は失われている。しかし、４個のピットの下場の標高は、約321.50～321.60mを測ることから、間違いなくセットで立てられた柱に伴う穴と思われ、柱穴の深さも意識して掘られ、柱の長さも揃っていたのではないかという印象を受けた。柱間は、南北が約1.7m、東西が約２mであった。

遺物　Ｐ－１東側の浅い凹みに堆積したＩ層にのる形で、遺物６－１（甕又は壷の底部）が出土した（図版２ｃ．・12ａ．）。床直とはいえないもののＩ層に包含するものであり、出土状況からＳＩ０１に共伴するものとして考えた。細片であり、調整もわからないような状態であるが、Ｉ層が３層（黒墨色土）に対応すると思われ、３層出土遺物（弥生後期）と同様の時代と考えた。

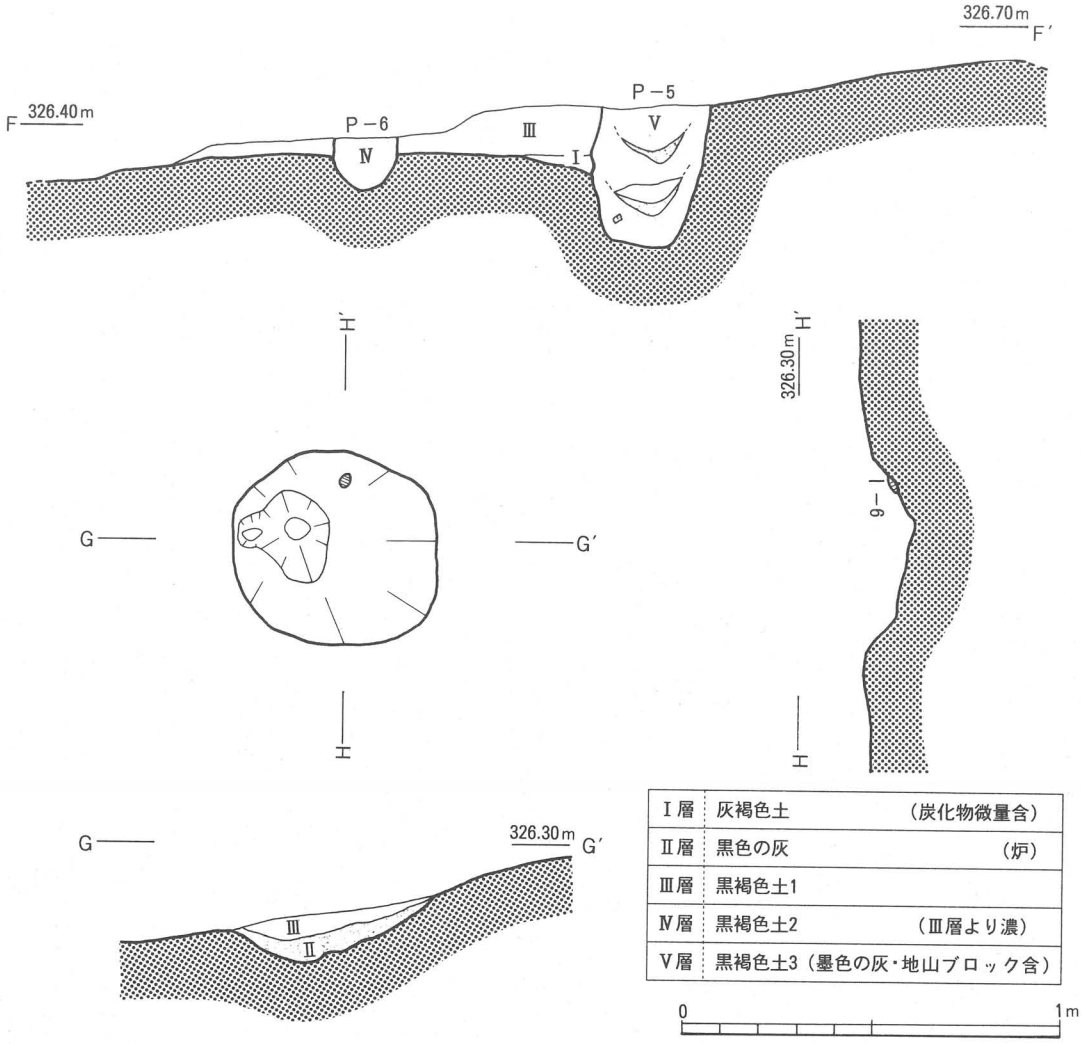
以上のことからＳＩ０１は、弥生時代後期の円形の竪穴住居跡という結論に達した。

第６図　菅城遺跡ＳＩ０１出土遺物観察表

6図	器種		口径 cm	底径 cm	残高 cm	土器表面残存状態	胎土	調整備考	色調 外面	色調 内面	外面煤	時期	調査区
1	弥生土器	甕？	／	5.2	1.9	不良	２mm以下の砂粒を多量に含む：粗	細片。残りが非常に悪い。外面はナデ、内面はヘラケズリと思われる。底面に褐灰の焼成痕。	淡黄褐		有？	後期？	Ｅ－６



第７図　菅城遺跡　SI02　実測図（1:60）



第８図　菅城遺跡　SI02　断面図・炉出土状況図（1：20）

ＳＩ０２　**（第７・８・９図）（図版４ａ.）**

位置　調査区中央やや西側、Ｃ－４区に位置する。床面の標高は、北(山)側に残る状態から約326.33ｍを測る。

形状　５層（黒色土）を掘削後、地山面での精査中、壁溝とピット群を検出した。まず壁溝の形状から建物跡の規模に見当をつけ、壁溝に伴うピットの目処をたて調査を行った。調査結果、建物中央に炉を配した、４本柱の円形（あるいは隅丸）の縦穴住居であったと思われる。復元した径は、約4.5m強であった。

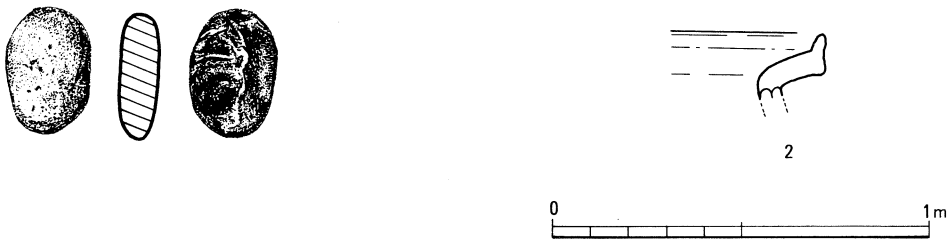
覆土　５層下の黒墨色土１（Ⅲ層）の単層によって、壁溝、柱穴、炉は埋没している。Ｐ－１から４及び炉以外のピットは、Ｐ－６・Ｐ－５を代表するようにⅣ層（Ⅲ層より濃い黒墨色土）が、Ⅲ層を切っていることから、Ⅲ層堆積以降に掘り込まれたピットに混入した土であると思われる。Ｐ－５は、壁溝を断ち切っていることからも、この建物（跡）に付随しないことが証明される。

床面　建物の廃絶後、雨水等の浸食により、Ｐ－２から南側、建物跡の３分の２は南（谷）北（山）に傾斜し、地平（床面）を保ってはいない。Ｐ－３周辺の落ち込みは、試掘トレンチＷ－Ｇ－２の跡であり、試掘時にはＰ－３に気付かなかった。壁溝北（山）側の上場も失われている。壁溝下場の標高は約326.28ｍである。また、灰褐色土〔炭化物微量含む〕（Ｉ層）は、貼床の痕跡である可能性を考えた。

炉　建物跡中央に、上場の径約50cm強、北側の上場を基準として、深さ約17cmの円形を示すピットがあり、下層に墨色の灰(II層)、その上にIII層が堆積していた。II層は灰であり明らかに火の燃えた跡であることから炉跡と思われる。さらに底部西側から、地山に付く形で3.4cm×2.3cm×0.9cmの川原石が出土した(遺物９－１）（図版４ｃ.)。しかし同様の石は、後に述べる旧谷川跡には見られず、菅城遺跡付近の戸河内川でも確認できなかった。偶然に混入したものとは考えられず、何らかの意味を持つものであったと思われ、炉神のようなものではないかと考えた。

柱穴　建物跡に伴うものとして４穴。残りのピットは覆土と位置から、この建物の廃絶後に掘り込まれたものと考えた。Ｐ－２は、上場が約30cm～50cmの南北方向に広い楕円形で床面から約20cm程掘り込まれ、そこからさらに、上場の中心位置に約20cm弱の径で約40cm強掘り込まれている。２段階の掘り方を示すが、覆土はIII層の単層であった。その他、Ｐ－１・３・４は上場を失っているが、下場の径は約18cmを計り、下場の標高はＰ－１・２共に約325.62ｍ、Ｐ－３が約325.78ｍ、Ｐ－４が約325.60ｍを測った。柱間は、Ｐ－１から２、２から３、３から４が共に約2.5ｍ。Ｐ－４から１が約2.35ｍを測ることからも、４本柱の建物であったことは確かであろう。

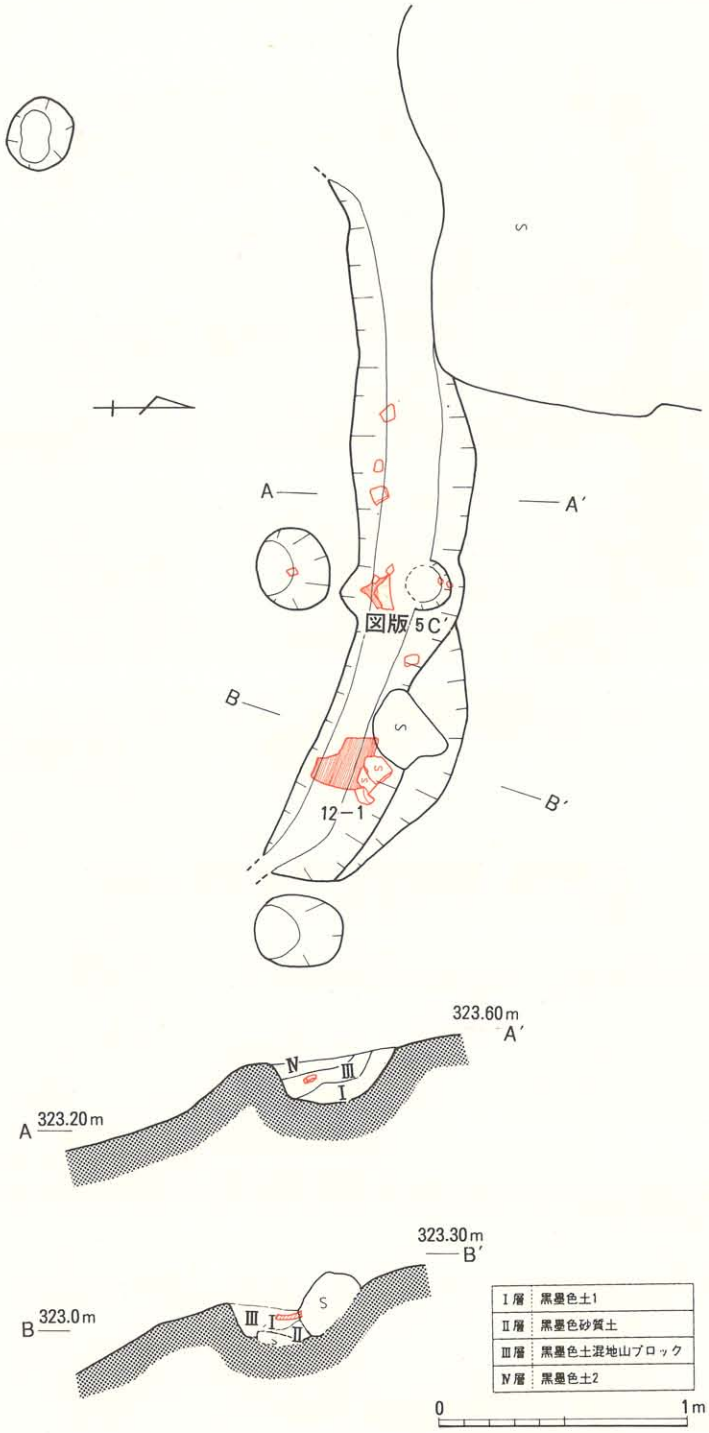
遺物　遺物９－１については、先に述べた通りである。また、壁溝の覆土III層から、かなり浮いた形で遺物９－２が出土している（図版４ｂ.)。弥生中期から後期頃の壷又は甕の口縁部と思われる細片であるが（図版12ｂ.)、共伴関係は判然としなかった。しかし、遺物９－２がIII層の包含であることと、このIII層は３層に対応していると考えられることから、おおむね弥生時代後期頃の竪穴住居と判断した。



第９図　菅城遺跡　SI02　出土遺物実測図（1:2）

第９図　菅城遺跡ＳＩ０２出土遺物観察表

9図	器種		口径 cm	底径 cm	残高 cm	土器表面残存状態	胎土	調整備考	色調		外面煤	時期	調査区
1	炉内出土の川原石：炉神？		旧谷川跡及び、現在の戸河内川で、同様の石は見かけなかった。片面に最大２ｍ、１mm以下の小さな穴がいくつもあるが、自然のものと思われる。目方11.4ｇ。						赤褐～明赤灰		／	住居跡に対応	Ｃ－４
2	弥生土器	壷？	／	／	1.7	不良	２mm以下の砂粒を多量に含む：粗	細片。残りが非常に悪い。口縁部内面はナデ、以下不明。	浅黄橙	断面は暗灰	／	中期末～後期初？	Ｃ－４



第10図　菅城遺跡　SI03　遺物出土状況図

ＳＩ０３　**（第10・11・12図）**
（図版５ａ.）

位置　調査区南、Ｄ－６区に位置する。

形状　近世以降の水田化に伴い地山まで大きく削り取られていた。第11図中、北の岩に気をとられ、岩の下から遺物12－２・12－３が出土した時には、壁溝の存在に気付かず、図化をせず取り上げてしまったが、結果的に壁溝のものであった。この建物跡は、壁溝と柱穴も一部を残すのみであり床面も残っていないが、壁溝の形状から、円形の竪穴住居ではなかったと考えた。

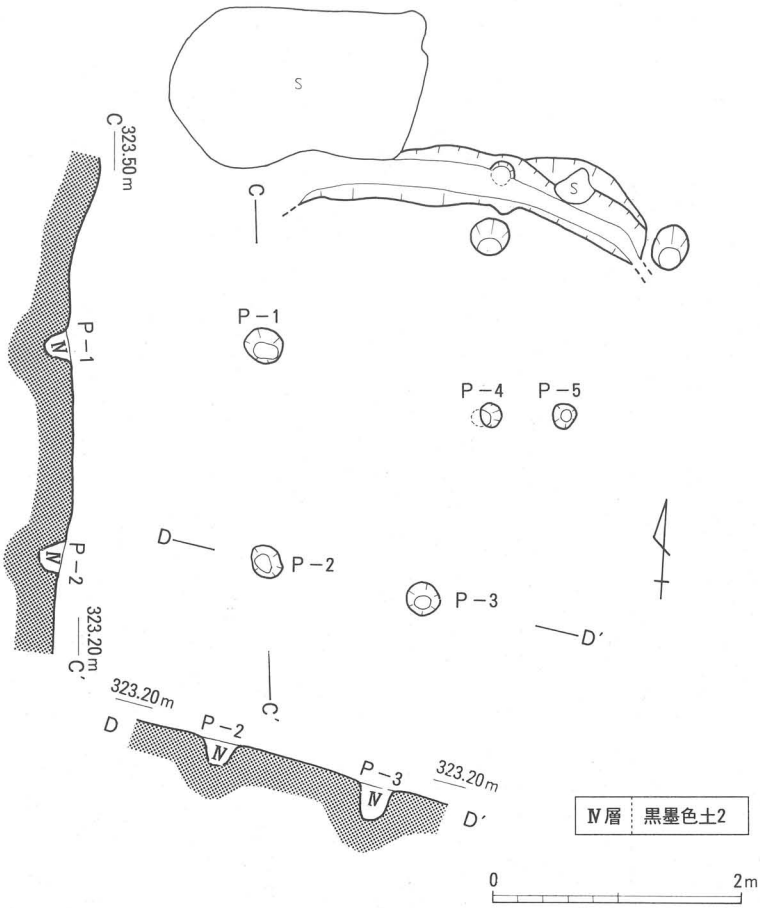
覆土　壁溝内の状況として、第10図中Ａ－Ａ′は、まず黒墨色土層１（Ⅰ層）が堆積、その上に黒墨色土混地山ブロック(Ⅲ層)をはさみ、黒墨色土２（Ⅳ層）によって完全に埋まっている。Ⅲ層には、土師器甕片が認められた。またＢ－Ｂ′では、Ⅰ層とその下のⅠ層の砂質化と思われる黒墨色砂質土（Ⅱ層）に分かれる。Ⅰ層の上には炭化材？がのっていた。図版５ｃ．は炭化物と地山ブロックの接点が熱の影響を受けている。そしてⅠ層の上に（Ⅲ層）がくる。Ⅲ層は客土ではないかという印象を受けた。その他、検出したＰ－１から３はⅣ層の単層による覆土と考えた。

床面　前述のとおり失われていた。壁溝下場の標高は、約323.0m前後を測る。

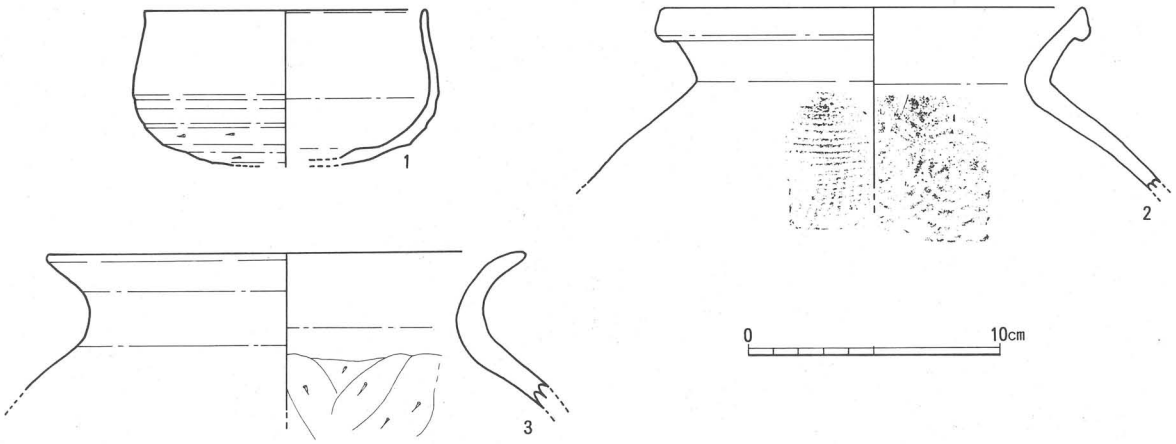
柱穴　後世の水田化に伴い地山も大きく削除されており、いくつかを検出したものの恐らく完全に飛ばされてしまったものもあるのではないかと思われ、この建物に伴った柱穴は、判然としなかった。

Ｐ－１から３の下場の標高は、順に約322.94m、約322.88m、約322.76mであった。

遺物　全て壁溝内出土によるもの。遺物12-1は鉢、第10図中の位置で炭化物より上面にありⅢ層包含のものである（図版５ｂ.）焼成が悪く、いわゆる生焼けの状態で灰白色。反転復元し、ほぼ完形図化できた。遺物33－７と同製品。広島県陣ケ平西遺跡３号窯出土の鉢と似ている。遺物12－２・12－３は前述のとおりであり、甕の口縁部から肩部にかけての残存状態。12－２は須恵器で口縁部が玉縁のもの、これも陣ケ平西遺跡窯出土のものと似ていた。12－３は土師器。遺物から６世紀後半から７世紀前半頃と判断した。(図版12ｃ.ｄ.ｅ.)



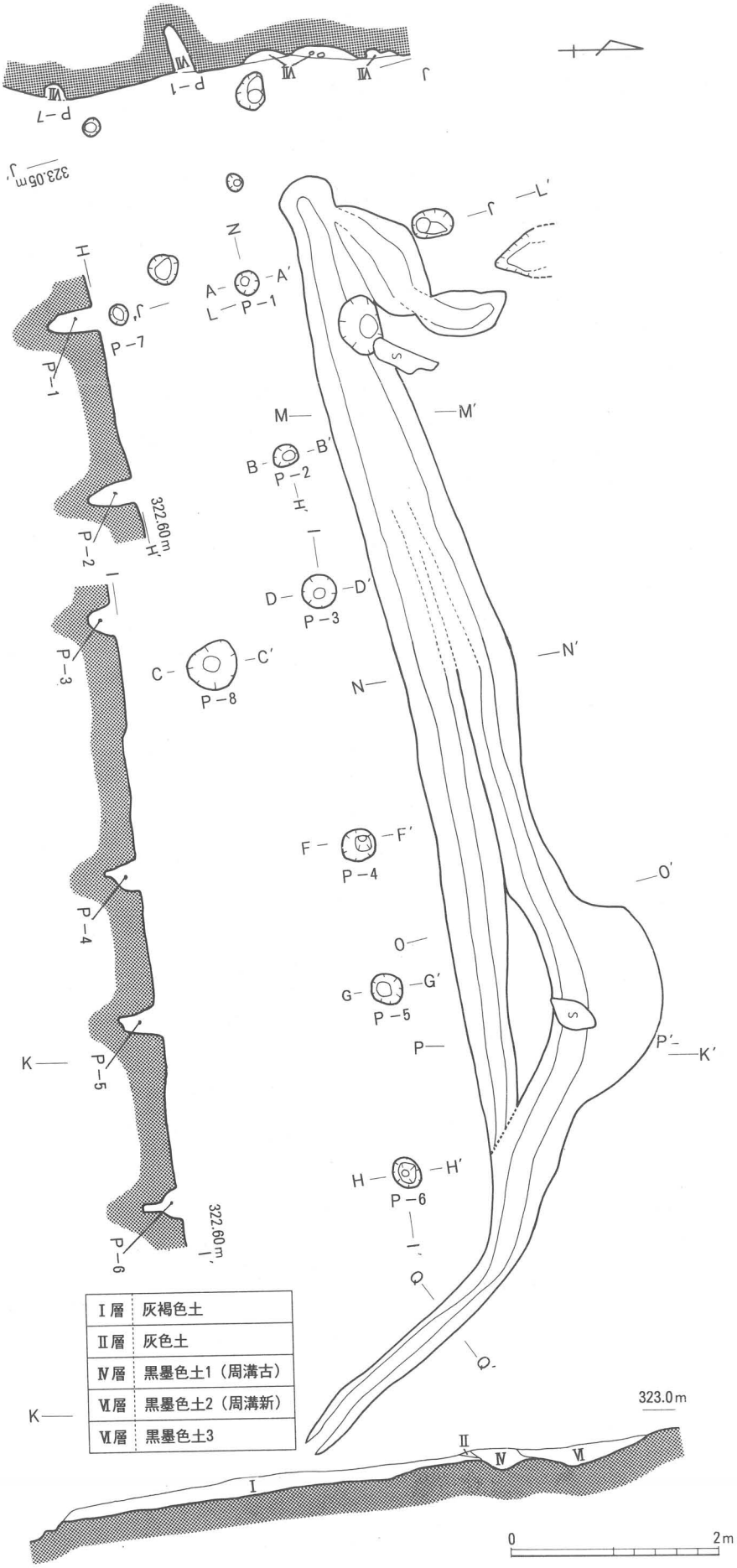
第11図　菅城遺跡　SI03　実測図（1:60）



第12図　菅城遺跡　SI03　出土遺物実測図（1:3）

第12図　菅城遺跡ＳＩ０３出土遺物観察表

12図	器種		口径 cm	底径 cm	残高 cm	焼成	胎土	調整等	色調 外面	色調 内面	煤	時期	調査区
1	須恵器	鉢	11.3	4.4？	6.2	不良	２㎜以下の砂粒を微量含む：密	外面：口縁部（体部）回転ナデ、底部回転ヘラケズリ。内面：回転ナデ。	灰白		／	６ｃ後～７ｃ前半	Ｄ－６
2	須恵器	甕	16.7	／	7.4	やや不良	１㎜以下の砂粒を微量含む：密	外面：口縁端部、口頸部回転ナデ、片部カキ目、叩き目。内面：青海波文。	淡灰		／	６ｃ後～７ｃ前半	Ｄ－６
3	土師器	甕	19	／	6.3	良好	１㎜以下の砂粒を微量含む：密	外面：口縁端部ヨコナデ、以下ハケ目？。内面：口縁端部ヨコナデ、以下ヘラケズリ。	黄橙	口縁部内面に有			Ｄ－６

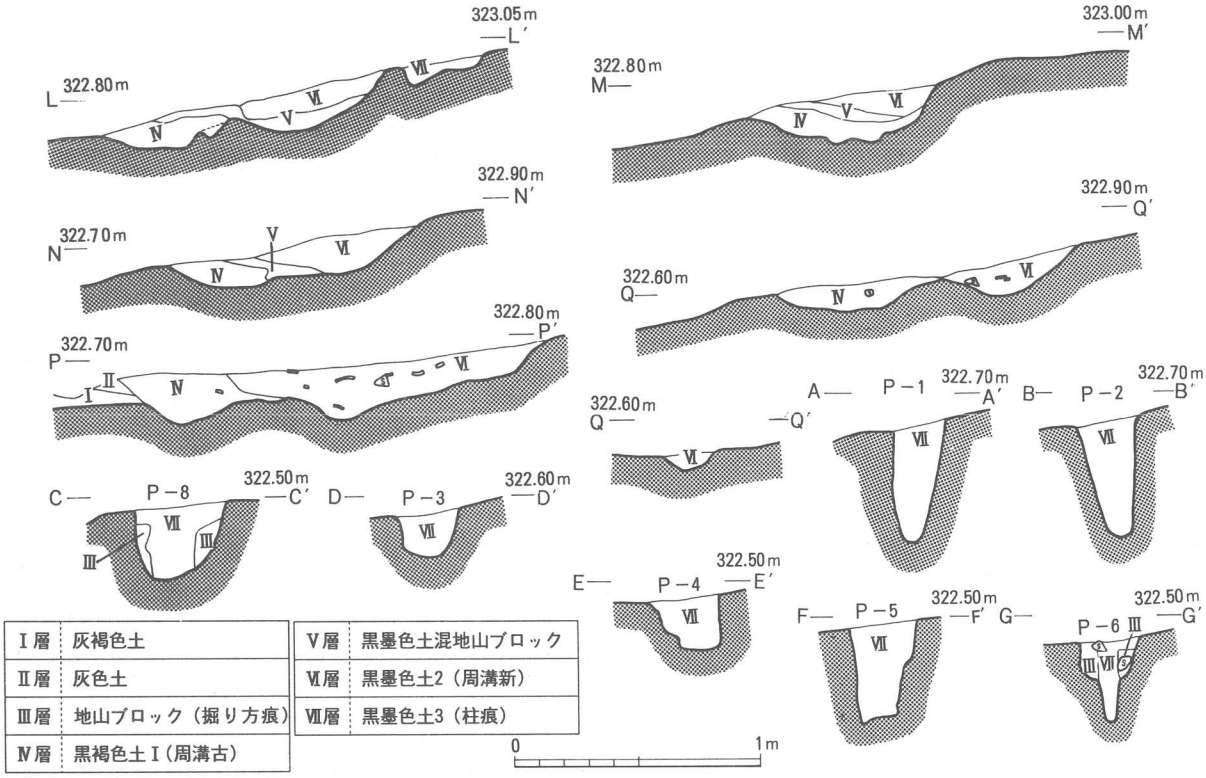


第13図　菅城遺跡　SB01　実測図（1:60）

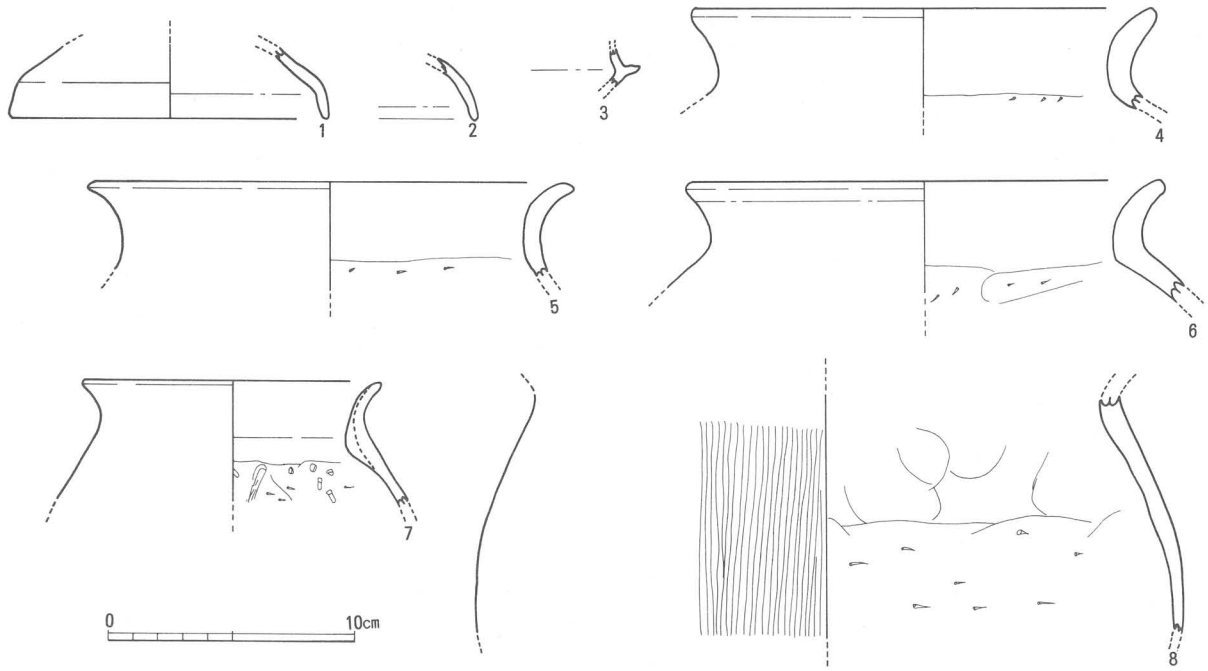
SB01　（第13・14・15図）（図版３ａ.）

位置　調査区南やや東側、Ｅ－６・Ｄ－６区ＳＩ０１の北に位置する。床面は地平を保たず、雨水や後世の水田化に伴い失われたものと思われる。わずかに残る灰色土（II層）上面が生活面であったとすれば、床面標高約322.63m前後と推定する。

形状　５層を掘削後、地山面での精査中、周溝とピットを検出した（図版２ａ.）。完掘後、この周溝は、等高線沿いに東におよそ10m延び、南（谷）方向に進路を変え約2.6mのところで排出するという検出状況であった。この周溝の特徴として、途中を新旧掘り分けていることと、西側の周溝の端部は南（谷）側に出水を排するよう切っていないことである。地形的に必要でなかったか、あるいはそらちに流れて欲しくない何かがあったのか、単に溝が浅く残存しないのか不明である。



第14図　菅城遺跡　SB01　断面図（1:30）



第15図　菅城遺跡　SB01　出土遺物実測図（1:3）

覆土　地山の上に灰褐色土（Ⅰ層）、これは質感は地山であるが、地山に対し濁りのあるものである。Ⅰ層の上にⅡ層（灰色土）があり、前述のとおり当時の床面（生活）と関わっていたと推測した堆積である。建物跡北(山)側に沿う周溝は完掘後、全面ではないが２本存在し、覆土の観察から、これらは同時に機能していたのではなく、新旧の時期差があるものと判明した。はじめ、黒墨色土１(Ⅳ層)

が堆積した周溝が存在していたが、恐らく水害等の被害でⅣ層の混入を受け、周溝端部はⅣ層を排除しあらたに使用したものの、中心部東側はその経験から周溝を改良するためにⅣ層を残し、黒墨色土混地山ブロック（Ⅴ層）を貼りつけ壁とし、新しく周溝を作り直していると推測した。この周溝（新）に建物の廃絶前後、黒墨色土２（Ⅵ層）が堆積したと思われる（図版３ｂ.）。尚、周溝（新）は、Ｐ－５北側で周溝（旧）と完全に分かれ弧を描くが、なぜ湾曲させたのか、Ｐ－５と離したのか、よくわからないが全体的に建物から周溝を遠ざけたようである。周溝下場の標高は、西側端部約322.60m、東側Ｑ－Ｑ′約322.40mを測り、第13図の平面図からも、西側端部に北から流れてきた水が入り、東側に流れて行く水路であったことがわかる。また柱穴に関しては、Ｐ－６・８で検出した地山ブロック（Ⅲ層）が、柱を固定したもので、黒墨色土３（Ⅶ層）がⅥ層堆積以降のものであると思われる。

床面　前述のとおり失われており、周溝側の柱穴に対応すると考えられるピットも失われていた。

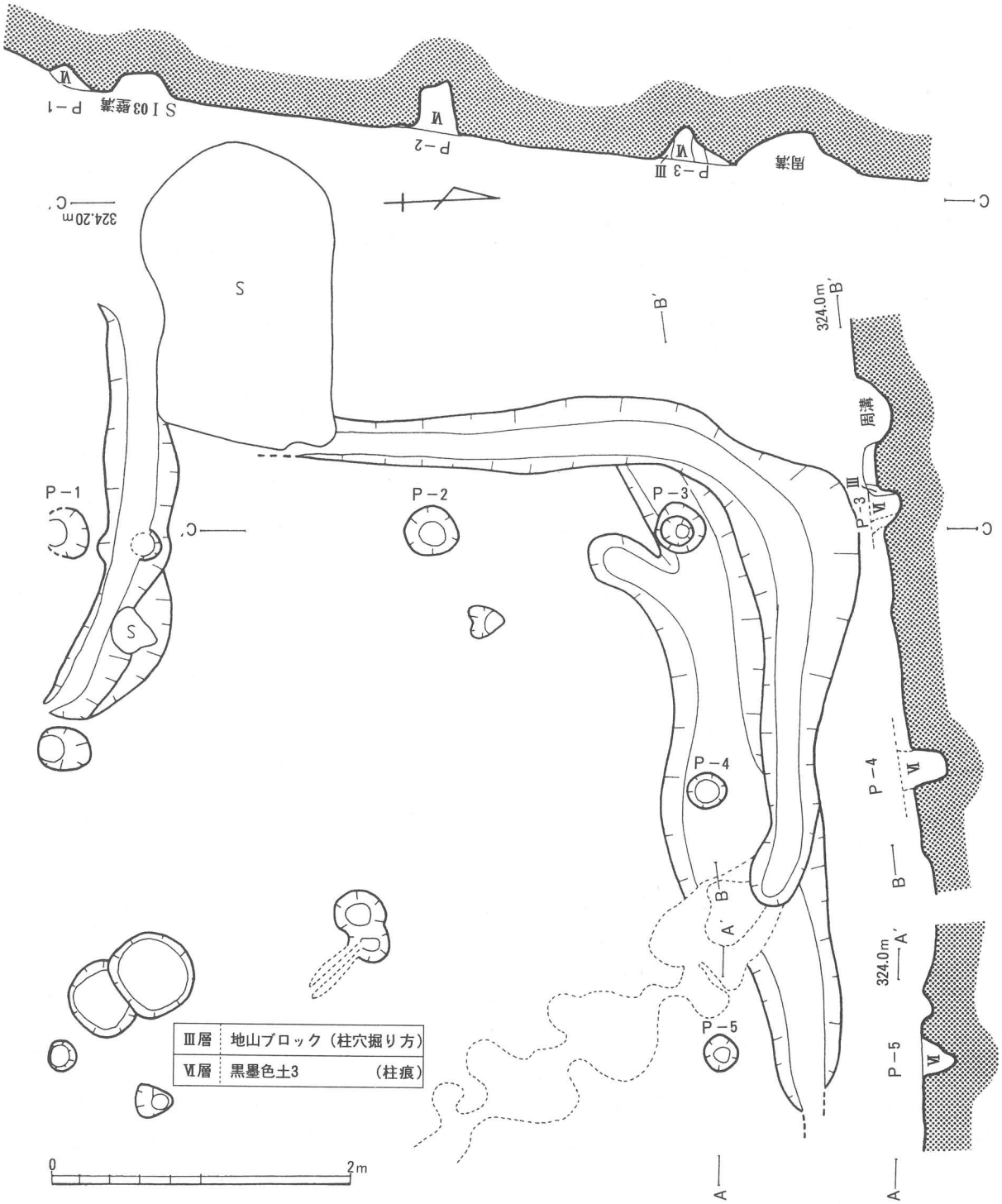
柱穴　周溝に沿って、周溝南側にＰ－１から６を検出した。Ｐ－３から６は掘り方が一定しておらず、また柱間も最大2.4m、最小1.4mと一見して無作為にさえ感じられる。しかし、柱穴下場の標高はＰ－３が約322.30mである他はいずれも約322.10mであり、ほぼ一列にならんでいることからこの建物(跡)に共伴するものと考えた。その他、Ｐ－８は柱穴に違いないが位置的に、Ｐ－７は柱穴下場の標高等共伴性について判然としない。以上のことから、この建物（跡）は掘立柱建物と考えられる。その規模は、周溝に対し１棟の建物であれば、梁行（間）１間以上（不明）、桁行５間というものになる。

遺物　図化した遺物は、全て周溝（新）Ⅵ層に伴うものである（図版３ｃ.）。Ⅳ層等でも微量出土したものの、細片でしかも残存状態が悪く観察できるものではなかった。遺物15－４から15－８は土師器の甕であり、15-1から15-3が蓋坏である。15－１は蓋であり、稜・沈線がなく肩部から意識的に内反しているもの。天井部は残存しないが、大谷編年出雲５期に相当するものと考えた。15－３は坏、立ち上がりは欠けているが、受け部よりはっきりと長いもの、大谷編年出雲４期相当と思われた。

ＳＢ０１の時期は、前述の須恵器と、その他の菅城遺跡出土の須恵器がほぼ同様の時期を示していることから考えて古墳時代後期、６世紀後半から７世紀前半頃のものと思われる。

第15図　菅城遺跡ＳＢ０１出土遺物観察表

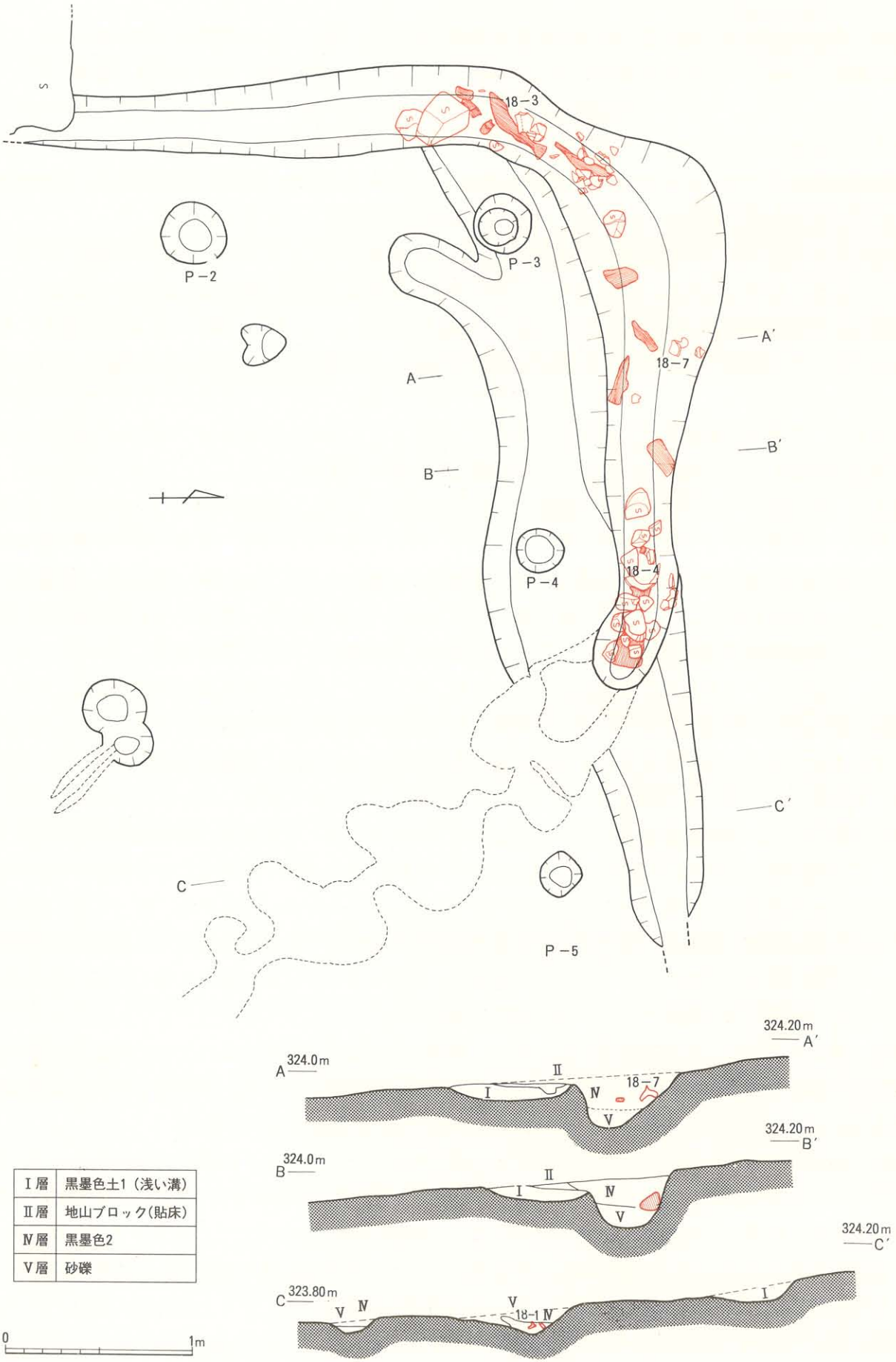
15図	器種		口径 cm	残高 cm	焼成	胎土	調整等	色調 外面	色調 内面	外面煤	時期	調査区
1	須恵器	坏蓋	13	2.9	良好	１mm以下の砂粒を微量含む：密	残存部全て回転ナデ	灰		／	７世紀前半	Ｄ－６
2	須恵器	坏蓋	／	2.4	良好	１mm以下の砂粒を微量含む：密	残存部全て回転ナデ	灰		／	６世紀後半	Ｅ－６
3	須恵器	蓋坏	／	1.6	良好	１mm以下の砂粒を微量含む：密	残存部全て回転ナデ	青灰	断面灰赤	／		Ｅ－６
4	土師器	甕	18.5	4	良	２mm以下の砂粒を微量含む：密	外面：口縁部ナデ、頚部以下不明。内面：口縁部ナデ、頚部以下ヘラケズリ	浅黄橙		／		Ｅ－６
5	土師器	甕	19	3.8	良	１mm以下の砂粒を微量含む：密	外面：口縁部ヨコナデ、頚部以下不明。内面：口縁部ナデ、頚部以下ヘラケズリ	灰黄		／		Ｅ－６
6	土師器	甕	19	5	良好	１mm以下の砂粒を微量含む：密	外面：口縁部ヨコナデ、頚部以下ヨコナデ？。内面：口縁部ヨコナデ、頚部以下ヘラケズリ	浅黄橙		／		Ｅ－６
7	土師器	甕	12	5	良	１mm以下の砂粒を含む	外面：口縁部ヨコナデ、頚部以下ハケ目？。内面：口縁部ナデ？、頚部以下ヘラケズリ	鈍い橙	鈍い黄橙	／		Ｅ－６
8	土師器	甕	／	9.5	良	２mm以下の砂粒を含む	外面：胴ぶハケ目。内面：胴部残存部、下半分横方向のヘラケズリ、上半分ナデ（指圧痕）	鈍い橙	鈍い黄橙	／		Ｅ－６



第16図　菅城遺跡　SB02　実測図（1:40）

ＳＢ０２　（第16・17・18図）（図版６ａ.）

位置　調査区南Ｄ－５・Ｄ－６区、ＳＩ０３の北に位置する。床面の標高約323.96m前後と考えられる。



Ⅰ層	黒墨色土1（浅い溝）
Ⅱ層	地山ブロック(貼床)
Ⅳ層	黒墨色2
Ⅴ層	砂礫

第17図　菅城遺跡　SB02　遺物出土状況図（1:30）

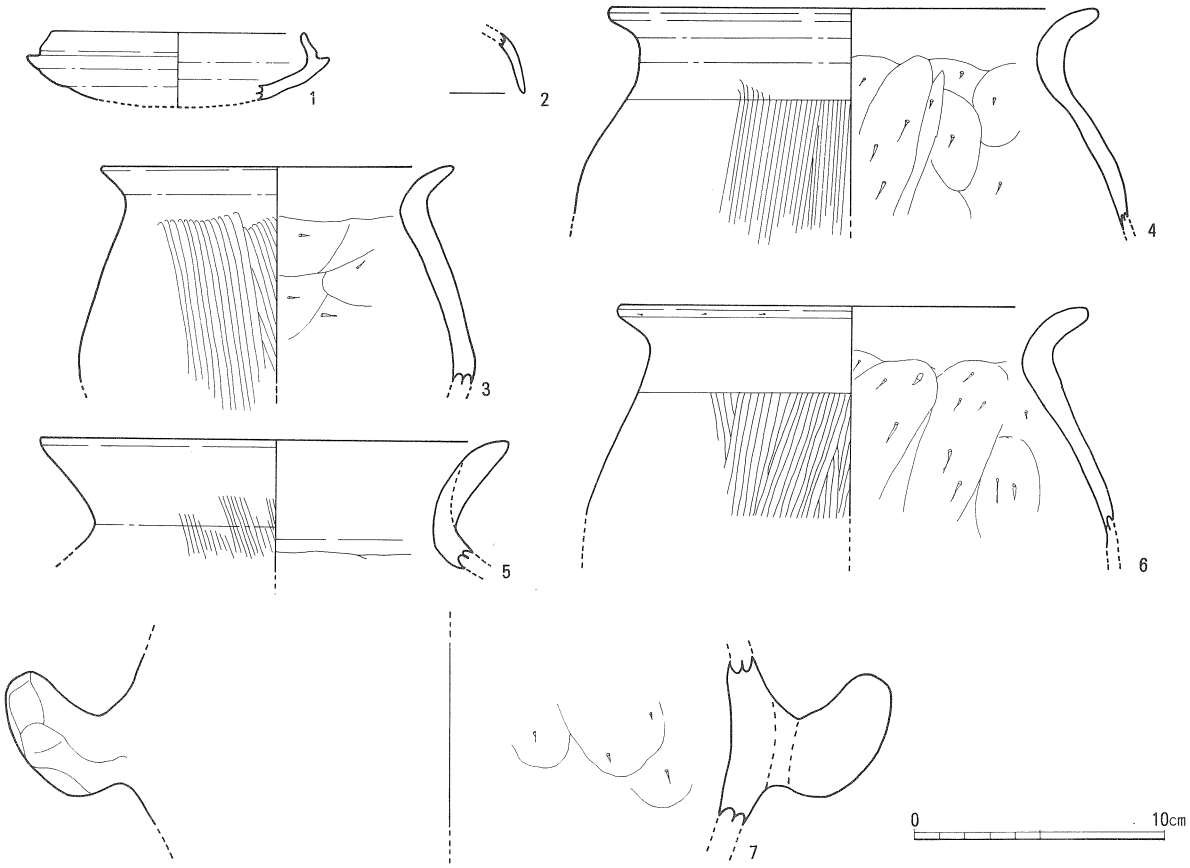
形状　５層を掘削後、地山面での精査中まず西側と北（山）側に、くの字形状に溝を検出した。この溝の堆積土上面から土師器片が出土しはじめたこともあり、建物（跡）に伴う周溝（壁溝）として考え、柱穴を探した。しかしこの遺構も他の遺構同様、自然の影響による浸食や、後世の水田化による地山に及ぶ削平でその全体を留めておらず、Ｐ－２・３・４は確実にこの建物（跡）に伴うものとして確認できたものの、Ｐ－１は残存状態と位置的に、Ｐ－５は周溝（壁溝）との関係上、その他検出したピットを含め、疑問点が残った。ただ、４本柱の竪穴住居として考えた場合、Ｐ－２・３・４に対応する４本目のピットの位置に、地形（地山）の残存状況からして何らかの痕跡を留めているはずだが、存在しなかったため、調査結果からＰ－５は共伴すると考え、最終的に梁行が１間以上、桁行２間以上の掘立柱建物（跡）ではなかったかと判断するに至った。また、西にある岩の南側下にある、今回ＳＩ０３の壁溝として検出した溝が、実はＳＢ０２の周溝ではないかとしても検討したが、切り合いの前後は判然としないものの、確実に溝の下場の標高が、ＳＩ０３壁溝とした方が低くつまり段差があり、ＳＢ０２周溝と同じ溝でないことと、ＳＩ０３のものとした溝は、明らかにＳＢ０２周溝とは違う自立した弧を描いていることから報告どおり別々のものとした。

覆土　（第17図Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′）（図版６ｂ.）のとおり、まずこの建物以前には、Ｐ－３・４に沿う位置で、東西方向に人工的な溝が存在していたが、恐らく水害によって、黒墨色土（Ｉ層）が堆積したと思われる。その後この建物を建てる際、Ｉ層の上に地山ブロック（II層）を貼って、床面（平地）にしたものと思われる。この溝は、地山面で柱穴を探すための精査中、II層中のＩ層の絡みによる濁りと、この建物廃絶後の浸食によってこの溝北側のII層が飛ばされ、Ｉ層が露出していたことから気づき、サブトレンチを入れて判明したものである。Ｐ－３・４は、II層上面から検出したことから、II層を施した後に柱穴を築いていることは明らかである。ＳＩ０３のIII層が、ＳＢ０２のII層に対応しているとすれば、ＳＢ０２はＳＩ０３に続くものと考えられるが、結論には至らなかった。尚周溝中、黒墨色土（IV層）〔遺物包含層〕は、ＳＢ０２が廃絶する前後に堆積したもので、砂礫（Ｖ層）〔遺物包含層〕は、IV層の砂質化したものと思われることから、IV・Ｖ層堆積の時期差はないと考えた。Ｃ－Ｃ′で観察した堆積は、雨水により流れ込んだ土砂が、Ｐ－４東で終わっている周溝端部から溢れ出し、地面を浸食した痕跡であるが、やはりIV層堆積以後のものというよりは、IV・Ｖ層と同じ堆積であると思われた。柱穴は、Ｐ－３・４が掘り方を示す地山ブロック（III層）と、柱痕を示す黒墨色土３（VI層）によって埋まっている。このIII層は、II層よりＩ層による濁りを強くする。Ｐ－４・５は、VI層の単層により埋まり、Ｐ－１も同様と思われた。

床面　前述のとおり、ある程度失われており、建物全体の規模は不明であったが、生活面は恐らく整地され、貼床も施されその標高は約323.96m前後であったと考えている。炉跡等その他の痕跡は検出できなかった。周溝下場の標高は、第17図Ａ－Ａ′Ｂ－Ｂ′で約323.72mを測る。

柱穴　前述のとおり、Ｐ－２・３・４及び５以外は判然としなかった。柱間は、Ｐ－３から４、Ｐ－４からＰ－５が共に約1.75m。Ｐ－２からＰ－３が1.7m。Ｐ－１からＰ－２が約2.5mである。第16図のＳＩ０３壁溝中から検出したピットからＰ－２が約1.9mであった。このピットあるいは、Ｐ－１が共伴するものであれば、堆積的にもこのＳＢ０２は、ＳＢ０３以後のものという印象を受ける。柱穴下場の標高は、Ｐ－３が約323.72m、Ｐ－４・５が共に約323.6m、Ｐ－２が約323.44m、Ｐ－１が約323.3m。ＳＩ０３壁溝中のピットは約323.1mであった。

遺物　周溝中に堆積したⅣ・Ⅴ層に包含するものである。特徴として、ほとんどの土師器甕片が第17図中遺物18－３・18－４のように、炭化した木片の上にのっていることがあげられる(図版７ａ．ｂ.)。この木片は、材木の可能性が強いと思われたが加工痕等は不明であった。第17図Ｂ－Ｂ′の炭化した木片の径は約10～15cmを測る。またＢ－Ｂ′は、一見してＶ層が堆積した上面に炭化物(と土器)がのり、その上からⅣ層が覆っているようだが、大部分はⅣ層とＶ層の境目に包含しておらず、やはりＶ層は



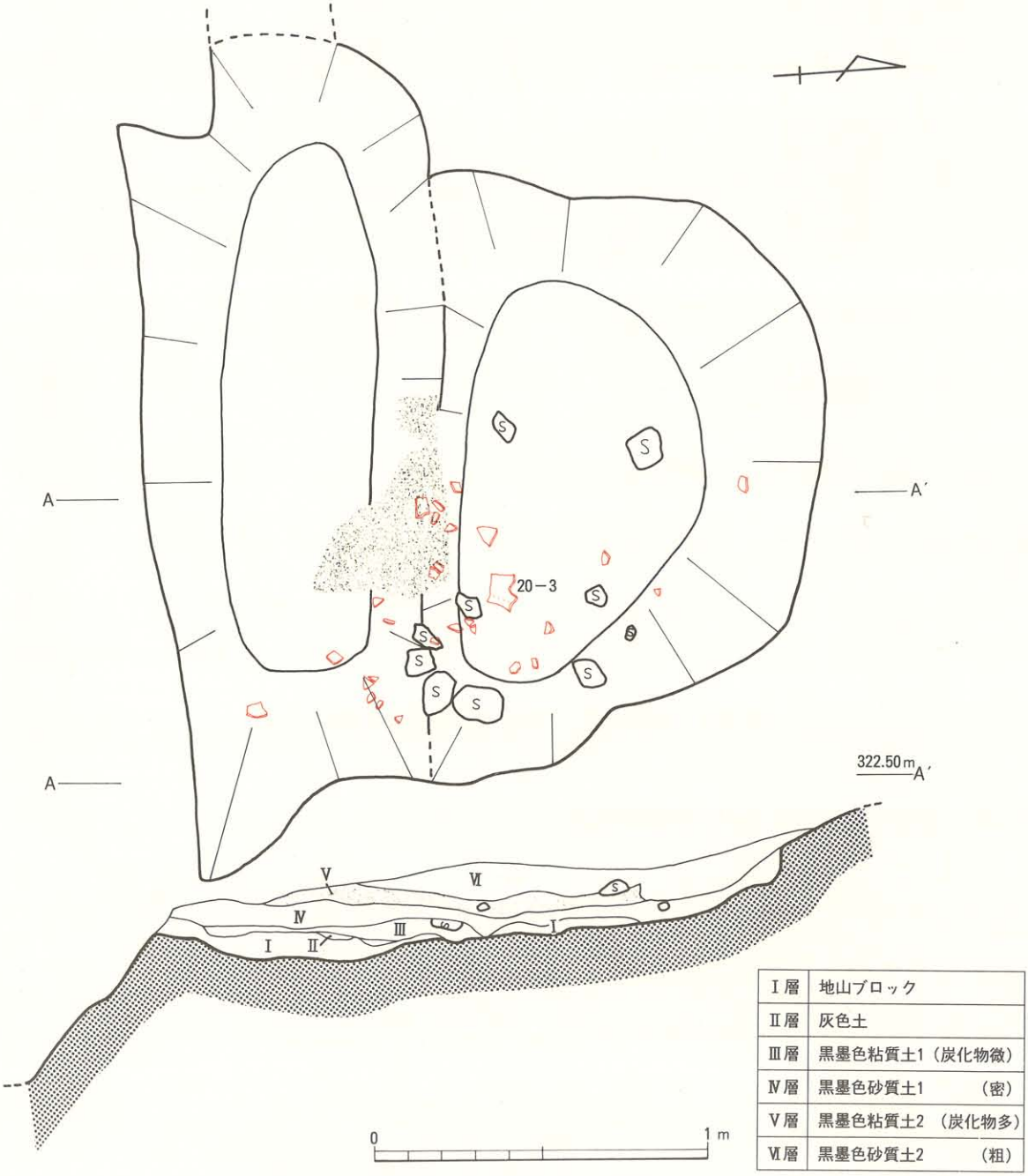
第18図　菅城遺跡　SB02　出土遺物実測図（1:3）

第18図　菅城遺跡ＳＢ０２出土遺物観察表

18図	器種		口径 cm	残高 cm	焼成	胎土	調整等	色調 外面	色調 内面	外面煤	時期	調査区
1	須恵器	蓋坏	10.2	2.7	良好	１mm以下の砂粒を少量含む：密	残存部全てナデ。たちあがり9.5mm。たちあがりと受部の境目が１条の凹線状となっている。	灰白			６Ｃ後～７Ｃ初頭	Ｄ－５
2	須恵器	坏蓋	／	2.4	良好	砂粒無に等しい：密	残存部全てナデ	灰			６Ｃ後～７Ｃ初頭	Ｄ－５
3	土師器	甕	14	8.7	良好	１mm程度の砂粒を含む：密	外面：口縁部ヨコナデ、頸部以下勢いのあるハケ目。内面：口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ	淡黄褐		有		Ｄ－５
4	土師器	甕	18.9	9	良好	２mm以下の砂粒を含む	外面：口縁部ヨコナデ、頸部以下やや雑なハケ目。内面：口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ	鈍い黄橙		有		Ｄ－５
5	土師器	甕	19.8	4.5	良好	１mm以下の砂粒を少量含む：密	外面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ハケ目。内面：口縁部ナデ、以下ヘラケズリ	鈍い橙				Ｄ－５
6	土師器	甕	18.6	8.4	良好	２mm以下の砂粒を含む	外面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ハケ目。内面：口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ	鈍い黄橙		有		Ｄ－５
7	土師器	甕	／	6.9	残存状態不良	５mm以下の砂粒を含む：粗	調整：不明(外面：ナデ？、内面：ヘラケズリ？)	浅黄	明黄褐			Ｄ－５

Ⅳ層の砂質化によるものと考える。以上の遺物の包含状況から、ＳＢ０２に共伴するものとは言い難い反面、流れ込んだものと考えてもそう遠くからのものとは思われず、ＳＢ０２北（山）側には遺構を検出できなかったことも含め、時期差はそれほどないものと考えた。遺物18－１・２は、第17図Ｃ－Ｃ′のＶ層からのものである。遺物18－４は口縁部を真下にして出土。遺物18－７は甑。（図版12ｆ.13ａ.ｂ.）

ＳＢ０２は、６世紀後半から７世紀初頭のものと判断した。



第19図　菅城遺跡　SK01　実測図（1:20）

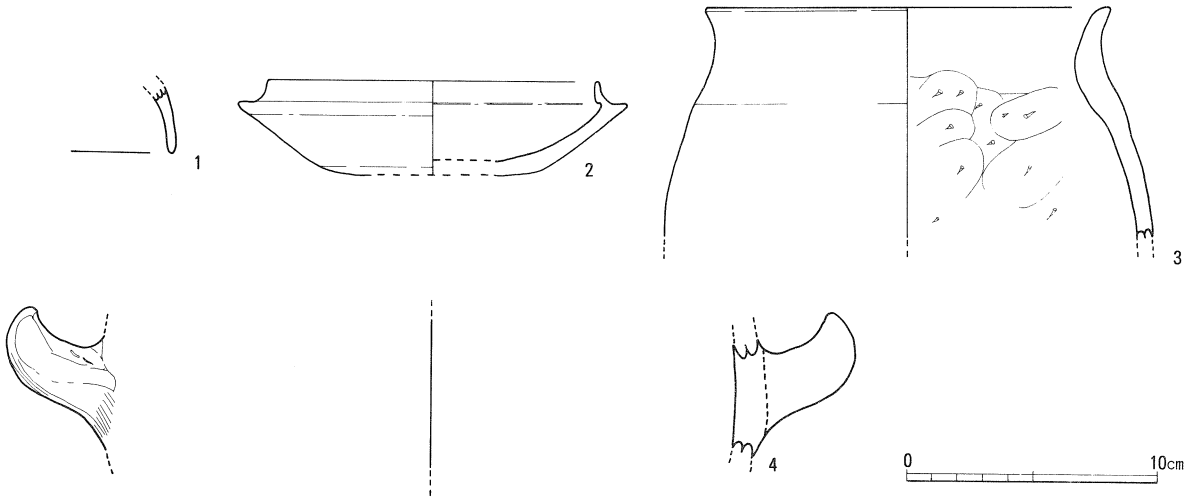
ＳＫ０１　（第19・20図）（図版７ｃ.）

位置　調査区南東Ｆ－６区、ＳＢ０１周溝東側端部から約３ｍ東に位置し、土杭として検出したものである。下場の標高が約322.0m前後を測る。

形状　５層掘削後の精査中検出した。埋没後の雨水による流出と、南側は、後世の水田化に伴い削りとられ、遺構の一部を失っている。復元した上場の径は、南北に約2.3m程度。完掘後の結果、底部中央が、東西にわずかに高くなっていることから、およそ二つに分けて掘り込まれたものと思われるが、しかし堆積は二分せず切り合いは無かったことから、一つの遺構として考えた。また、ＳＫ０１の西側に浅い溝らしきものを検出したが、ＳＢ０１周溝東側端部との関係等、判然としなかった。

覆土　Ｉ層は掘り込んだ後に改めて埋めた（貼った）ものと思われた。II層は灰の層である。Ｖ層には炭化物が多量にあり、やはり何かを燃やした跡と思われる。尚、Ｖ層炭化物上面VI層下面からの遺物が一番多かった。ただし調査ミスにより、ＳＫ０１東側半分は図化する前に遺物を取り上げてしまったり、層単位の遺物の観察を行わなかった、反省する。

遺物　遺物20－１は須恵器坏蓋、20－２（図版13ｃ.）は須恵器蓋坏であり、20－３は土師器甕、20－４が甑である。尚20－３以外は前述のミスから正確な出土地点は不明である。（図版８ａ.）調査結果から、土杭は焼却（ゴミ捨て）場のようなもので、その時期は20－２から、６世紀後半から７世紀初頭頃と思われる。



第20図　菅城遺跡　SK01　出土遺物実測図（1:3）

第20図　菅城遺跡ＳＫ０１出土遺物観察表

20図	器種		口径 cm	底径 cm	残高 cm	土器表面残存状態	胎土	調整備考	色調 外面	色調 内面	外面煤	時期	調査区
1	須恵器	坏蓋	／	／	2.8	焼成良好	２mm以下の砂粒を含む：密	残存部は回転ナデ	灰白		／		Ｆ－６
2	須恵器	蓋坏	13.3	?	器高：3.8	焼成良好	２mm以下の砂粒を少量含む：密	回転ナデ、底部を１cm幅のヘラで、回転によらないヘラ調整。	白灰		／	６Ｃ後半～７Ｃ初頭	Ｆ－６
3	土師器	甕	16	／	9.3	不良	４mm以下の砂粒を含む	詳細不明。口縁部頚部：外面回転ナデ。内面頚部以下：ヘラケズリ	浅黄橙		有		Ｆ－６
4	土師器	甑	／	／	4.7	不良	２mm以下の砂粒を含む：密	把手下部：ハケメ	浅黄橙		／		Ｆ－６

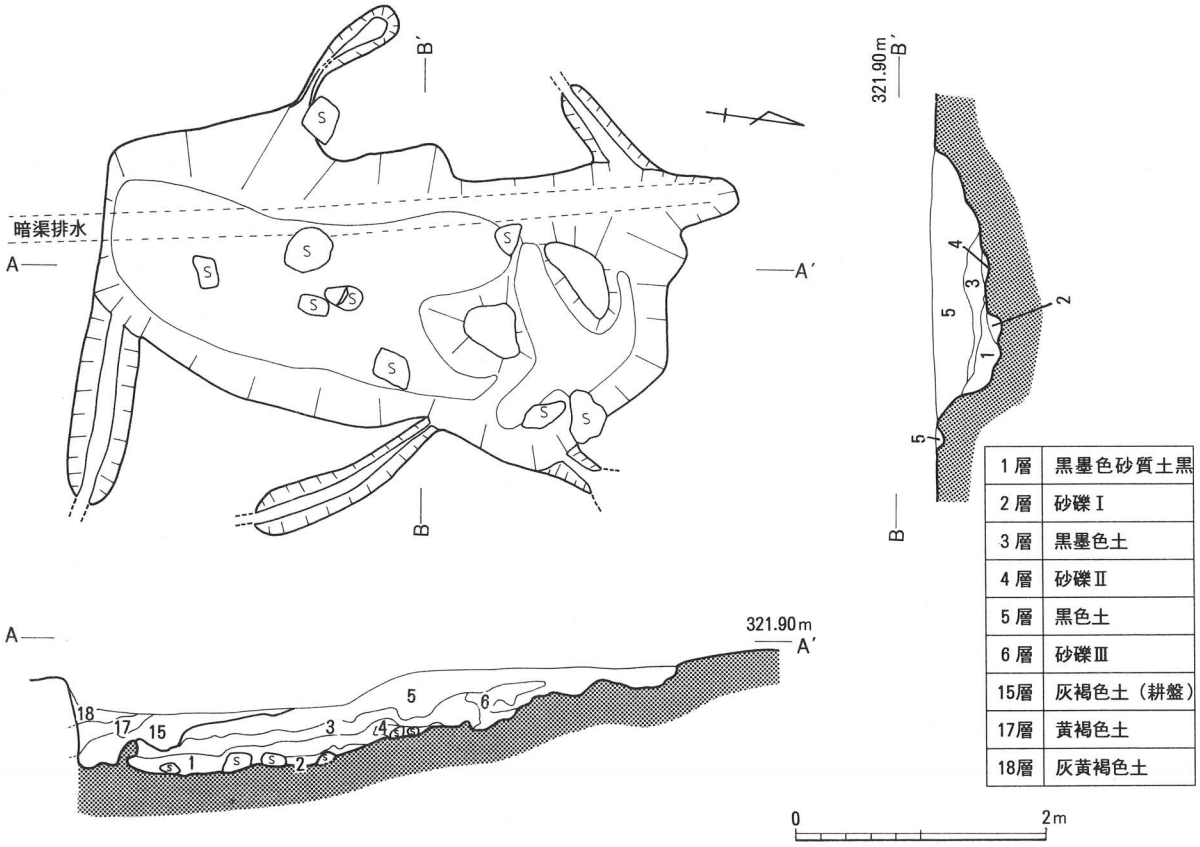
ＳＸ０１　**（第21図）（図版８ｂ.）**

位置　調査区南端やや東側、Ｅ－７区に所在する。ＳＢ０１・ＳＩ０１の南に位置している。標高は第20図Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′のとおりである。

形状　５層掘削後の精査中、南北に延びるおよそ楕円形のプランを確認し、周辺に遺構の多いことから、遺構の可能性を考え調査したものである。しかし完掘後、その底部は地形に沿ってなだらかに傾斜し、径40cm以下の自然のものと思われる石がころがっているという状態で、後に述べるＳＲの川底と同様であった。ＳＸ０１の南側と北側は後世に失われたにしろ、層序的にＳＩ０１の時期には、ある程度機能していたと思われたが判然としなかった。尚、ＳＸの上場に確認した５本程の浅い溝についても判然としないが、恐らく５層が堆積する時についた、流れ込みあるいは流れ出た痕跡であろう。

覆土　土層観察から、遺構内の堆積ではなく、むしろ基本土層を示す堆積であることがわかった。したがって土層をアラビア数字で示す。まず１から６層までが自然的堆積を、５層上面の15・17・18層は、客土である。(図版８ｃ.)

遺物　５層中から土師質の細片が微量認められたのみで、予想に反して観察できるようなものが出土しなかった。以上のことから、ＳＸ０１は５層堆積によってその機能を終えた。ＳＲと同様のものである可能性が強いと判断するに至った。



第21図　菅城遺跡　SX01　実測図（1:60）

結① 羽須美村内における他の古墳時代の遺跡について、以下『羽須美村誌上巻』から横山純夫氏執筆を参考・引用して述べる。まず、羽須美村における古代史研究の流れとして次のとおりである。

「羽須美村の古代遺跡が初めて紹介されたのは、大正６年刊『阿須波の流』および大正15年刊『口羽郷土史』である。その後『阿須波の流』は…（中略）…『阿須波史考』となって出版されている。…（中略）…邑智郡全体の古代遺跡ということになると、…（中略）…大正13年刊『島根県史』第四巻…（中略）…その後昭和12年には『邑智郡誌』が刊行されるのである。…（中略）…邑智郡内の古代史研究を考古学的立場から飛躍的に進展させたのは門脇俊彦氏である。氏は昭和31年、教員として邑智町に赴任して以来十数年間にわたって、本郡の古代史解明につとめてこられた。…（中略）…氏の業績はそのまま瑞穂町在住の考古学研究者吉川正氏に受け継がれ現在にいたっているのである。…（略）」[2]

横山氏も門脇氏の指導を受けられたとあり、横山氏が旧阿須那中学校教諭時代に羽須美村内の遺跡・出土遺物について調査・考察され、昭和62年刊『羽須美村誌』にまとめられたものが、羽須美村古代史の基礎資料となっている。「菅城遺跡」の発見、周知も氏の功績によるものであり、今回発掘調査によって確認した古墳時代の遺構に関連して、村内のものを下表にて紹介する。

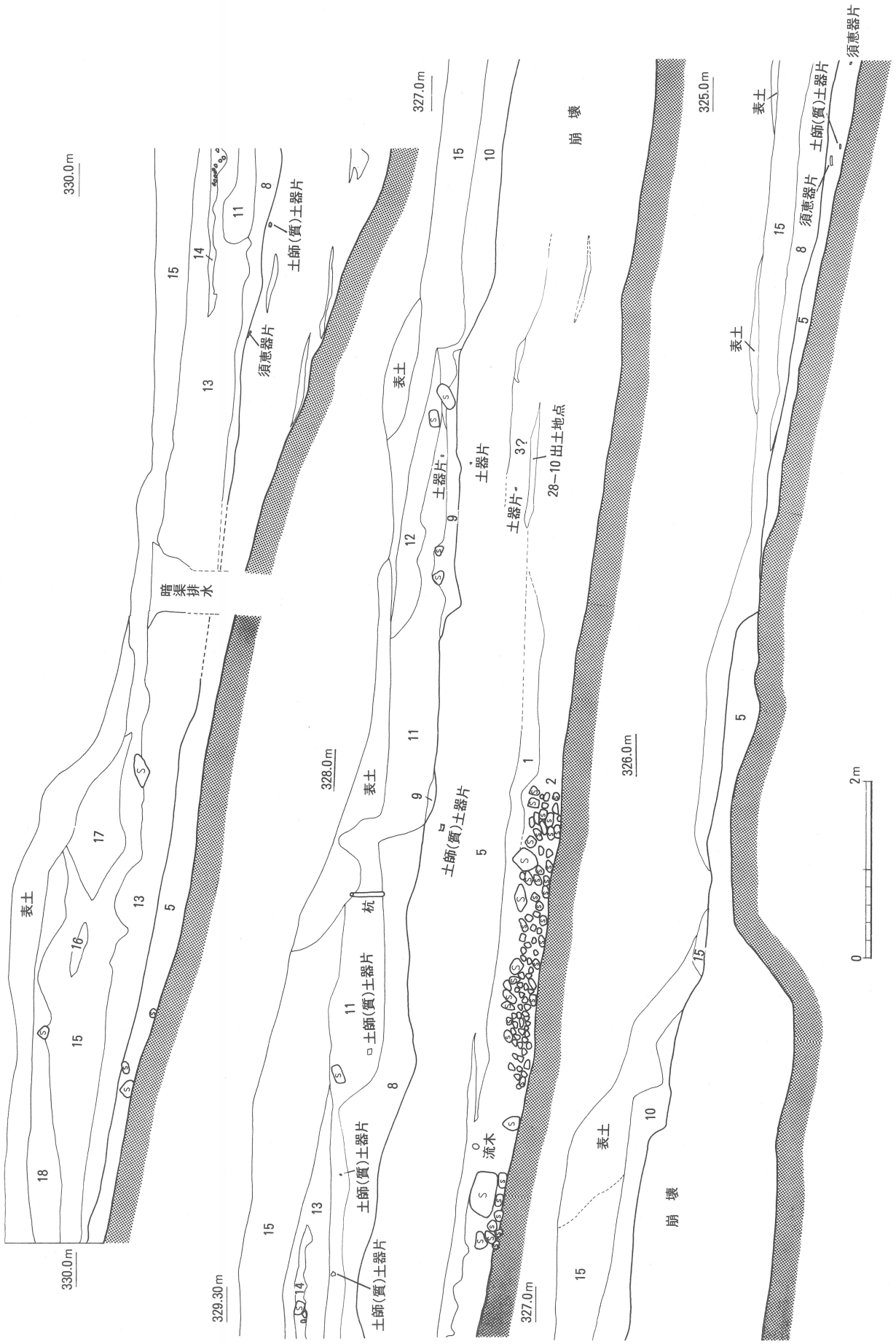
古墳(墓)名	所　在　地	概　　要	遺構	遺物	古墳(墓)名	所　在　地	概　　要	遺構	遺物
浄福寺横穴（じょうふくじ）	上田　長田	人骨・直刀・耳環他	消滅	現存	塚ノ池古墳（つかのいけ）	木須田塚ノ池	須恵器	不明	不明
次郎山古墳（じろうやま）	上田　松木	箱式石棺・木炭多量	消滅	消滅	神原古墳（じんばら）	宇都井　神原	横穴式石室・須恵器	消滅	不明
宮尾山古墳（みやおやま）	下口羽宮尾山	箱式石棺・鋤・鍬・刀	消滅	現存	野伏原古墳（のぶしばら）	上田　長田	横穴式石室・三墨環頭	現存	現存
中原古墳（なかばら）	下口原　中原	未調整で不明　径約８ｍの円墳			塚ノ原古墳（つかのはら）	雪田　川淵	横穴式石室・須恵器	現存	現存

以上が羽須美村の周知の古墳である。ただし、石室の現存も破壊を受けているものであったり、出土遺物に関しても全て現存するものではない。（後述する槙尾城（まきおじょう）古墳も、現在周知の遺跡である。）

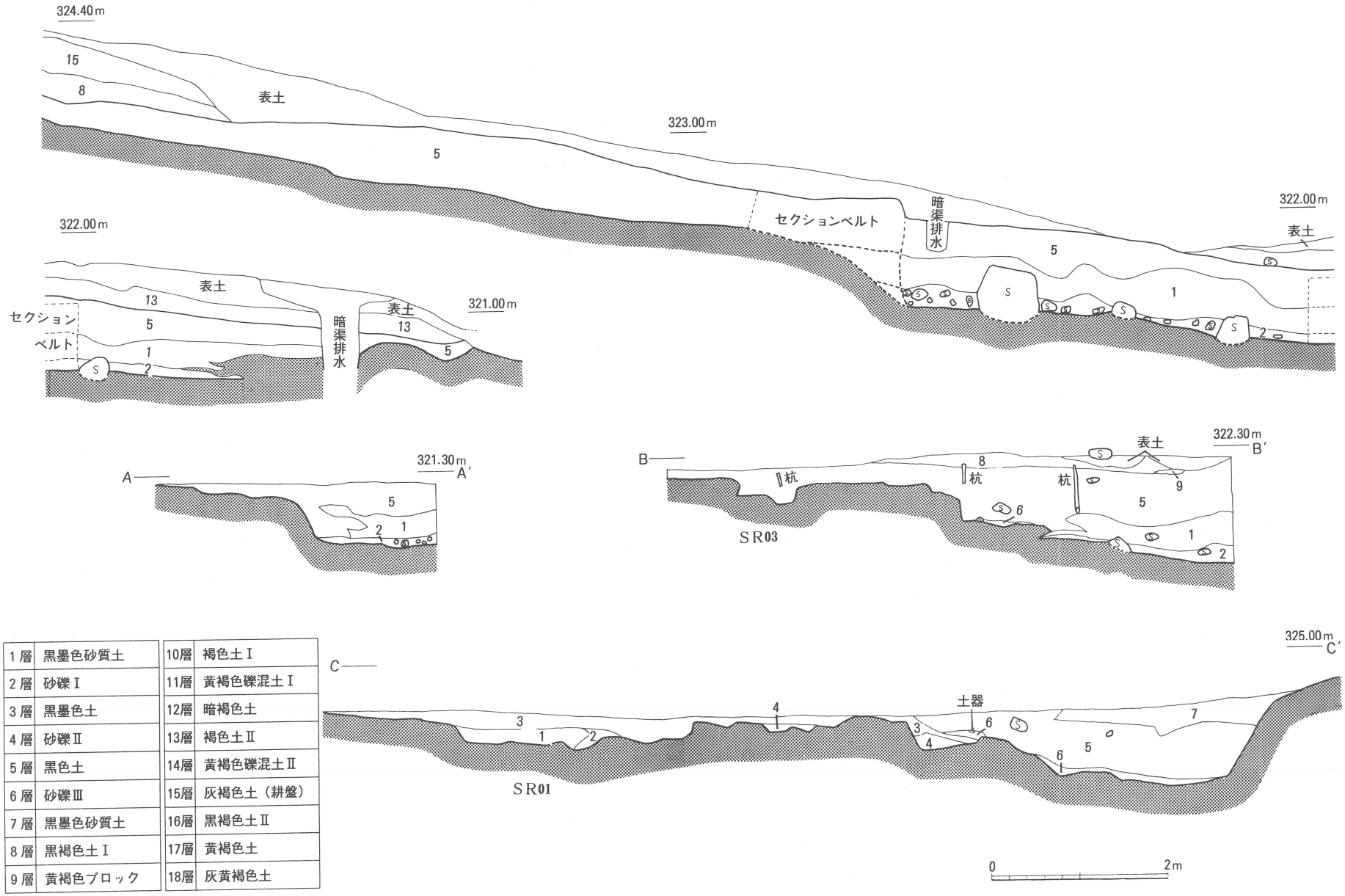
羽須美村においてこれまで確認されている古墳は全て古墳時代後期のものである。菅城遺跡のＳＩ０３・ＳＢ０１・０２・ＳＫ０１も同様であった。建物跡の確認としては菅城遺跡が初めてになる。

ところで、羽須美村内では至る所で鉄穴流しを行っているため、地形も変わっている場合が多く、それ以前の城館跡や古墳、集落跡等も失われていることも多いと想像できる。しかし、これからの綿密な分布調査だいで、先人の生活跡が新たに発見されることは間違いない。近年では、昭和61年、長田の槙尾城跡の調査中に卜部吉博氏が発見された「槙尾城古墳」円墳二基があり、平成７年、戸河内柚ノ木の「(仮称) 大フケ古墳」円墳二基の発見がある。いずれも踏査のみで詳細は不明である。

さらには、羽須美村文化財審議委員でもある日高亘氏の城館調査の成果がある。



第22図　菅城遺跡　土層断面図（第2図B－B）



1層	黒墨色砂質土	10層	褐色土Ⅰ
2層	砂礫Ⅰ	11層	黄褐色礫混土Ⅰ
3層	黒墨色土	12層	暗褐色土
4層	砂礫Ⅱ	13層	褐色土Ⅱ
5層	黒色土	14層	黄褐色礫混土Ⅱ
6層	砂礫Ⅲ	15層	灰褐色土（耕盤）
7層	黒墨色砂質土	16層	黒褐色土Ⅱ
8層	黒褐色土Ⅰ	17層	黄褐色土
9層	黄褐色ブロック	18層	灰黄褐色土

第23図　菅城遺跡　SR断面図（第27図A－A′・B－B′・C－C′）

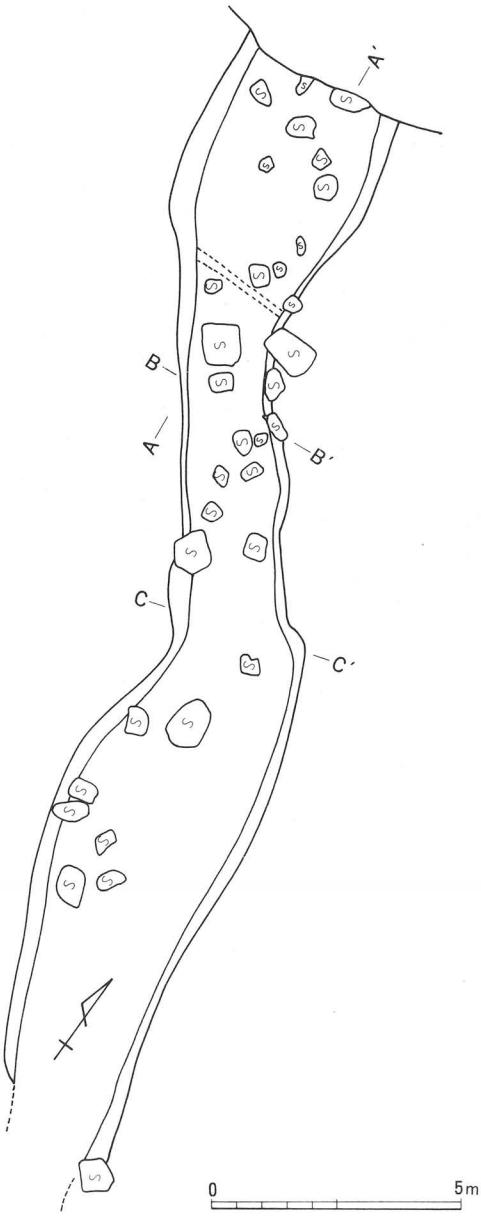
ＳＲ０１　**（第24・25・26図）（図版９ｂ.）**

位置　調査区北Ｄ－１区から、南南東に向かって延びＦ－５区でＳＲ０２と合流する旧谷川跡である。川底の標高約329.36m～324.0mを測る。

形状　残存する地山の形状しかわからず、旧谷川が水を湛えていた頃の状態は正確にはつかめない。地山の上場から、川幅およそ約４ｍ～1.5mを測る。川の中にはＤ－２・Ｅ－２を中心に約50cm程の石がころがり、幅１ｍに達する岩石もある。それらは、地山に残る川の深さよりも厚く、つまり地山の上場から顔を覗かせていた。また、これらの岩石は地山から浮いており、後述するＳＲ０２の遺物28-1が岩石の下敷きになって出土していることからもわかるとおり、１層が堆積する際に流れ込んだものと思われ、かなりの雨量に伴った土砂崩れのようなものが旧谷川を襲ったものと考えられる。

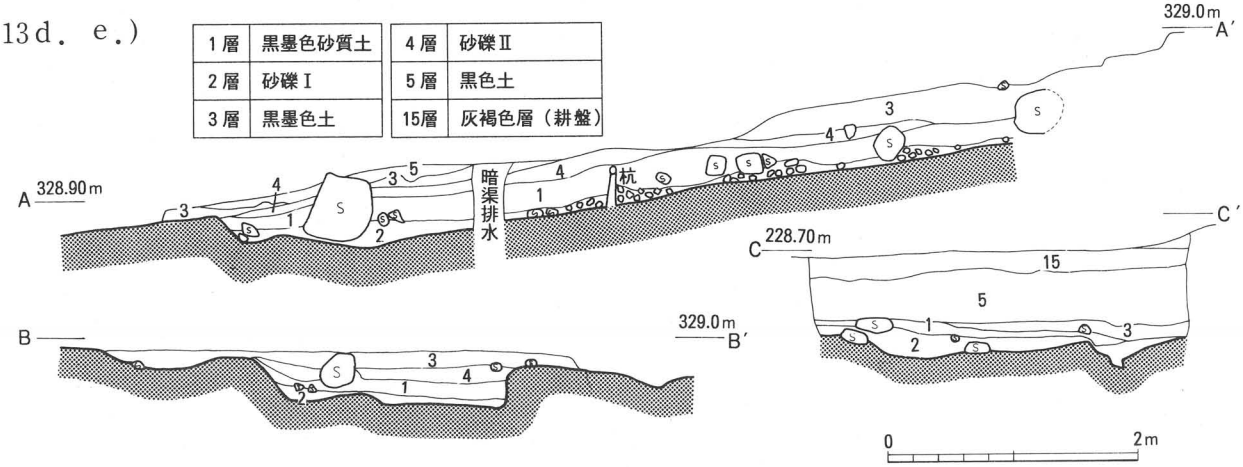
覆土　まず、黒墨色砂質土（１層）が堆積し、続いて黒墨色土（３層）が堆積する。砂礫Ｉ（２層）の礫(石)は、当然川底にあったものであろうが、２・４層は基本的に１・３層の砂質化と考えている。旧谷川中の岩石は、前述どおり１層堆積時のものであり、おおむねこの堆積によってＳＲ０１はその姿を消す。

遺物　１層及び１層と２層の境目から遺物26－１・26－４・26－８・26－９等が出土し、３層から26－５・26－11等、４層からも出土がある。摩滅もひどく、上流から流されて来たことに間違いない。(図版13ｄ．ｅ.)

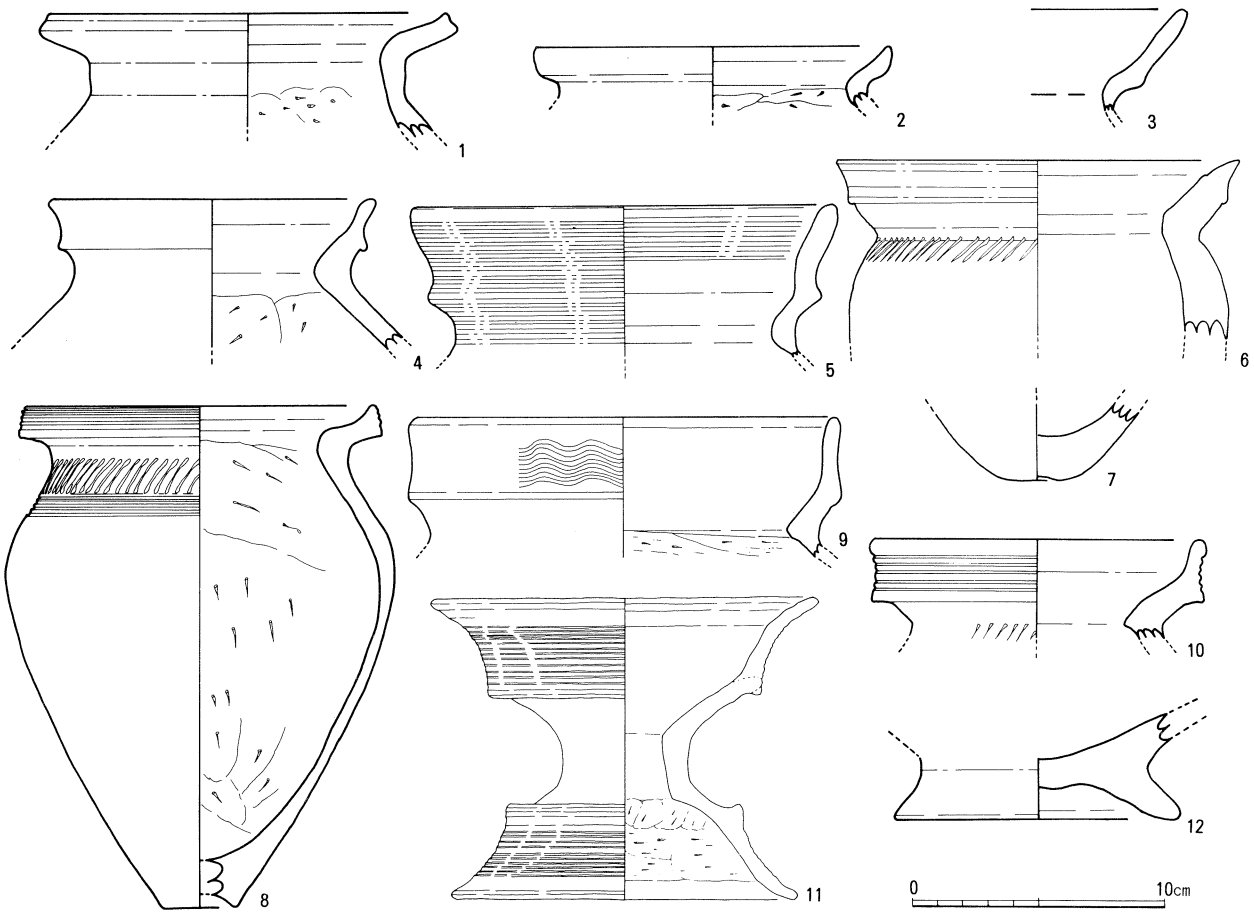


第24図　菅城遺跡　SR01　平面図（1:150）

1層	黒墨色砂質土	4層	砂礫Ⅱ
2層	砂礫Ⅰ	5層	黒色土
3層	黒墨色土	15層	灰褐色層（耕盤）



第25図　菅城遺跡　SR01断面図（1:60）



第26図　菅城遺跡　SR01・SR04　出土遺物実測図（1:3）

第26図　菅城遺跡ＳＲ０１・ＳＲ０４出土遺物観察表

26図	器種		口径 cm	底径 cm	残高 cm	土器表面残存状態	胎土	調整 口縁部外面	調整 口縁部内面	調整 内面頸部以下	調整 外面頸部～片部	色調 外面	色調 内面	外面煤	時期	調査区
1	弥生	壷	16	／	4.8	不良	3mm以下の砂粒を多量に含む：粗	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	ナデ	淡黄褐		／	後期	D－2
2	弥生土器	甕	14.2	／	2.5	不良	2mm以下の砂粒を含む	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	ナデ	鈍い黄橙	褐灰	／	後期	D－2
3	弥生土器	甕	／	／	4	良	2mm以下の砂粒を微量含む：密	ハケメ	ナデ	ヘラケズリ	／	黒褐	灰黄	／	後期	D－2
4	弥生土器	甕又は壷	13.1	／	6	良	2mm以下の砂粒を多量に含む：粗	回転ナデ	回転ナデ	ヘラケズリ	ナデ	鈍い黄橙		有	後期	D－2
5	弥生土器	甕	16.8	／	6.2	不良	3mm以下の砂粒を多量に含む：粗	ハケメ	ナデ・ハケメ	ヘラケズリ	ハケメ・ナデ？	淡黄褐		／	後期	試W-H-1・D-2
6	弥生土器	甕	16	／	7.4	不良	3mm以下の砂粒を微量含む：密	回転ナデ	回転ナデ	ヘラケズリ	刺突(列点)文	淡黄褐		／	後期	D－2
7	26－6の底部		／	1.7	3.1	不良	2mm以下の砂粒を微量含む：密	座りの悪そうな底径1.7cmの底部は1.5mm凹んでいる。外面：ナデ？・内面：ケズリ				淡赤橙	鈍い黄橙	／	後期	D－2
8	弥生土器	甕	14	3	20.1	良好	3mm以下の砂粒を多量に含む	4条の櫛描沈線	回転ナデ	ヘラケズリ	刺突(列点)文・4条櫛描沈線・ミガキ	淡黄	鈍い黄橙	有	後期	D－2
9	弥生土器	甕	16.7	／	5.6	不良	3mm以下の砂粒を多量に含む：粗	8条前後の波状文	ナデ	ヘラケズリ	回転ナデ・波状文痕？	暗茶褐	淡褐	有	後期	E－2
10	弥生土器	甕	13.2	／	4	不良	2mm以下の砂粒を含む	5条の凹？線文	回転ナデ	ヘラケズリ	ナデ・刺突（列点）文	鈍い黄	浅い黄	／	後期	D－2
11	弥生	鼓形器台	15.2	13.6	器高 12.1 筒部径5	燃成良好	2mm以下の砂粒を含む	口縁部：外面10条以上の擬凹線、内面ヘラミガキ。脚部：外面11条以上の擬凹線、内面ヘラケズリ				淡茶褐		／	後期	E－2
12	SR04	弥生	甕か壷の底部	10.2	4.2	不良	3mm以下の砂粒を多量に含む：粗	台付甕または壷の底部。台部の外面は縦方向に、底部外面は横方向に指でナデ。内面にはケズリは無く、丁寧なナデ。						／	中期	試W-H-1・D-2

ＳＲ０４（第３・26図）（図版11ｂ．ｃ．）

位置と形状　調査区北Ｃ－１区から調査区南Ａ－５区に向かう流れと、Ｂ－２区から南に向かいＢ－３区で前者と合流する、二本から成る旧谷川跡でありＳＲ０１・０２の関係と似ている。

ＳＲ０４は、第３章及び本章（基本層序）でも触れているとおり、平成５年の試掘調査トレンチＷ－Ｆ－２・３でその一部を確認したもので、今回地山面での精査でアウトラインを出し、再度トレンチＴ－Ａ～Ｃで調査したものである。しかし出土遺物が無に等しかったこともあって、それ以上の調査を行わなかった。よってＳＲ０４として一括した。

遺物　試掘時出土の遺物26－12。

ＳＲ０２（第23・27・28図）（図版10ｂ．11ａ．13ｆ．14ａ．ｂ．ｃ．）

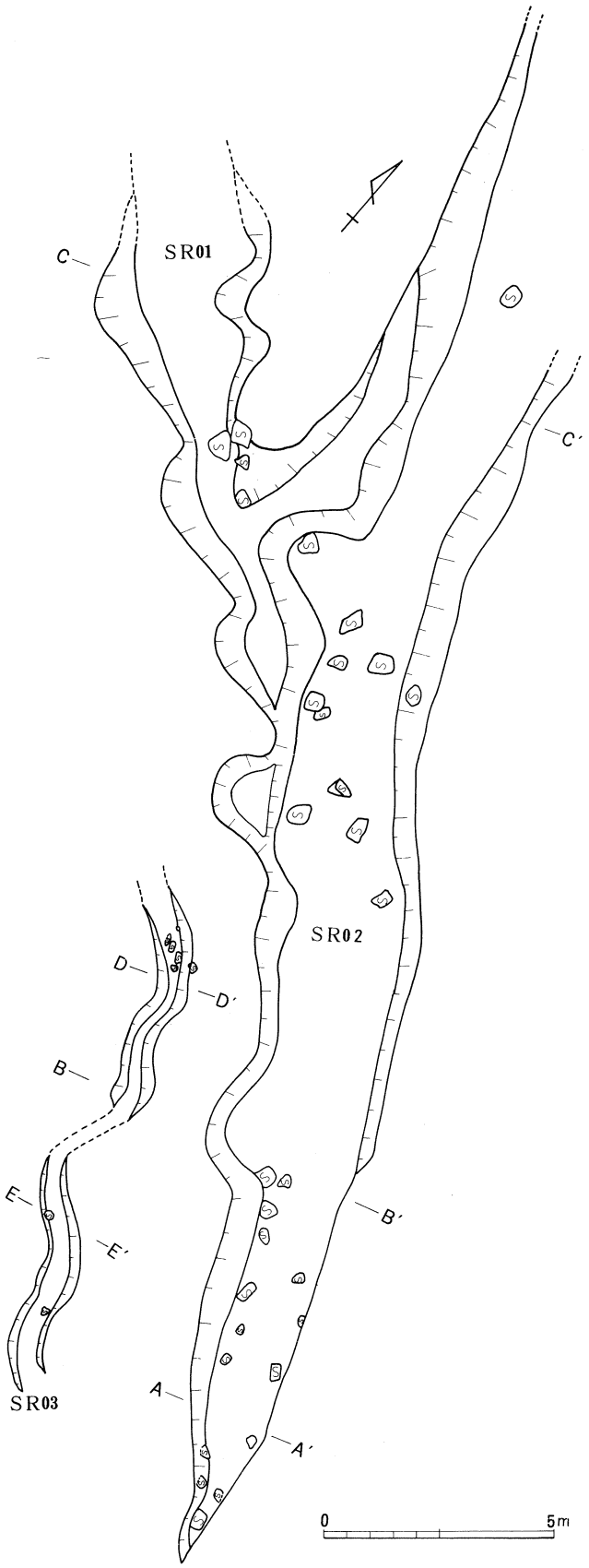
位置　調査区北Ｆ－２区から現れ、調査区南Ｇ－６区で調査区外となる旧谷川跡で、Ｆ－５区でＳＲ０１と合流するものである。川底の標高は、Ｆ－２区最北約326.30ｍからＧ－６区（第23・27図Ａ－Ａ'）で約320.45ｍを測る。

形状　残存する地山の状態から、川幅は最大約４ｍである。

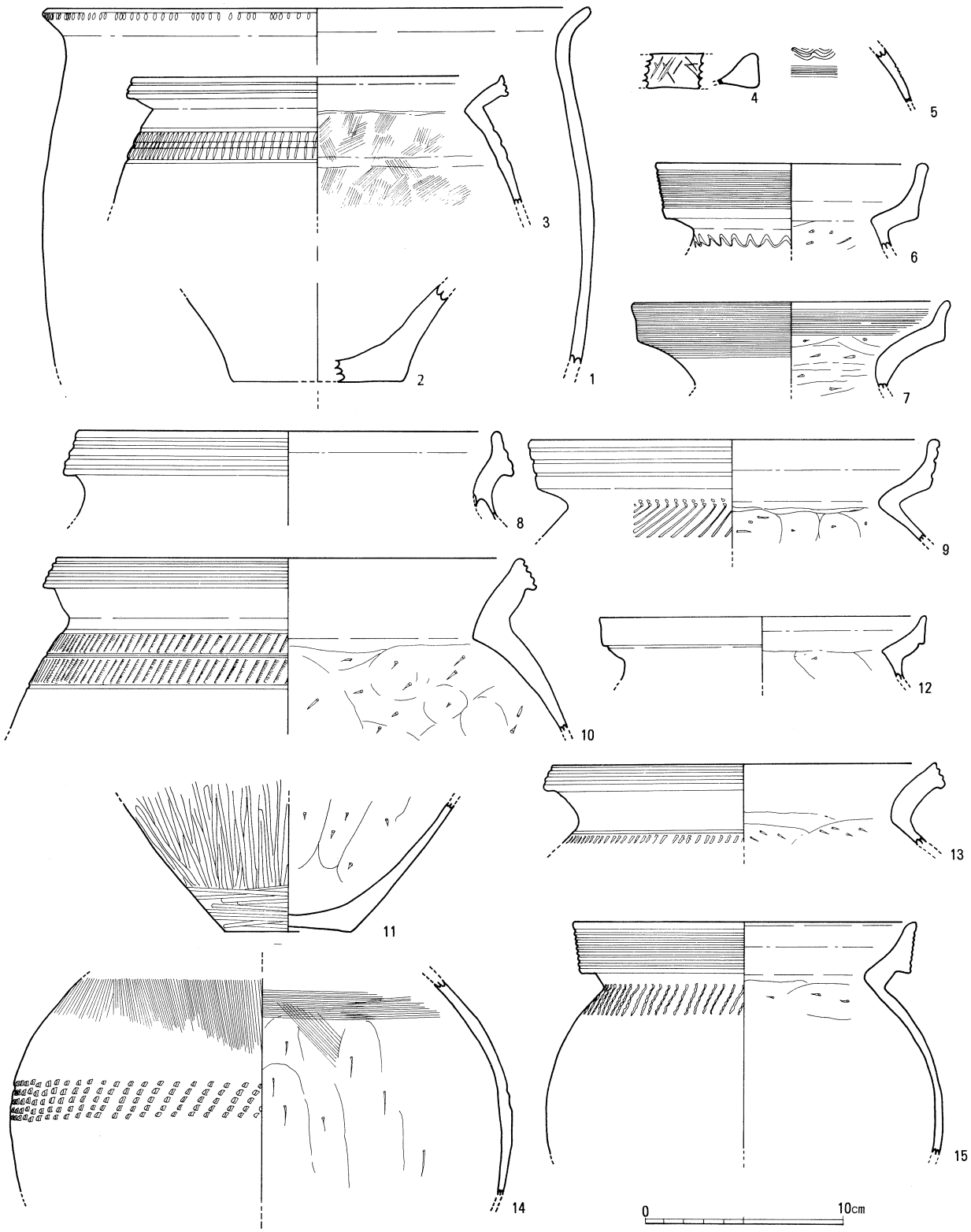
覆土　５層の堆積により、その機能を完全に失っている。

遺物

１層と２層の境目から、弥生中期前葉頃と思われる遺物28－１・２甕が、後から流されて来た石に押しつぶされた形で出土したが、同層から弥生中期後



第27図　菅城遺跡　SR02・SR03　平面図（1:150）



第28図　菅城遺跡　SR02　出土遺物実測図（1:3）

葉の（広島県）塩町式の甕28－３や、後期の甕28－15等も出土した。また、１と15には煤が外面全体にびっしり付着していた。おそらく、時期差のあるこれらの土器は、弥生時代後期頃１層が流れ込む際、中期の遺物を包含する土層を浸食し、混ざり合って流れ込んだと思われる。28－４は中期広口壺

第28図　菅城遺跡ＳＲ０２出土遺物観察表

28図	器種		口径 cm	底径 cm	残高 cm	土器表面残存状態	胎土	調整 口縁部外面	調整 口縁部内面	調整 内面頸部以下	調整 外面頸部～片部	色調 外面	色調 内面	外面煤	時期	調査区
1	弥生土器	甕	27.5	／	18.3	焼成良好	２mm以下の砂粒を微量に含む：密	単純口縁、口唇部刻目		丁寧なナデ	ハケメ？	不明	灰褐	有	中期前葉	Ｇ－５
2	28－１の底部		／	8.6	4.9	焼成良好	２mm以下の砂粒を微量に含む：密	底部：両面共丁寧なナデ、内面、胴部にかけ煤				鈍い褐		有？	中期前葉	Ｇ－５
3	弥生土器	甕	19	／	6.5	焼成良好	１mm以下の砂粒を微量に含む：密	２条の凹線	回転ナデ	ハケメ	３条の凹線文と刺突(列点)文の組合せ	塩町式	鈍い黄橙	／	中期後葉	Ｇ－６
4	弥生	広口壷	／	／	1.8	不良	１mm以下の砂粒を含む：密	斜格子文	回転ナデ	／	／	鈍い橙		／	中期後葉	Ｇ－５
5	弥生	甕又は壷	／	／	2.7	良好	２mm以下の砂粒を含む	／	／	ヘラケズリ	波状文と直線文	灰白	鈍い黄橙	／	後期	Ｇ－３
6	弥生土器	甕	13.8	／	4.2	良	３mm以下の砂粒を多量に含む：粗	櫛状工具による沈線文	回転ナデ	ヘラケズリ	波状文	褐灰	鈍い黄橙	有	後期	不明
7	弥生土器	壷	15.8	／	4.2	良好	３mm以下の砂粒を多量に含む：粗	ハケメ	ナデ？・ハケメ	／	ナデ？	褐灰	鈍い黄橙	有	後期	不明
8	弥生土器	甕	21.4	／	4.3	良好	２mm以下の砂粒を含む	４条の凹線	回転ナデ	／	回転ナデ	浅い黄橙		／	後期	Ｆ－３
9	弥生土器	甕	20.8	／	5	良好	２mm以下の砂粒を多量に含む	３条の凹線	回転ナデ	ヘラケズリ	刺突(列点)文	黄灰	灰黄褐	／	後期	Ｇ－６
10	弥生土器	甕	23.5	／	8.9	焼成良好	３mm以下の砂粒を多量に含む：粗	４条の凹線文	ナデ	ヘラケズリ	３条の凹線文と刺突(列点)文の組合せ	鈍い黄褐	鈍い褐	／	後期前葉	Ｆ－３
11	28－10の底部		／	6.4	6.7	焼成良好	４mm以下の砂粒を多量に含む：密	底部：外面縦方向と横方向による丁寧なヘラミガキ。内面ヘラケズリ				鈍い橙	鈍い褐	有	後期前葉	Ｆ－３
12	弥生土器	甕	16.6	／	3.3	焼成良好	３mm以下の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	ヘラケズリ	回転ナデ？	褐灰	鈍い褐	有	後期	Ｆ－４
13	弥生土器	甕	19.3	／	4	焼成良好	２mm以下の砂粒を少量に含む	３条の凹線文	回転ナデ	ヘラケズリ	凹線文と刺突(列点)文の組合せ	浅い黄		有	後期	Ｆ－３
14	弥生土器	甕？	／	／	11	良	１mm以下の砂粒を含む：密	胴部：内面、ヘラケズリ・ハケメ。外面、ハケメ・列点（刺突）文				鈍い黄橙		有	後期？	Ｇ－５
15	弥生土器	甕	17.8	／	11.9	焼成良好	２mm以下の砂粒を含む：密	沈線文	回転ナデ	丁寧なヘラケズリ又はケズリ後ナデ	刺突文・ナデ又はミガキ？	／	鈍い褐	有	後期	Ｇ－５

の口縁端部細片。また、３層上層出土の28－10・11(図版14ｂ.)及び13は塩町式の影響を残している後期の甕39であり、３条の凹線で区画された中に刺突文様を施している。底部外面はミガキが上方（胴部）に向かって、最下部は横方向に入っている。内面頸部以下はヘラケズリである。石見Ｖ－１様式13と考えられる。

ＳＲ０３（第27・29・30図)(図版10ａ.)

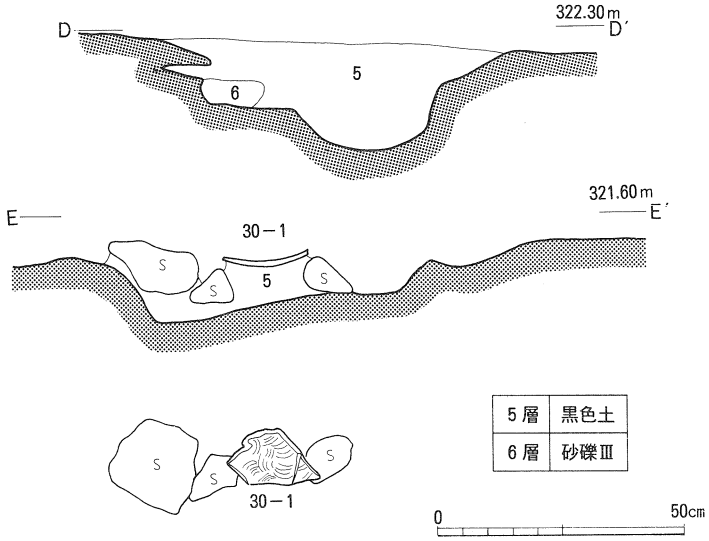
位置　調査区東南Ｇ－６区で確認したものである。Ｆ－５区方面からＧ－７東へ、ＳＲ０２と沿うように流れている。

形状　地山に残された残存状態は、長さ約12m川幅約90cmと他のＳＲに比べ規模も小さく、川と言うより溝の様相を呈しているが、自然のものと判断した。

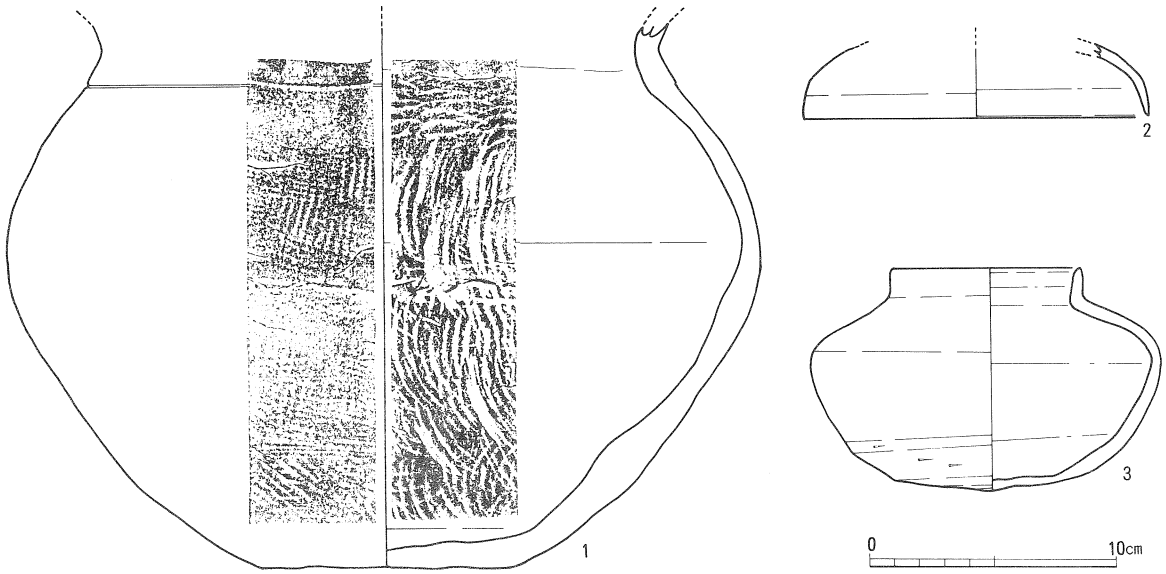
覆土　５層及び、５層の砂質化した６層によってその機能を失っている。

遺物　遺物30－１は軟質の須恵器甕で、昭和47年出土のものと同一固体であった(図版14ｄ)。30－２・３は平成５年の試掘時にトレンチＷ－Ｌ－１から出土、３は有蓋短頸壺の完成品。２は当初３の蓋と考えていたが、焼成・色調・復元径から別々のものと判断した。

第31図　旧谷川跡は地山面での精査で輪郭を出し、そのレベル以下のの出土遺物をＳＲ出土して扱ったため、同じ５層であってもＳＲ出土と、単なる流れ込み遺物扱いとなってしまったものができた。いずれにせよ流れ込んだ遺物ではある。第31図は、弥生中期中葉の壺である遺物31－３（図版14ｆ.）は５層からの出土であるが、同層には須恵器も包含し、また前述のＳＲ０２出土遺物28－15（弥生後期）が、１・２層の境目からのものであることも含め、流れ込み遺物は、必ずしも古い遺物が下層にあるという層序は成り立たない。ただし、確実に弥生土器は１・３層を中心に５層以前のものであり、須恵器は５層を中心に13層以前の堆積に包含するものである。以下、流れ込み遺物（第31～35図）は、層別による分類ではなく、遺物の時代による大まかな分類として報告する。



第29図　菅城遺跡　SR03　断面図・遺物出土状況図（1:15）



第30図　菅城遺跡　SR03　出土遺物実測図（1:3）

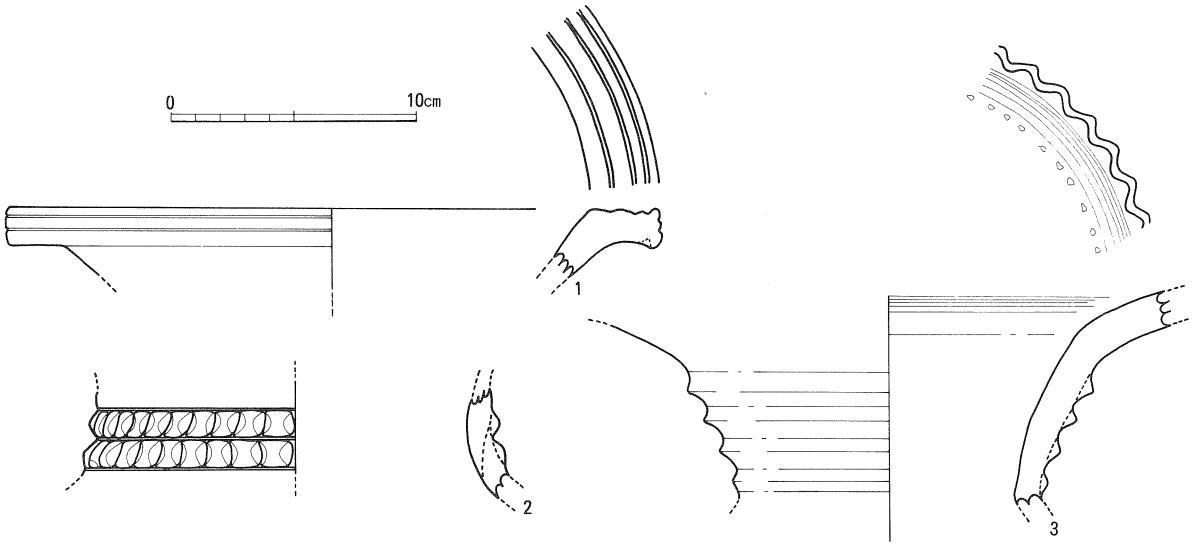
第30図　菅城遺跡ＳＲ０３出土遺物観察表

30図	器種		口径 cm	底径 cm	器高 cm	残高 cm	焼成	胎土	調整備考		色調	時期	調査区
1	須恵器	甕	／	10	／	21.8	やや不良	2mm以下の砂粒を少量含む	外面：頸部に１条の凹線。雑な叩き目	内面：雑な青海波文。底部は叩き伸ばされ丸底。	灰	?	昭和47年・G－6
2	須恵器	坏蓋	14	／	／	3.6	良好	2mm以下の砂粒を含む	残存部回転ナデ。試掘時に出土、当初は30－３の蓋と考えたが、復元口径が合わなかった。		青灰	６ｃ後～７ｃ初頭	試W－L－1 G－6
3	須恵	有蓋短頸壺	7.6	8	9	／	良好	3mm以下の砂粒を含む	口縁部直立。外面底部回転ヘラケズリ。他は回転ナデ片部～底部に一部自然釉、3mm以下砂粒多量付着。		灰	６ｃ後～７ｃ初頭	試W－L－1 G－6

第31図の弥生時代中期の遺物が５層からも出土していることから、幾度の水害によって遺跡上方から流されてきたものと考えられる。１は口縁端部内面（天井面）に３条、外面に２条の凹線文が施されている。２は試掘調査時に出土したもので、頸部に２条の指頭圧痕文を持つものである。１・２は残存状態が悪い。３は頸部から口縁部にかけてのものであり、口縁端部は失われている。頸部に４条以上の突帯文を持ち、口縁部内面（天井面）に櫛描による波状文、沈線文・刺突文をあしらっている。

第32図　ＳＲ０１を覆い、完全に過去のものとした３層からの流れ込みによる遺物であり、複合口縁を持ち、内面頸部以下にヘラケズリを施す弥生時代後期のものである。３層以下の土層からは弥生時代以降の遺物を包含しないため、３層は弥生後期の堆積と判明した。

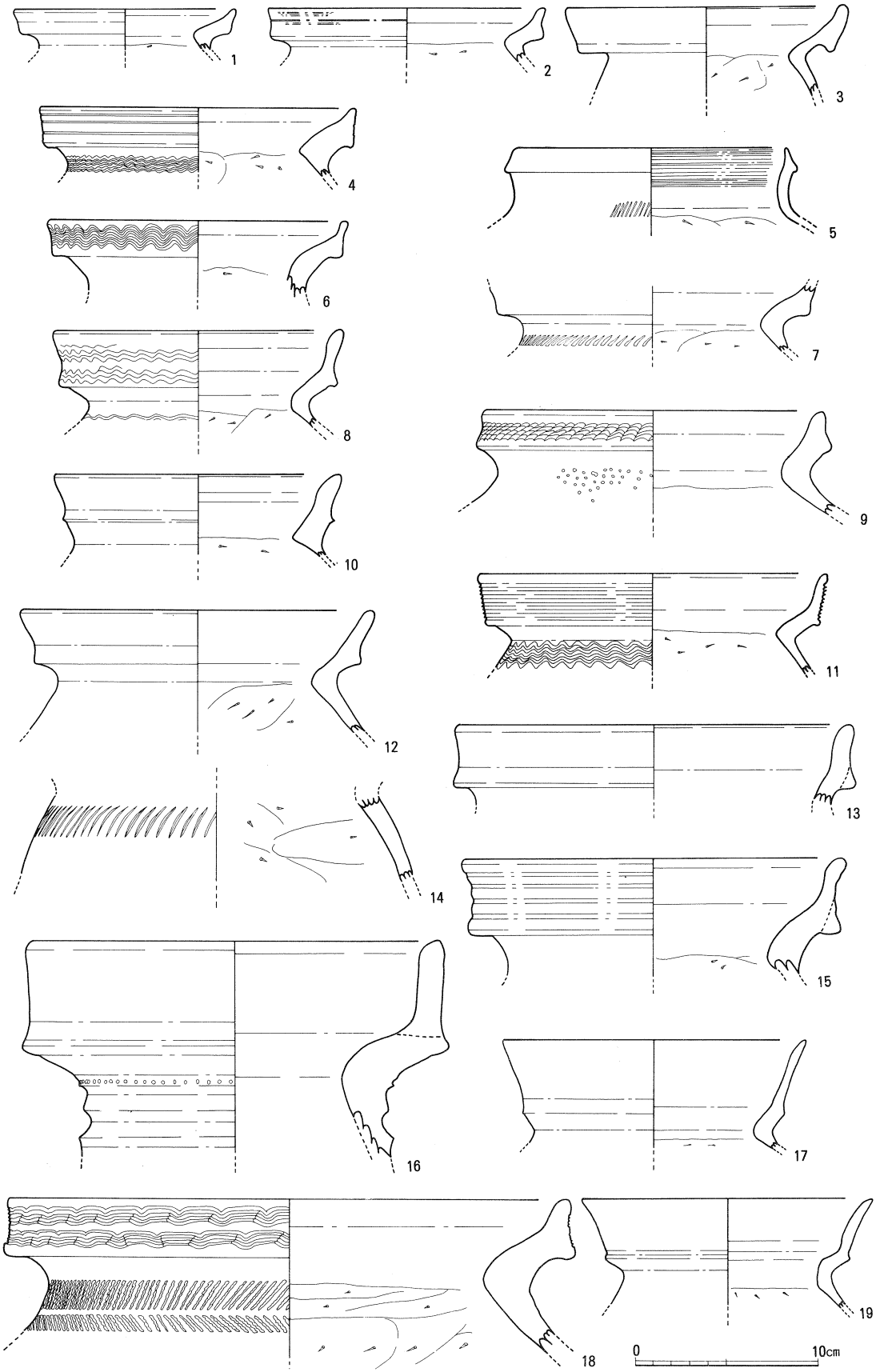
２は口縁外部にかすかに沈線が確認できる。５は壺であり、内外面共にハケメ調整が施され、内面頸部以下はケズリである、頸部外面にはヘラ状工具による刺突文がみられる[1]。石見Ｖ－１様式と思われる[13]。４・６・８・11・18には口縁部外面や片部（頸部）に、櫛状工具による直線文や波状文がみられる。８は口縁部がやや肥厚している。これらは石見Ｖ－３様式と考えられる。16は複合口縁の壺であるが、頸部に刺突文と突帯文を持っている(図版15ａ.)。器厚最大約2.5cmを測る。18は口縁部外面に櫛描扇廉状文？を施し、肩部に綾杉状に刺突（列点）文を施した甕である（図版15ｂ.)。17・19は後期終末期の甕である。17の口縁端部が尖っているのに対し19は端部をやや扁平に調整している。石見Ｖ－４様式に対応する。



第31図　菅城遺跡　流れ込み遺物実測図（1:3）

第31図　菅城遺跡流れ込み遺物観察表

31図	器種		口径 cm	残高 cm	土器表面残存状態	胎土	調整				色調		時期	調査区
							口縁部外面	口縁部内面	内面頸部以下	外面頸部～片部	外面	内面		
1	弥生土器	広口壷	26.8	2.8	不良	1mm以下の砂粒を含む：密	2条の凹線文	3条の凹線文	／	ナデ？	浅い黄		中期中葉	C－5
2	弥生土器	壷	／	4.3	不良	1mm以下の砂粒を含む：密	／	／	ナデ	頸部2条の指頭圧痕文帯	鈍い黄橙	灰	中期中葉	試W－H－3 C－5
3	弥生土器	広口壷	／	8.6	良好	1mm以下の砂粒を含む：密	／	波状・沈線・刺突	ナデ	頸部4条以上の突帯文	鈍い黄橙		中期中葉	G－5



第32図　菅城遺跡　流れ込み遺物実測図（1:3）

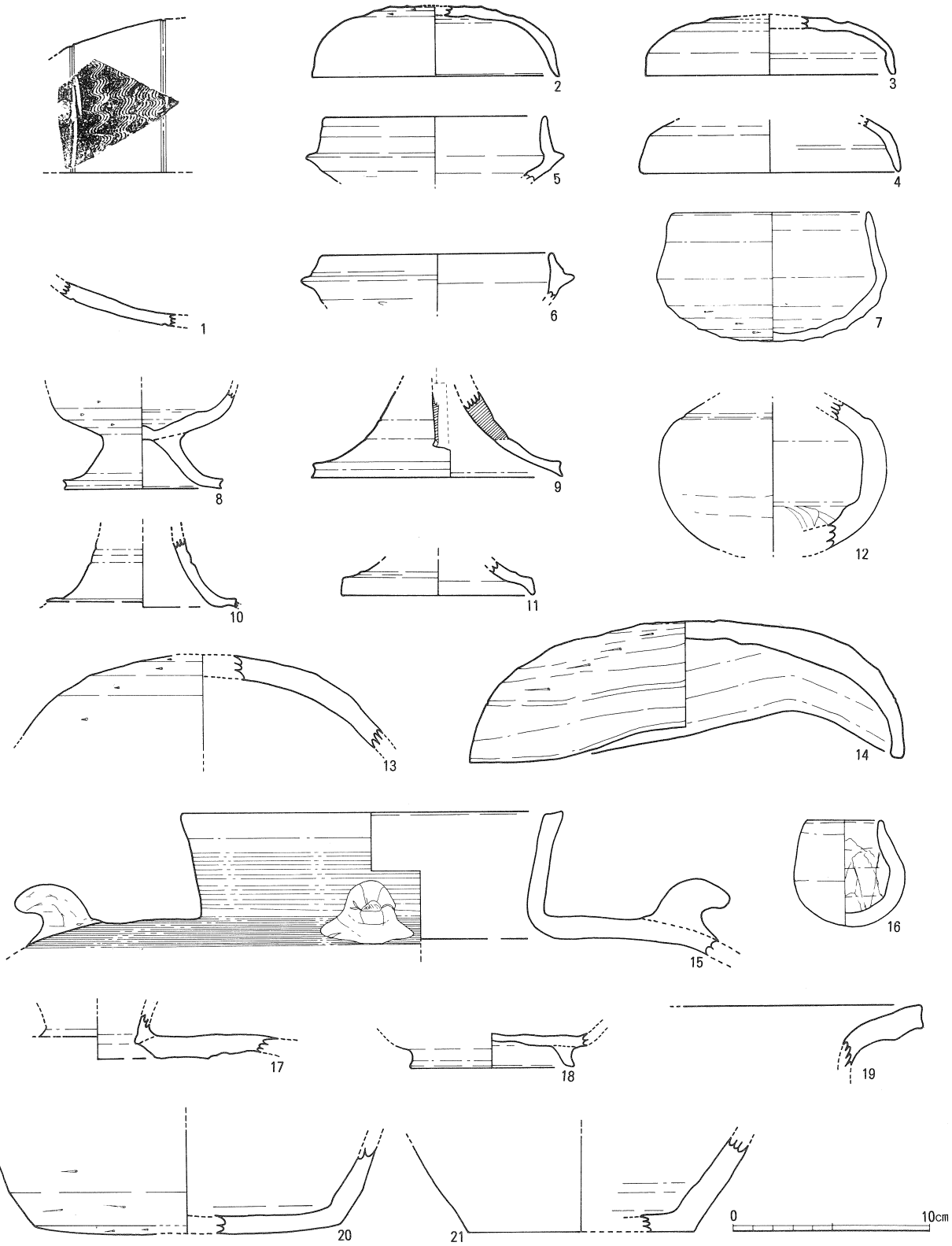
第32図　菅城遺跡流れ込み遺物観察表

32図	器種		口径 cm	残高 cm	土器表面残存状態	胎土	調整				色調		外面煤	時期	調査区
							口縁部外面	口縁部内面	内面頸部以下	外面頸部～片部	外面	内面			
1	弥生土器	甕	12	2.2	不良	3mm以下の砂粒を多量に含む：粗	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	鈍い黄橙	灰	／	後期	E－2
2	弥生土器	甕	15.3	2.5	不良	2mm以下の砂粒を含む	沈線文？	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	浅い黄橙		／	後期	F－4
3	弥生土器	甕	15.2	4.5	良	3mm以下の砂粒を多量に含む：粗	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	鈍い橙	橙	／	後期	E－2
4	弥生土器	甕	17.5	3.7	良	2.5mm以下の砂粒を含む	3条の凹線文	ヨコナデ	ヘラケズリ	波状文	鈍い黄橙	灰黄褐	／	後期	E－3
5	弥生土器	壷	14.8	4.4	良	3mm以下の砂粒を含む	ハケメ	ハケメ・ヨコナデ	ヘラケズリ	刺突(列点)文	褐灰	灰褐	有	後期	C－5
6	弥生土器	壷？	16.4	4	良好	2mm以下の砂粒を含む	波状文	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	鈍い黄橙	灰白	有	後期	F－5
7	弥生土器	甕	／	3.2	良	3mm以下の砂粒を含む	ヨコナデ？	ヨコナデ	ヘラケズリ	刺突(列点)文	鈍い黄橙	灰黄褐	／	後期	F－5
8	弥生土器	甕	15.9	5.5	良好	2mm以下の砂粒を含む	波状文	ヨコナデ	ヘラケズリ	波状文	鈍い黄橙		／	後期	E－3
9	弥生土器	甕	18.2	5.7	不良	3mm以下の砂粒を微量含む：密	波状文	不明	ヘラケズリ	不規則な刺突文（列点）	灰黄褐	浅い黄	／	後期	E－2
10	弥生土器	甕	15.6	4.5	不良	5mm程度の砂粒を多量に含む：粗	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	鈍い黄橙		／	後期	E－2
11	弥生土器	甕	19	5.3	良好	3mm以下の砂粒を多量に含む	櫛描沈線文	ヨコナデ	ヘラケズリ	波状文	鈍い黄橙		有	後期	G－7
12	弥生土器	甕	19	6.6	不良	3mm以下の砂粒を多量に含む	／	／	ヘラケズリ	／	浅い黄橙～鈍い黄橙		／	後期	F－5
13	弥生土器	甕	21.5	4.5	不良	2mm以下の砂粒を多量に含む	ヨコナデ？	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	鈍い黄	浅い黄	／	後期	E－2
14	弥生土器	甕	／	4.8	良好	3mm以下の砂粒を多量に含む	／	／	ヘラケズリ	刺突(列点)文	浅い黄		／	後期	F－5
15	弥生土器	甕	20.7	6.5	良	3mm以下の砂粒を多量に含む	4条の凹線文	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	浅い黄橙		／	後期	E－3
16	弥生土器	壷	22.4	11.9	不良	3mm以下の砂粒を多量に含む：粗	ヨコナデ？	ヨコナデ	／	3条以上突帯文・刺突	浅い黄橙	明褐灰	／	後期	E－4
17	弥生土器	甕	16.6	6	不良	1mm以下の砂粒を少量含む：密	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	浅い黄橙		／	後期終末	E－2
18	弥生土器	甕	30.8	8.5	良好	3mm以下の砂粒を多量に含む：粗	2条の櫛描扇簾状文？	ヨコナデ	ミガキ・ヘラケズリ	綾杉状に刺突（列点）文	灰褐	褐灰	／	後期	F－3
19	弥生土器	甕	16	6	良	1mm以下の砂粒を少量含む：密	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	灰黄		／	後期終末	E－2

第33図　須恵器は５層から13層に含まれたが、９層以降は中世の客土に混入したものと思われ、細片であった。本図の須恵器は５層からのものである。遺物１は樽型瑳の可能性を考えているものである（図版15ｃ.）。２・３・４は坏蓋で、４は大谷編年出雲５期か。２は７に焼成か酷似する。５は蓋坏で出雲２期後半のもの。６も蓋坏であるが出雲４期か。７は鉢。遺物12－１と同製品で、６世紀末～７世紀初頭と思われる（図版15ｄ.）。８は低脚無蓋高坏で透かしの無いもの、出雲５～６期と考えられる。９は、おそらく長脚無蓋高坏の脚端部で出雲５期。12が、瑳の体部であれば出雲４期末～６期初か。器厚が1.4cmもある。14は昭和47年出土。おそらく15のような甕の蓋として製作されたものと思われるが、全体に大きく歪んでいるものの、内面に磨耗痕は認められない。口径約23cm、器厚最大約1.6cmを測る。山本編年Ⅲ期と共通性が認められる（図版15ｅ.）。15は鍵状把手を持つ甕。肩部が張っている（図版15ｆ.）。16は小型丸底壺（坩）であるが。口縁端部が発達していない（図版16ａ.）。17は

平瓶。把手は無く、体部上面が扁平であることから、体部は台形状を呈すものであろう。18は輪高台を持つ壺、または坏・碗の底部である。19は、甕の口縁部、21・22は壺の底部と思われる。

以上、流れ込みによる須恵器の大半は、遺構（ＳＢ）等の時期と重なる６世紀末～７世紀前半のも



第33図　菅城遺跡　流れ込み遺物実測図（1:3）

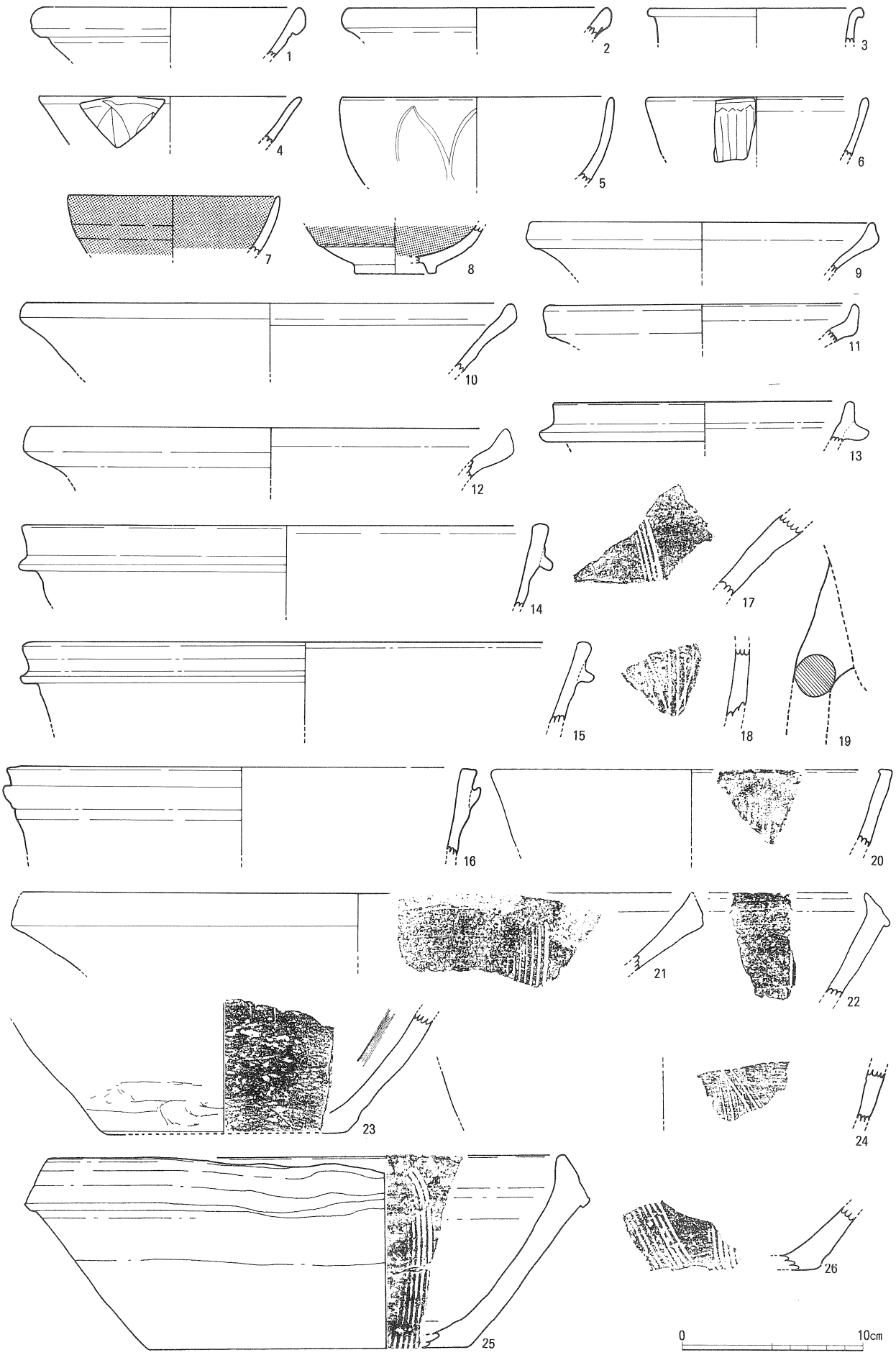
第33図　菅城遺跡流れ込み遺物観察表

33図	器種		口径 cm	底径 cm	器高 cm	残高 cm	焼成	胎土	調整等	色調 外面	色調 内面	時期	調査区
1	須恵器	樽型瓶	／	／	／	5.8	良好	砂粒は認められない：密	外面：１～２条の沈線で区画された中に３段の波状文。内面：ナデ	青みの灰	断面赤灰	陶邑編年Ⅰ形式Ⅱ段階か。	S47年出土
2	須恵器	坏蓋	12.4	／	／	3.2	良好	2mm以下の砂粒を微量含む：密	外面：口縁部回転ナデ。天井部回転ヘラケズリ。内面：回転ナデ。	灰白~灰	灰白	6世紀後半～7世紀前半	E－3他
3	須恵器	坏蓋	12.7	／	／	3	良好	3mm以下の砂粒を少量含む：密	外面：口縁部回転ナデ。天井部回転ヘラケズリ。内面：回転ナデ。	灰	断面赤褐色	6世紀後半～7世紀前半	E－3他
4	須恵器	坏蓋	13	／	／	2.7	良好	0.5mm以下の砂粒微量含む：密	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ。内面：回転ナデ。	灰		6世紀後半～7世紀前半	F－6
5	須恵器	蓋坏	11.2	／	／	3.4	良好	3mm1粒、0.5mm以下砂粒含：密	回転ナデ、外面底部回転ヘラケズリ。	青みの灰 灰	断面赤灰	6世紀後半～7世紀前半	F－3
6	須恵器	蓋坏	11.4	／	／	2.4	良	2mm以下の砂粒を少量含む：密	回転ナデ、外面底部回転ヘラケズリ。	灰白		6世紀後半～7世紀前半	D－4
7	須恵器	鉢	10	3.4?	6.6	／	良好	3mm以下の砂粒を少量含む：密	回転ナデ、外面底部回転ヘラケズリ。一部に自然釉とクッツキ有り。	灰白~灰	灰白	6世紀後半～7世紀前半	E－4他
8	須恵	低脚無蓋高坏	／	8	／	5	良好	2mm以下の砂粒を微量含む：密	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ。脚部取付け後、接合部ナデ。脚部に釉。	灰	灰白	7世紀前半	C－5
9	須恵器	高坏	／	12.8	／	4.4	良好	2mm以下の砂粒を含む：密	脚部：外面回転ナデ、２条沈線。内面回転ナデ。２方向の透かし窓か。	灰、砂粒の周りが青灰		7世紀前半	C－5
10	須恵器	高坏	／	約10	／	3.6	良好	2mm以下の砂粒を含む：密	脚部：外面回転ナデ、２条沈線。内面回転ナデ。一部に自然釉。	灰		7世紀前半	D－5
11	須恵器	高坏	／	9.6	／	1.7	良好	0.5mm以下の砂粒を微量含む：密	脚部：外面回転ナデ、脚端部の上に１条の陵。内面回転ナデ。	灰		7世紀前半	F－5
12	須恵器	瓶又は壺	／	胴部外径：11.5		7.4	良好	2mm以下の砂粒を含む：やや粗	外面：ヘラケズリ後？ナデ、片部１条沈線。内面：ナデ、底部指圧痕？	灰		6世紀後半～7世紀前半	F－5
13	須恵器	甕の壺?	／	／	／	4.8	良好	2mm以下の砂粒を含む：密	外面：回転ヘラケズリ。内面：ナデ（指ナデ痕）。器壁最大1.4cm。	灰		6世紀後半～7世紀前半	G－7
14	須恵器	甕の壺?	22~25	／	7.3	／	良好	3mm以下の砂粒含。	外面：口縁部ナデ、重焼痕？、陵(沈線)を施し上半部ヘラケズリ。内面：ナデ。口縁部を焼成前に修復した痕。歪み大。器圧最大1.6cm。	灰			S47 G－6
15	須恵器	甕	19.3	／	／	6.7	良好	3mm以下の砂粒を多く含む。	外面：口縁部カキ目、片部カキ目、叩き目、鍵状把手３本か。内面口縁部回転ナデ、以下青海波文。	青みの灰		6世紀後半～7世紀前半	E－3 F－5
16	土師器	小形丸底壺	3.7	?	5.4	／	良好	3mm以下の砂粒を含む。	手尽くね（坩）外面：指ナデ。内面：指跡痕。	浅黄橙			E－3
17	須恵器	平瓶	基部径：5.9		／	2.3	良好	2mm以下砂粒含：密	回転ヘラケズリ、基部を付けナデ。内面：頚部、接合部ナデ、体部調整無？指痕。把手無。基部が体部の中心線からずれている。	灰白			C－5
18	須恵器	壺・坏?	／	8.5	／	1.8	良好	2mm以下の砂粒を含む：密	外面（底部）回転ヘラケズリ後、付け高台（輪高台）ナデ。内面：ナデ。	灰	断面：灰褐	8世紀～9世紀	試W-G-2・B-4
19	須恵器	甕	／	／	／	3.1	良好	2mm以下の砂粒を含む：やや粗	残存部回転ナデ。基圧最大1.5cm。	灰			C－2
20	須恵器	甕・壺?	／	15.4	／	4.4	良	2mm以下の砂粒を含む：密	外面：体部、底部回転ヘラケズリ。内面：回転ナデ。	灰白		8世紀～9世紀	B－6とG－6
21	須恵器	甕・壺?	／	11.6	／	4.8	良好	2mm以下の砂粒を少量含む：密	外面：体部丁寧なナデ、釉痕。底部丁寧なナデ？。回転ナデ。	灰白、体部は灰		8世紀～9世紀	G－5

のであるが、１が陶邑編年Ⅰ型式２段階のものであれば、邑智群内でこの段階の須恵器は４ヵ所で発見されているに過ぎない[1]ものや、また17・18等、およそ７世紀末から９世紀代も微量出土した。

第34図　５層ないし８層から14層にかけ、12世紀から16世紀の出土遺物があった。しかし、第３章で断ったとおり、流れ込みによる遺物であることと、調査員の未熟さから色調の近い堆積土の平面上での分層ができず一括して取り上げる結果となってしまったため、層別の遺物観察ができなかった。

遺物は34－１・２・３は白磁器（中国製）で、１・２は玉縁の碗、３は壺の口縁部である。遺物34－４・５・６は、中国浙江省龍泉窯製の青磁器であり、蓮弁文碗である。（図版16ｂ.）

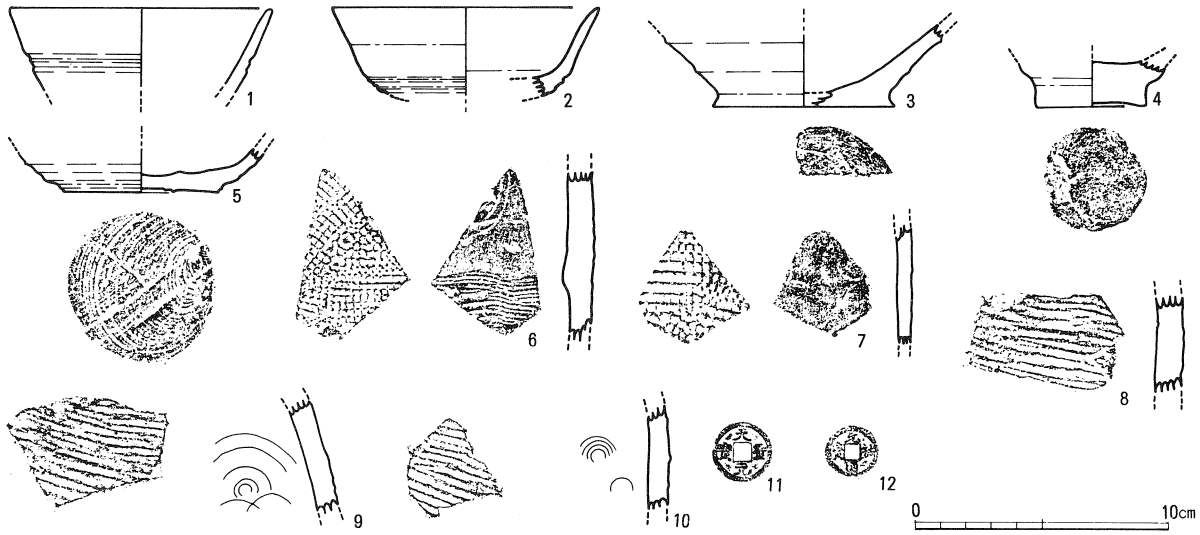


第34図　菅城遺跡　流れ込み遺物実測図（1:3）

第34図　菅城遺跡流れ込み出土遺物観察表

34図	器種		口径 cm	底径 cm	器高 cm	残高 cm	備考 色調（釉調）・使用痕・調整・焼成等	製作地・製作年代	調査区
1	磁器	白磁碗	／	／	／	2.9	玉縁の白磁碗　太宰府 型式：碗XIV類　淡灰白色釉　太宰府 編年：II類頃	江南地方　北宋後～南宋　11世紀中葉～12世紀前葉	E－6
2	磁器	白磁碗	／	／	／	1.7	玉縁の白磁碗　太宰府 型式：碗XIV類　淡灰緑色釉　太宰府 編年：II類頃	江南地方　北宋後～南宋　11世紀中葉～12世紀前葉	不明
3	磁器	白磁碗	11.8	／	／	2	玉縁の白磁壷　淡灰白色釉　カセ：有	中国製	C－6
4	磁器	青磁碗	14.6	／	／	2.6	片切彫　鎬連文碗　(澄青色)粉青色釉？　貫入：無	(民窯)　龍泉窯　南宋～元　13世紀中葉～14世紀前葉	E－2
5	磁器	青磁碗	15	／	／	4.9	片切彫　蓮弁文碗　(澄青色)粉青色釉？　貫入：無	(民窯)　龍泉窯　元～明　14世紀中葉～15世紀前葉	B－6
6	磁器	青磁碗	12	／	／	3.4	線（細）描蓮弁文碗　濃いオリーブ色釉　貫入：有	(民窯)　龍泉窯　明　15世紀後半～16世紀	E－6
7	陶器	黒釉碗	11.8	／	／	3.3	天目茶碗　黒釉・口縁部アメ釉　口縁下が一段凹んでいない	胎土：密で、素地が良い。中国製？	~~試E-E-6~~
8	陶器	黒釉碗	／	4.7	／	2.7	天目茶碗　釉は１㎜に満たないが、見込みと釉垂れ部が厚い。特に内面の釉、断面に小さい気泡が多いが、色質は黒曜石の様		C－6
9	中世須恵器	片口(こね)鉢	18.6	／	／	2.8	片口部：無　焼成：不良　色調：灰黄	東播系 II期II段階　鎌倉　12世紀中葉～13世紀後半	F－6
10	中世須恵器	片口(こね)鉢	27.2	／	／	3.9	片口部：無　焼成：良好　色調：灰。口縁部外面：燻し銀・重ね焼痕	東播系 II期II段階　鎌倉　12世紀中葉～13世紀後半	E－2
11	中世須恵器	片口(こね)鉢	17	／	／	2.1	片口部：無　焼成：不良　色調：灰黄。口縁部外面：燻し銀・重ね焼痕	東播系 II期II段階　鎌倉　12世紀中葉～13世紀後半	C－7
12	中世須恵器	片口(こね)鉢	26.6	／	／	2.8	片口部：無　焼成：良好　色調：灰。口縁部外面：燻し銀・重ね焼痕	東播系 II期II段階　鎌倉　12世紀中葉～13世紀後半	D－6
13	土師質（瓦質？）土器	土釜	16	／	／	2.2	瓦質焼成　焼成：良好　外面：燻し銀色。内面：灰色・調整外面：回転ナデ、内面：丁寧なナデ	鎌倉～室町？　中　世	D－2
14	土師質土器	土釜	29.2	／	／	4.7	色調外面：煤の為不明、内面：鈍い褐・焼成：良好・胎土：密１㎜以下砂粒微量含・調整内面：丁寧なナデ	鎌倉～室町？　中　世	F－5
15	土師質土器	土釜	31.2	／	／	4.6	色調外面：煤の為不明、内面：鈍い黄褐・焼成：良好・胎土：密１㎜以下砂粒微量含・調整内面：回転ナデ	鎌倉～室町？　中　世	F－5
16	土師質土器	土釜	26	／	／	5	色調外面：煤、内面上部：灰、下部：褐・焼成：良好・胎土：密１㎜以下砂粒微量含・調整内面：指ナデ痕	鎌倉～室町？　中　世	F－3
17	陶器（せっ器）	備前擂鉢	／	／	／	4.6	色調：暗青　青備前。焼成：良好。胎土：0.5㎜多含。調整：両面ヨコナデ内面摩滅５条の櫛目	備前II期後半～III期　13世紀後半～14世紀	B－5
18	土師質？中世須恵器	擂鉢		／	／	3.9	色調：外面鈍い黄橙、内面黄灰。焼成：不良。胎土：密２㎜砂粒微量含む。調整：両面ヨコナデ？、内面摩滅、４条以上の櫛目	中　世	F－3
19	土師質土器	足付き土釜（鍋）	／	／	／	7.6	胴部と脚部の付根部分　山口(県)系　色調：鈍い橙・全面に煤付着・焼成：良好。胎土：粗４㎜大砂粒含・調整：不明	鎌倉　12後半～13世紀？	E－6
20	土師質？中世須恵器	擂鉢	22.4	／	／	4.4	色調：灰黄。焼成：不良。胎土：密、１㎜砂粒微量含。調整：両面ヨコナデ？、内面摩滅、５条以上の櫛目	中　世	E－5
21	陶器(炻器)	備前擂鉢	37.2	／	／	4.5	色調：両面灰赤。焼成：良好。胎土：密。調整：両面ヨコナデ、外面重ね焼痕、内面７条の櫛目	備前IV期前半　室町　15世紀前半	G－6
22	陶器(炻器)	備前擂鉢	／	／	／	5.9	色調：外面赤味の灰・内面灰。焼成：良好。胎土：密。調整：両面ヨコナデ。口縁端部が上下に発達	備前IV期後半　室町　15世紀	C－3
23	陶器(炻器)	備前擂鉢	／	14	／	6.6	色調：外面鈍い橙・内面灰。焼成：良好。胎土：１㎜砂粒多量含。調整：外面ナデ・ヨコナデ、内面摩滅	備前IV期？　室町　15世紀頃	E－3
24	中世須恵器	擂鉢	／	／	／	2.9	色調：褐灰。焼成：良好。胎土：密。調整：外面不明、内面ヨコナデ、５条の櫛目	中　世	E－2
25	陶器(炻器)	備前擂鉢	28.6	17.8	10.9	／	色調：鈍い赤褐。焼成：良好。胎土：密。３㎜以下砂粒微量含。調整：両面ヨコナデ、内面摩滅痕７条櫛目	備前IV期後半　室町　15世紀後半	D－4・E－5
26	陶器(炻器)	備前擂鉢	／	／	／	3.6	色調：暗青　青備前。焼成：良好。胎土：１㎜砂粒含。調整：外面ヨコナデ後ナデ、内面摩滅痕７条以上櫛目	備前II期後半～III期　13世紀後半～14世紀	排土

以下、①横田賢次郎氏・森田勉氏の『太宰府出土の輸入中国陶磁器について－形式分類と編年を中心として－』[21]及び、②上田秀夫氏の『14～16世紀の青磁椀の分類について』[20]を参考に述べる。



第35図　菅城遺跡　流れ込み遺物実測図（1:3）

第35図　菅城遺跡流れ込み出土遺物観察表

35図	器種		口径 cm	底径 cm	器高 cm	残高 cm	備考 焼成・胎土・色調・調整等					製作年代	調査区
1	土師質土器	坏	10.4	／	／	3.4	カワラケ	焼成：良好・胎土：密１mm以下砂粒微量含・色調：鈍い橙・外面：２条の凹線・両面：回転ナデ				中　世	E－2
2	土師質土器	坏	10.7	／	／	3.5	カワラケ	焼成：良好・胎土：密２mm以下砂粒微量含・色調外面：鈍い橙、内面：橙・外面中程１条凹線？・両面：回転ナデ				中　世	F－6
3	土師質土器	椀	／	7	／	3.3	カワラケ	焼成：良好・胎土：密１mm以下砂粒微量含・色調：橙・両面：回転ナデ・内面底部：指ナデ・底部：回転糸切り痕				中　世	F－4
4	土師質土器	椀	／	2.4	／	1.8	カワラケ	焼成：良好・胎土：密２mm以下砂粒微量含・色調：鈍い橙・外面：回転ナデ・内面底部：指ナデ・底部：回転糸切？				中　世	F－4
5	土師質土器	坏	／	6.1	／	1.6	カワラケ	焼成：良好・胎土：密２mm以下砂粒微量含・色調：鈍い黄橙・内面：回転ナデ底部指ナデ・底部：回転糸切り痕				中　世	E－2
6	中世須恵器	甕	／	／	／	6.8	亀山窯系	外面：格子叩き目	内面：青海波文・板目状工具で横方向に削取った痕跡	色調両面：暗灰、断面：鈍い黄橙		鎌倉～室町	D－4
7	中世須恵器	甕	／	／	／	4.6	亀山窯系	外面：格子叩き目	内面：青海波文	焼成：不良・胎土：密１mm以下砂粒微量含・色調：鈍い黄橙		鎌倉～室町	E－2
8	中世須恵器	甕	／	／	／	3.9	亀山窯系	外面：平行叩き目	内面：ナデ？	焼成：不良・胎土：密１mm以下砂粒含・色調外面：黒灰、内面：灰、断面：鈍い黄橙		鎌倉～室町	不明
9	中世須恵器	甕	／	／	／	4.4	亀山窯系	外面：平行叩き目	内面：青海波文	焼成：良・胎土：密２mm以下の砂粒微量含・色調外面：黄灰、内面：灰黄		鎌倉～室町	C－5
10	中世須恵器	甕	／	／	／	4.2	亀山窯系	外面：平行叩き目	内面：青海波文	焼成：良好・胎土：密、２mm以下の砂粒微量含・色調外面：燻し銀、内面：褐灰		鎌倉～室町	D－4
11	銅銭	北宋銭	天聖元寳		無背		輸入銭、あるいは(模鋳(造)銭)	残存状態：良好	直径：2.5cm	重さ：2.8g	北宋　天聖元年～９年(1023～1031)		E－4
12	銅銭	北宋銭	元祐通寳		無背		輸入銭、あるいは(模鋳(造)銭)	残存状態：不良	直径：2.2cm	重さ：1.8g	北宋　元祐元年～８年(1086～1093)		E－5

遺物34－１・２は、口縁部の一部のみの出土であるが、特に１は玉縁がはっきりしており器肉も厚く、胎土中に黒い細粒が認められることから、①白磁碗Ⅳ類に相当し、その時期は①Ⅱ期（11世紀中葉から12世紀初頭）に対応すると思われるが、おおむね12世紀前葉と考えられる。

遺物34－４は、②外面体部に片切彫りの鎬連弁文を持ち、釉色は澄青。②のＢ－Ⅰに相当し、13世紀中葉から14世紀初頭のもの。５は②外面体部に片切彫りにより幅の広い連弁を表現するが連弁の盛り上りのないもの、釉色は澄青。②Ｂ－Ⅰ'あるいはＢ－Ⅱか。14世紀中葉から15世紀初頭と考えられ

る。６は②外面体部に線描蓮弁文を持つもので、ヘラ先による線描の連弁の山形の剣頭との単位にやや乱れが生じたもの、釉色は濃いオリーブ。②Ｂ－Ⅳ'か。15世紀後葉から16世紀と考えられる。

また４・５は、①の龍泉窯系青磁、蓮弁文碗Ⅰ－５に相当し、５は鎬のないⅠ－５－ａに、４は鎬のあるⅠ－５－ｂに分類される。

遺物34－７・８は黒釉碗で、いわゆる天目茶碗。碗口縁部の一部(7)と底部(8)が出土した。７は試掘時に出土し本調査区外からのものであるが、８と同一個体の可能性も感じたためここにとりあげた。釉は厚いところで１㎜には満たないものの、見込みと外面の釉垂れの部分が厚い。胎土密で素地の良いことも含め、中国製ではないかとの助言を頂いた[37]。天目台の出土はない。(図版16ｃ.)

遺物34－９～12は、東播系中世須恵器で片口鉢の口縁部の一部である。10は焼成も良く、口縁端部外面は燻し銀であり、重ね焼痕がある。他のものにも重ね焼痕はあるが焼成は良くない。森田稔氏の『中世須恵器』[8]の編年概念表を参考にすれば、口縁端部の形からⅡ期からⅢ期第１段階の範疇に納まりそうである。12世紀中葉から13世紀後半。(図版16ｅ.)

遺物34－13～16・19は、土釜（羽釜）である。19は（土鍋）の脚部であり、足付きのものは山口県に多くみられ、県内では高津川流域で出土があるとの御教授頂いた[37]。13の外面は燻し銀であり瓦質を呈し、焼成は遺物34－10と似ている。14～16･19は土師質のもので、外面全体に煤が付着している。

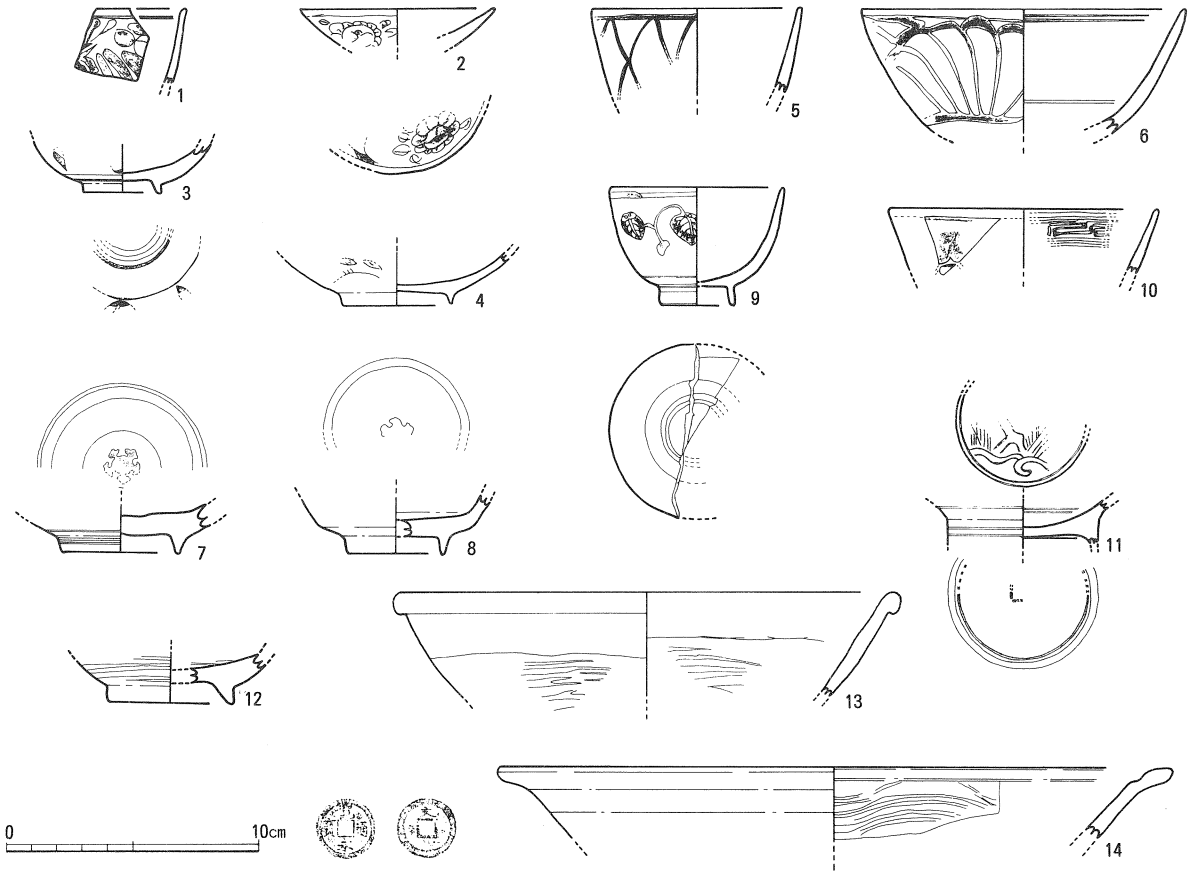
遺物34－18･20は土師質を呈する擂鉢であり、遺物34－24は中世須恵器で軟質の擂鉢である。産地・時期ともに不明である。

遺物34－17・21～23・25・26は備前焼の擂鉢である。以下、間壁忠彦氏の備前焼編年[25]を参考に述べる。まず17・26は青備前であり、条線があることからⅡ期後半からⅢ期（13世紀後半から14世紀）の可能性を考えている。21・22・25はⅣ期（15世紀）のもので、その口縁部の形態は21（前半）から22・25（後半）へと移行する。23は内面の磨耗が著しく、櫛がき条線をかすかに残すものである。

第35図　遺物35－１～５は土師質土器、いわゆるカワラケである。この土師質土器片は、本遺跡の中世・近世の遺物と比較して割合多い出土であるが、流れ込みで共伴性が薄いこともあり、時期（差）等よくわからず分類できなかった。ただ、輪高台を持つものはなく、すべて糸切り痕のあるものである。(図版16ｄ.）カワラケが主に饗宴や呪術的な使用物であれば、日常の食器として、図版16ｆ.などの漆器（木製品）を多用していたと考えられる[24][27]。尚、菅城遺跡の近くには屋号「瓦毛屋（カワラケヤ）」がある。(瓦を焼いた等、所以についての話は伝わっていない。)

遺物35－６～10は亀山系中世須恵器の甕片である。６・７は外面に格子叩き目、８～10は外面が平行叩き目のものであり、８以外の内面には青海波文の当て具痕が認められる。焼成は７は軟質で土師質に近く、６・８～10の表面は、両面共にほぼ燻し銀の瓦質を呈する。ただし、これらの土器は松江市大井町の大井古窯跡群中で生産した可能性が指摘されるなど、亀山窯焼の類似品である可能性もある[19]。

遺物35－11･12は北宋銭。天聖元寶（天聖年間1023～1031年）と元祐通寶（元祐年間1086～1093年）が各１枚出土した。広島県福山市の草戸千軒町遺跡で、亀山焼の甕に納められた多量の北宋銭を中心とする中国輸入銭の埋銭（備蓄銭）の例を参考にすれば、室町時代頃に使用されたものであろう。近年の見解では模鋳銭も存在するとのことである。



第36図　菅城遺跡　耕盤最下部包含遺物実測図（1:3）

第36図　耕盤である灰褐色土層（15層）の最下部から、江戸時代の肥前系陶磁器が出土している。右の表を参考に[26]、以下に述べる。

肥前陶磁の変遷（大橋康二氏）
Ⅰ 期　（1580年～1600年代）
Ⅱ 期　（1600年～1650年代）
Ⅲ 期　（1650年～1690年代）
Ⅳ 期　（1690年～1780年代）
Ⅴ 期　（1780年～1860年代）

遺物36－１～４は、釉上彩の色絵（赤絵）である。

遺物36－２は濃赤・薄赤・緑で牡丹が描かれており、遺物36－４も図柄は不明だが、かなり具体的に描かれていたものである。

遺物36－１・３は２・４に対し抽象化の進んだ図柄にみえる。遺物36－１は赤・青・黄を使用。色絵は天保４年（1647年）頃開始でⅢ期以降。

遺物36－５～10は釉下彩の染付で、いわゆる古伊万里である。

遺物36－５・６は、呉州による下絵付。遺物36－５は、外面に網文。

遺物36－７・８は、見込みに簡略化された五弁花文様を持つ碗で、遺物36－８は外面が青緑釉のものである。Ⅳ期（18期世紀）の後半と考えられる。（図版17ａ.）

遺物36－９は、呉州によるフタバアオイの下絵付である。この碗には焼継が施されていることから、Ⅴ期（19世紀）と考えられる。（図版17ｂ.）

遺物36－10は、呉州による下絵付である。内面口縁部に線描きの雷文、外面に白抜きによる図柄が描かれていたようである。（図版17ａ.）

遺物36－11は、呉州による下絵付である。詳細は不明だが、丁寧に具象的図柄が描かれ、高台内銘款（底裏銘）もあったと思われる。中国製陶磁器（青花）ではないかと御教授頂いている[38]。（図版17ａ.）

第36図　菅城遺跡耕盤最下部包含遺物観察表

36図	器種		口径 cm	底径 cm	器高 cm	残高 cm	備考 釉薬（彩）・文様・使用痕　等			製作地	時期	調査区
1	磁器	碗	／	／	／	3	釉上彩	赤絵（色絵）	外面：赤・青・黄。内面：赤の上絵付	肥前系	18～19世紀	A－4
2	磁器	碗	8	／	／	1.5	釉上彩	赤絵（色絵）	口縁：赤。外面：赤・緑で牡丹の上絵付	肥前系	18～19世紀	D－3
3	磁器	碗	／	3	／	2.1	釉上彩	赤絵（色絵）	外面：赤・緑で葉の上絵付。	肥前系	18～19世紀	排土
4	磁器	碗	／	4.5	／	2	釉上彩	赤絵（色絵）	外面：赤・緑の上絵付。外面にカセ（風化）	肥前系	18～19世紀	C－6
5	磁器	碗	8.4	／	／	3.4	釉下彩	釉裏青(染付)	外面：青で網文の下絵付	肥前系	18～19世紀	G－7
6	磁器	碗	13	／	／	5	釉下彩	釉裏青(染付)	外面：青の下絵付 こ青の下絵付	肥前系	18～19世紀	不明
7	磁器	碗	／	4.8	／	2	釉下彩	釉裏青(染付)	見込：簡略化された五弁花文(コンニャク印判)。重ね焼の痕跡	肥前系	18世紀	B－2
8	磁器	碗	／	4	／	2.5	釉下彩	釉裏青(染付)	外面：青磁釉。見込：簡略化された五弁花文（コンニャク印判）	肥前系	18世紀	F－4
9	磁器	碗	7	／	4.8	／	釉下彩	釉裏青(染付)	外面：青でフタバアオイの下絵付。焼継（鉛ガラス）	肥前系	19世紀	B－3
10	磁器	碗	11	／	／	2.5	釉下彩	釉裏青(染付)	外面：白抜き。内面：口縁部に雷文（線描）の下絵付	肥前系	18～19世紀	不明
11	磁器	／	／	6	／	1.7	釉下彩	釉裏青(青花)	外面：青。見込：具象的図柄下絵付。高台内：方形枠	中国製（青花）？	17～18世紀？	E－4
12	陶器	碗	／	5.2	／	2	釉下彩	灰赤色の素地に、両面白泥の刷毛目後、褐釉。削り出し高台		肥前系	18世紀頃？	E－2
13	陶器	皿	20	／	／	4.2	釉下彩	鈍い橙色の素地に、両面白泥の刷毛目後、褐釉		肥前系	18世紀頃？	C－2
14	陶器	皿	26.7	／	／	2.8	釉下彩	灰赤色の素地に、両面白泥の刷毛目後、褐釉		肥前系	18世紀頃？	B－3
15	銅銭	一文銭	寛永通寶	背に文・通の頭がコ			寛文八年(1668年)製、又はそれ以後の新寛永銭	直径：2.5cm	重さ：3.2g	江戸？	1668年？以降	B－4

遺物36－12・13・14は、椀及び皿と思われるもので、灰赤色の素地に白泥の回転刷毛目を施した後、褐釉をかけたもの。現川焼風のこれらの焼物は、Ⅳ期に対応すると考えられる。

遺物36－15は寛永通寶であり、背に**文**、通の頭が**コ**の字になっている。寛文８年(1668年）以降の、新寛永と呼ばれるものである。肥前陶磁の変遷でⅢ期以降となる。

結②　その他、報告できなかったものとして、(第４図) 調査区中央、Ｄ－４・Ｃ－４区の、ピット群がある。ＳＩ０２で少し触れたが、これらは間違いなくＳＩ０２埋没以降に掘り込まれたものである。平成５年の試掘調査でも、Ｗ－Ｈ－２（Ｄ－４区内）の重複するＰ２・３から須恵器、土師器の細片と、桃又は梅の種子を１個半分確認していることから[1]、当初ピット群は、須恵器片から他の遺構同様古墳時代後期のものを想像した。しかし隣接する他のピットには、底部に糸切り痕のある土師質土器を出土するものもあり、単純にピット群の共伴性を見いだすこと、つまり時代別に分けることができなかった。結局、調査員の未熟さと調査期間の問題によりピットの断面図がとれず、観察不足のため、柱の並びが判別できなかった。このことは貴重な羽須美村史の情報を活かすことができなかったこととして責任を感じる。

第５章　調査の成果と課題

羽須美村の埋蔵文化財調査は、昭和46年（1971年）に当時阿須那中学校教諭であった横山純夫氏が生徒と共に野伏原古墳の石室内を清掃・実測された例[2][4]を代表とし、その後も近隣町村の吉川正氏や振井久之氏の指導のもと行われてきた。平成７年（1995年）初めて羽須美村職員が本調査を行った。

菅城遺跡発掘調査の最大の成果は、縦型石匙から焼継の施された染付碗まで出土したことによって、これまでわかっていなかった戸河内柚ノ木（羽須美村）が、間違いなく縄文時代から綿々と受継がれてきた歴史の上に存在し、今を迎えているという基本的事実の判明にある。

遺構・遺物の詳細は、第４章での報告どおりであるので、本章では大まかな事項を述べる。

遺跡名となった小字「菅城（スゲシロ）」の所在は、調査区において正確にはＧ－６・７付近である。昔からこの場所は他所の水が渇れても水が湧く所で、牛に水をやるため遠くからでも来ていたという。調査の結果、実際に旧谷川が集まっており、地下水の路として機能していたことが判明した。

また、本遺跡の発端となった昭和47年（1972年）出土の30－１は、調査区Ｇ－６に対応する位置で暗渠排水用の土管を埋めるため掘削した折出土したとのことであったが、今回ＳＲ０３から同一個体が出土し23年ぶりに接合された。

遺構は、竪穴住居跡として弥生時代後期を２棟、古墳時代後期を１棟。古墳時代後期の掘立柱建物を２棟、土杭を１確認した。

建物跡の確認も本村では初めてである。ＳＢ０１の周溝を、恐らく水害の経験から、改良のために切り直していることに、素朴に感動したのを思い出す。今後の調査で村内外の事例と比較し検討してみたい。遺物についても、黒曜石・28－３・33－１・34－４・34－10・36－９等々、戸河内柚ノ木の先祖が、各時代により様々な地域の

時代別の主な遺構・遺物

縄　文		縦型石匙（安山岩） 黒曜石（隠岐産であろう）
弥　生	S101～02･(SR01～02)	中期前葉の甕 中期中葉の広口壷 中期後葉の甕（塩町式） 後期の甕や鼓型器台　等
古　墳 奈良平安	SI03･SB01～02･SK01 (SR03?)	中期の須恵器（樽型瓶） 後期の　〃　（蓋坏・甕） 須恵器（平瓶・坏）　等
中　世 平安末 ～室町 近世15 ・16ｃ		土師質土器 土釜・足付き土釜 中国陶磁器（白磁・青磁等） 中世須恵器（東播系・亀山系） 炻器（備前擂鉢） 北宋銭（天聖元寳・元祐通寳） 漆器・炉壁（鈩）　等
江　戸		肥前系陶磁器・寛永通寳　等

影響を受け生活していたことを、学びながら改めて実感した。

今後、横山純夫氏の業績や保管されている遺物との検討及び、それらの活用をはかっていきたい。

また遺跡の南、戸河内川を隔てた対岸の尾根は、「古墳が在りそうな所」と助言[5]を頂いていたが、調査中偶然その尾根の木が伐採され円墳を２基発見することとなった(第１図⑤)。１基は径約12mであった。踏査のみでありそれ以上は不明であるが、菅城遺跡とどう対応するのか興味が持たれる。

中世の事柄として、菅城遺跡から北方へ直線距離約1.9kmの所に鷲影(わしかげ)城（高橋氏）跡（第１図④）があり、城跡のある山頂は現在、大字阿須那大庭(おおにわ)[6]・大字戸河内の境界となっている。

鷲影城は、正平年間（1346年～1370年）初代高橋九郎左衛門師光（英光）により築造され、大永・享禄年間には高橋弾正盛光の居城であったと伝わり、軍原(いくさばら)の言伝えによれば享禄三年（1530年）頃毛利元就に討たれ、高橋氏は滅亡したとされる。その後間もなく毛利元就四奉行の一人、口羽（志路）刑部大輔下野守通良が口羽の地に配され、矢羽(やば)城跡を改修し琵琶甲(びわこう)城を居城とするのである[2][3]。

鷲影城跡には、30年程前ＴＶ塔が建てられた際、掘削した断面に甕が二つに切られる格好で出土し、その中にカワラケが詰まっていたという話を聞いた[7]。地鎮具と想像する（[8]の図版５と同様か）。

大庭には小字「殿屋敷」があり[9]、また寺院（庵）名（正満寺・西念寺・高正寺・福浄寺・法堂庵）を多く残す地である。

一方戸河内では、土橋(どばし)を思わせる屋号「土橋(ツチハシ)」があり、裏山の谷の小字「土橋(ツチハシ)」からは中世の可能性を持つ鉄滓を表採し(第１図②)、その家の前、現在畑となっている所には屋敷を思わせる石垣がある。また、この家は庄屋であったといわれており、大庭と比べて城との比高差の少ないこの地に「殿様が来られていた」という言伝えも聞かれる。この「戸河内」という地名は、高地・耕地さらに川（源流）に由来する語源も考えられるが[10]、「殿垣内」であるとすれば、在地領主（殿）の直営地であったことを意味する[9]とも考えられる。その他、柚ノ木地区には「御藏地・バンバ（馬場[9]・判場？）・瓦(カワラ)毛(ケ)屋・鋳物(イモノ)屋・ジュズ屋・御堂ノ前・石堂」等々の地名が残っており併せて興味深い。

また発掘現場上方の尾根に五輪塔の一部（風・空）が２個体程あり（第１図③）、土地所有者が野武士の墓として守られている。

中世の文献等について、第２章で『島根県の地名』[3]から、興味深い資料を引用させて頂いた。

以上、菅城遺跡の調査と、関連する情報から見えてくるものは、中世には大庭に土居的要素を、そして戸河内柚ノ木周辺では、耕作による生活だけではなく、在地領主を担う製鉄関係等の職人達を含む人々が活躍し賑わっていたと考えられる。正誤を含め今後の調査に期待する。

今回の発掘を通し、作業員を含め地元の方々と接するなかで、多くの昔話を聞くことができた。当然、証拠のあるものだけではないが、遺跡と関連し興味深いものも多く、調査の賜と感謝している。

尚、本書で図化できなかった遺物も多く、また遺物写真も実測図と対応するよう、今後の検討材料として宿題としたい。

人は時代背景によって実に様々なものを産み出すが、そこから不変・普遍性を感じ取ることが大切と思う。調査（本書）の内容はご覧のとおり多くの問題を抱えているが、羽須美村の礎となっている先人の力を、自らの力として頂ければと願うものである。

註（引用、参考文献・助言、指導内容）

1－吉川正　『戸河内柚ノ木　菅城遺跡試掘調査の概要』　羽須美村教育委員会　1993年

2－羽須美村誌編集委員会　『羽須美村誌上・下巻』　1987年・1988年

3－山本清　監修　日本歴史地名体系33　『島根県の地名』　平凡社　1995年

4－吾郷和宏　『江の川中流域における横穴石室の様相』　島根県考古学会誌第８集　1991年

5－水口晶朗氏、吉川正氏に助言を頂いた。

6－谷川健一　著　『民俗・地名そして日本』　同成社　1989年

7－瑞穂町郷土資料館に内１点保管されている。

8－中世土器研究会　編　『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社　1995年

9－千田嘉博・小島道裕・前川要　著　『城館ハンドブック』　新人物往来社　1993年

10－木村健次　著　『広島県北部の地名』　菁文社　1992年

11－羽須美村教育委員会・羽須美村文化財審議委員会　『羽須美の文化財』　1992年

12－水野清一・小林行雄　編　『図解　考古学辞典』　東京創元社　1994年(17版)

13－正岡睦夫・松本岩雄　編　『弥生土器の様式と編年　山陽山陰編』　木耳社　1992年

14－工楽善通　編　『古代史復元５　弥生人の造形』　講談社　1993年(４刷)

15－中村浩　著　『研究入門　須恵器』　柏書房　1990年

16－中村浩　著　『須恵器集成図録　第一巻　近畿編Ⅰ』　雄山閣出版　1995年

17－大谷晃二　『出雲地域の須恵器の編年と地域色』　島根考古学会誌　第11集　1994年

18－白石太一郎　編　『古代史復元７　古墳時代の工芸』　講談社　1994年(４刷)

19－松江考古学談話会　編集　『松江考古　第８号』　1992年

20－日本貿易陶磁器研究会　『貿易　陶磁研究　No.２』　1982年

21－横田賢次郎・森田勉　『太宰府出土の輸入中国陶磁器について　型式分類と編年を中心として』
九州歴史資料館　研究論集４　1978年

22－長谷部楽爾　今井敦　中国の陶磁12　『日本出土の中国陶磁』　平凡社　1995年

23－平成三年度春の企画展　『瀬戸内の中国陶磁』　広島県立博物館　1991年

24－松下正司　編　『よみがえる中世８埋もれた港町・草戸千軒・鞆・尾道』　平凡社　1994年

25－間壁忠彦　著　考古学ライブラリー60　『備前焼』　ニューサイエンス社　1991年

26－大橋康二　著　考古学ライブラリー55　『肥前陶磁』　ニューサイエンス社　1993年

27－矢部良明　編　『やきものの鑑賞基礎知識』　至文堂　1993年

28－野村泰三　著　『陶磁用語辞典』　カラーブックス432　保育社　1978年

29－編集人　諸角裕　『季刊　陶磁郎　１～４』　双葉社　1995年

30－矢部良明　著　『日本のやきもの史入門』　とんぼの本　新潮社　1992年

31－芸術新潮編集部　著　『やきもの鑑定入門』　とんぼの本　新潮社　1983年

32－出川直樹　著　『やきもの蒐集入門』　とんぼの本　新潮社　1990年

33－村山武　著　『窯別　日本のやきもの』　淡交社　1994年

34－矢部倉吉　著　『古銭と紙幣　収集と鑑賞』　金園社　1992年(改訂版)

35－日本貨幣商協同組合　『日本貨幣カタログ　1995年』

36－北九州市立考古博物館　『北九州の中国陶磁－出土品にみる古代の日中交流－』　1988年

37－西尾克己氏の教授による。

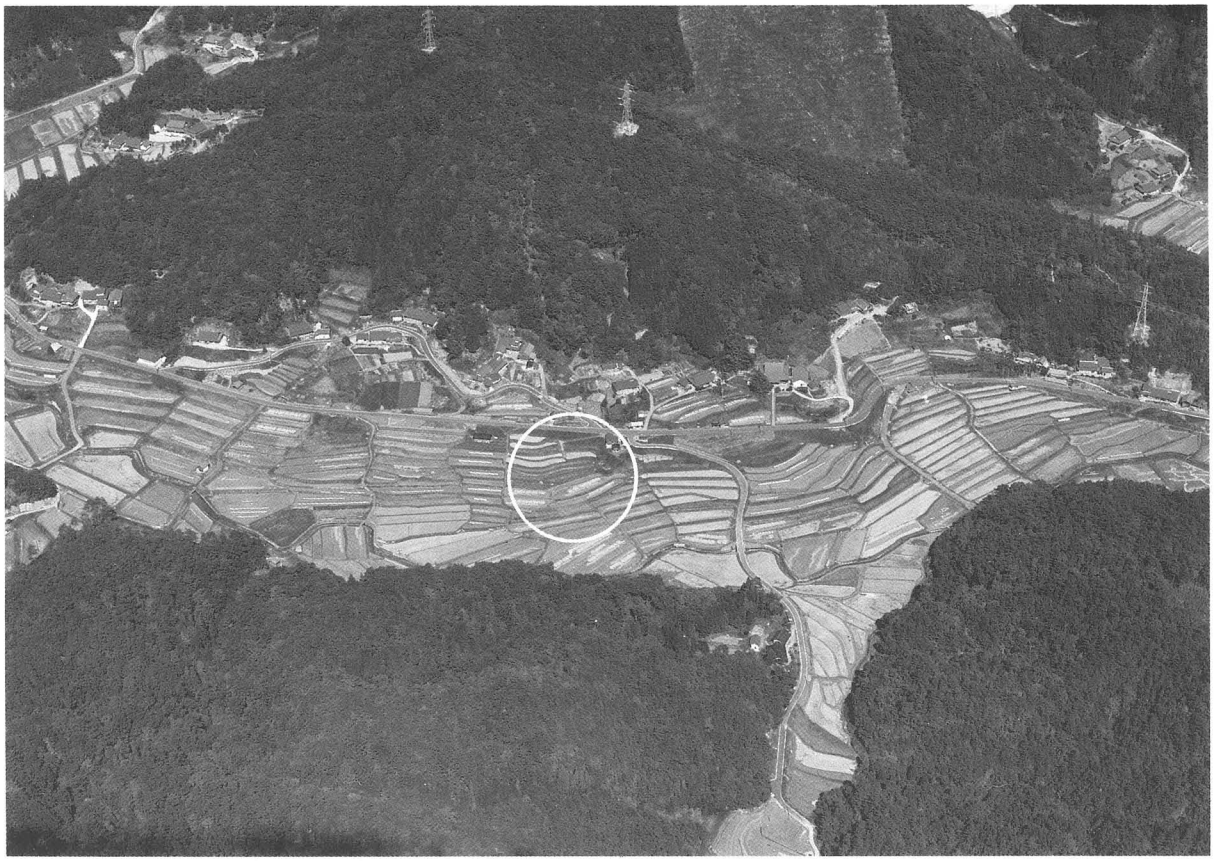
38－森岡弘典氏・広江耕史氏の教授による。

39－吉川正氏の教授による。

図　　版

凡　例

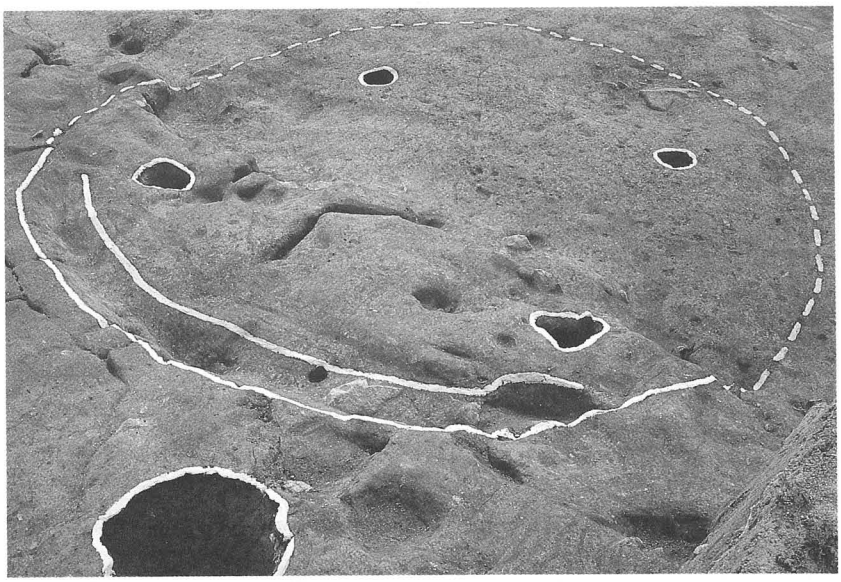
①図版中の出土遺物●▲－▲●は、挿図中の第●▲図▲●に対応する。
②図版中の西→は、被写体を西側から撮影したという意味。



a. 菅城遺跡　遠景　1989年　南→

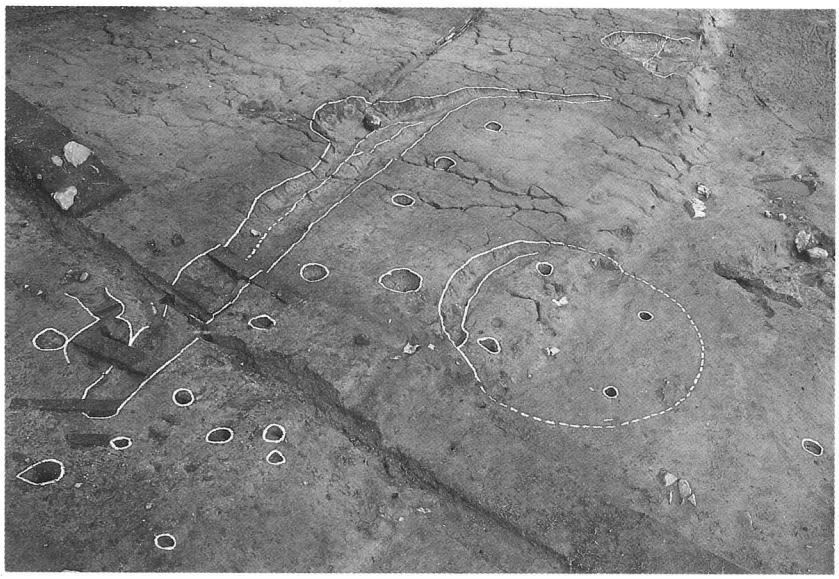
b. 菅城遺跡　発掘調査前　全景　南→

a. SI01・SB01
検出状況　南西→



b. SI01　北西→

c. SI01　遺物6→1
出土状況（Ｐ－１ 東南）



a. SB01・SI01
SK01　西→

b. SB01　周溝
土層堆積状況　東→

c. SB01　周溝
〔新〕遺物出土状況　東→

菅城遺跡

a. SI02　南西→

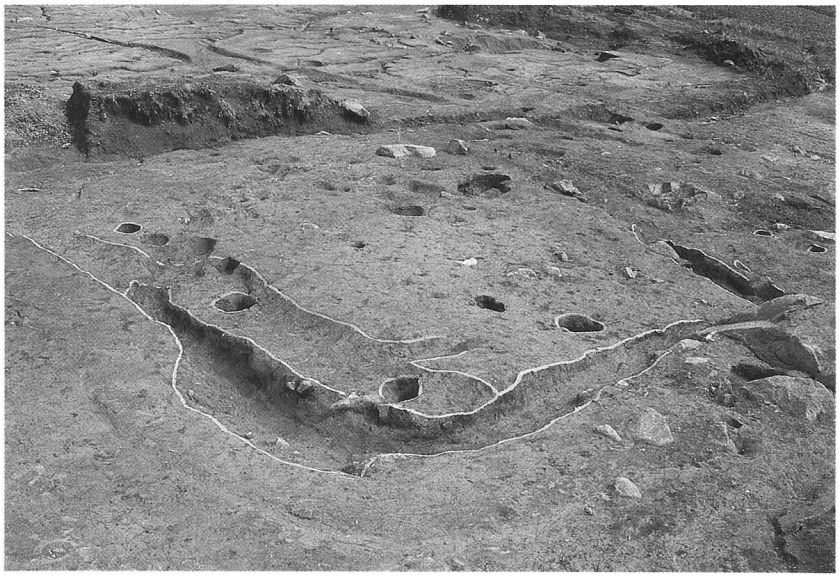
b. SI02　壁溝内
遺物9－2　出土状況

c. SI02　炉跡
遺物9－1　出土状況　東→

a. SI03　北西→

b. SI03　壁溝内
遺物12－1　出土状況　東→

c. SI03　壁溝内
炭化物出土状況



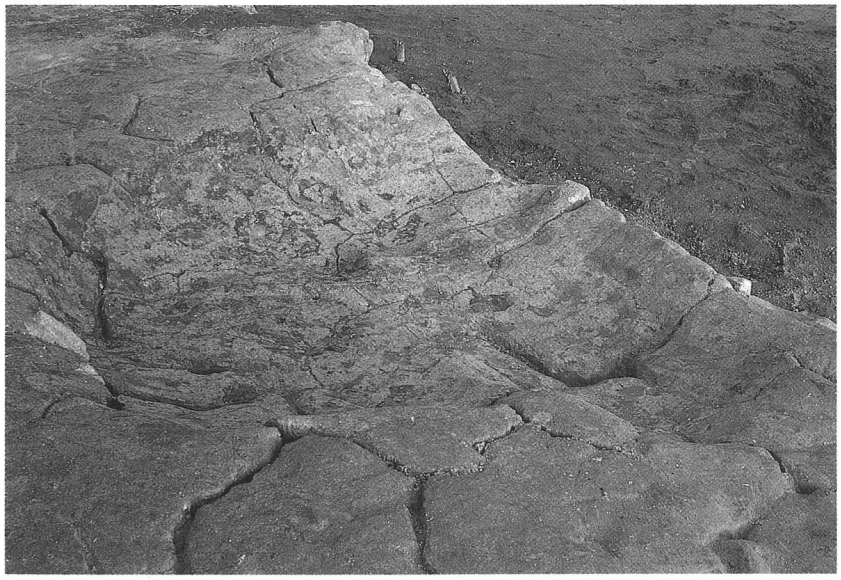
a. SB02　北西→

b. SB02　内
浅い溝検出状況　東→

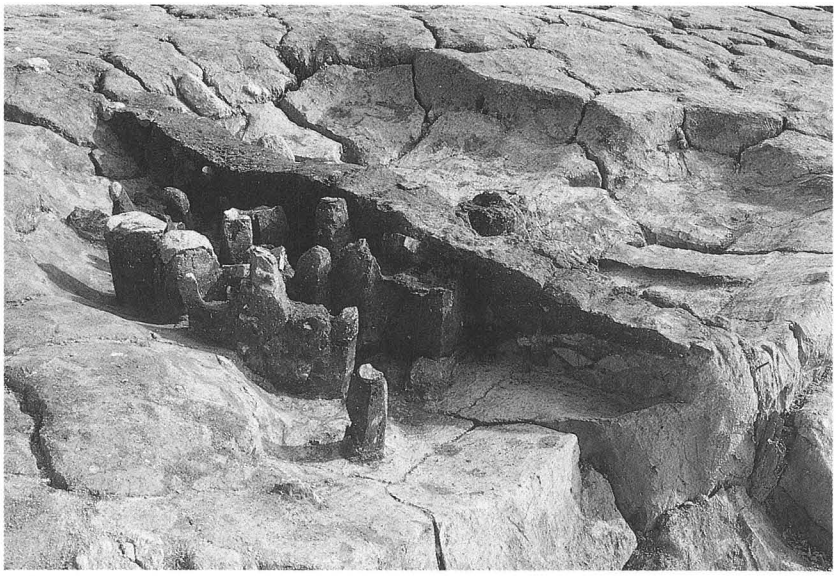
c. SB02　遺物出土状況
北西→

a. SB02　壁溝内
遺物18－3　出土状況

b. SB02　壁溝内
遺物18－4　出土状況　西→



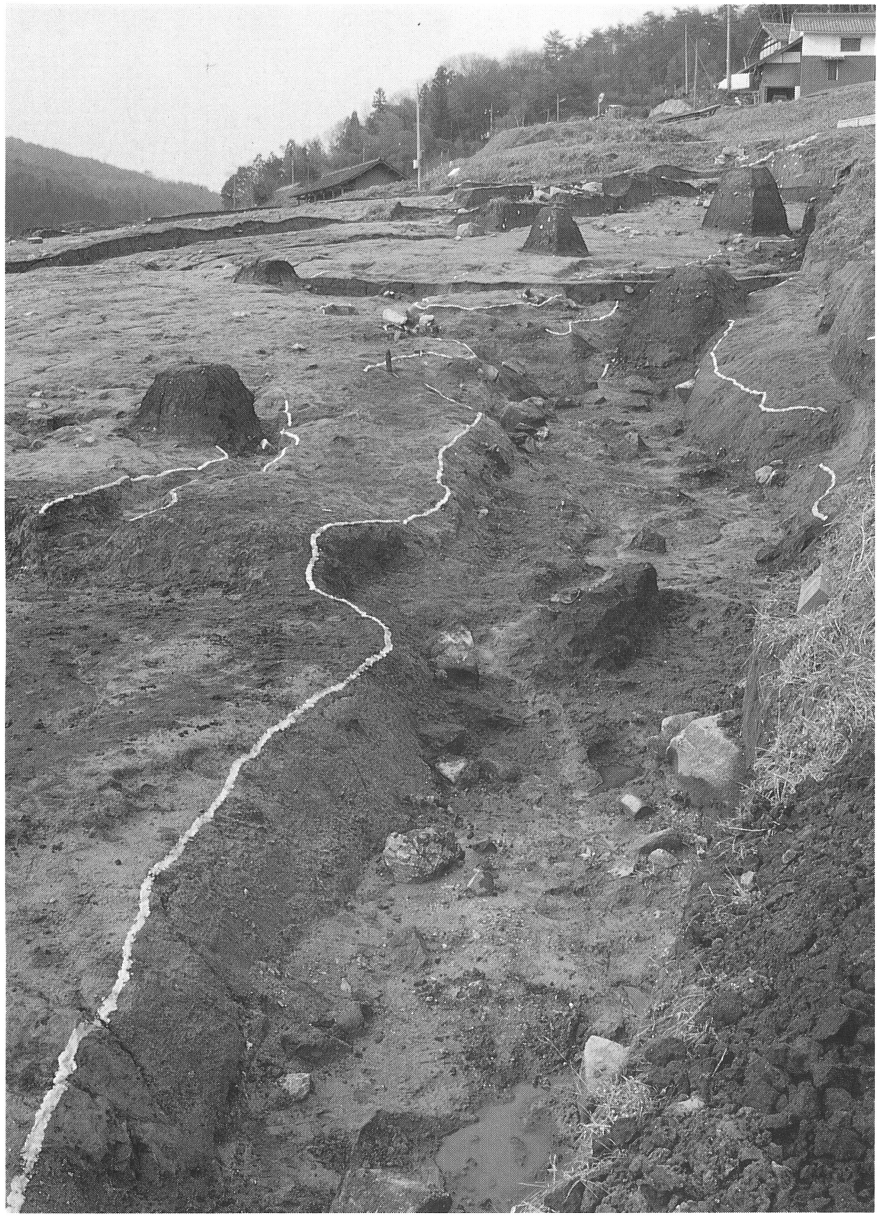
c. SK01　北西→



a. SK01　遺物出土状況
東→

b. SX01　東南→

c. SX01　土層検出状況
東南→



a. 旧谷川跡　南→

b. 旧谷川跡　北→